

3. 社会実験

公共空間をつかった新たな取り組みを行う場合、地域の合意形成を図りながら行っていくことが望ましい。河川敷地占用許可準則の特例占用やかわまちづくり制度でも、地域の合意形成は必要不可欠である。とはいえ、その地域の意思決定を行う者が、新しいことを許容するための判断材料を必ずしも持ち合わせていないということが多い。合意形成を必要条件としてしまっていることによって、新しいコトが起きる前に障壁になってしまうことがある。

社会実験的アプローチは、前もって合意形成を図った上で物事を進めるのではなく、小さい成功事例を積み重ねていくことによって、地域の意思決定を行う者たちの間でコンセンサスが得られていく手法である。

新しい取り組みについて地域で合意形成を図るためには、まず小さく実践してみることでその地域に適切な判断材料を提供することである。

3.1. 社会実験対象の設定

社会実験の対象区域は、中心市街地と市堀川を含む内川とが重なる部分とその周辺を想定する。

すなわち、中心市街地（ここでは平成17年和歌山市中心市街地活性化基本計画に示された基本計画区域）によって切り取られた河川（内川）とその周辺地域（水辺のまちづくりによって創出される都市魅力評価の影響の及ぶ可能性のある範囲をすべて含む）である。

図表 3-1-1 社会実験対象区域 想定図



3.2. 成果指標

これまでの社会実験といえば、実施して終わりという問題があるものが多かった。社会実験を通してどのような社会を実現したいかという大きな目標がそなわっていないことに起因する場合や、行政施策へ昇華する仕組みがそなわっていないことが原因の場合(*3-1)、あるいは民間が自らの責任でリスクを分担しなければならない部分を行政が予算措置をして負担してしまうことで、民間に期待を生じさせてしまい、主体的な参加を阻害している場合などが見られる。

なにより、社会実験は実験結果の評価・分析が大切であり、どのような成果指標をそれぞれの実験に対して設定するかが非常に重要である。

大事なことは、規制緩和をするうえで、安全性、地域の合意など公物管理者の懸念事項をとりのぞくことができるかどうかを実験するということである。社会実験をおこなったことによって、どのような反応が地域から得られたかなどを正確に記録し分析することも欠かせない指標である。

また、社会実験では地域の人々がその成果を実感できることがその後の施策反映にむけて大切なファクターになる(*3-2)ので成果をわかりやすく伝えることも重要である。

※本節に述べる各種調査方法等に関する検討及び調査方法案などは2016年度報告書作成時点による。実際の社会実験の成果指標となる各種調査は、これ等の検討などをもとに2017年度、2018年度ともその時点の現状に即して行った。

3.2.1. 管理者が規制緩和を行えるかどうかの判断するための指標づくり

道路や河川敷の一部を現在の目的と違う利用方法でつかうことを社会実験的に実現する場合、事前に管理者の懸念点を洗い出して懸念を払拭するための指標について整理をする必要がある。市堀川の河川管理者である和歌山県と出先機関である海草振興局は、河川法占用許可準則の都市・地域再生等利用区域の指定をおこなった事案がないので、これから指定基準をつくっていくという段階にある。

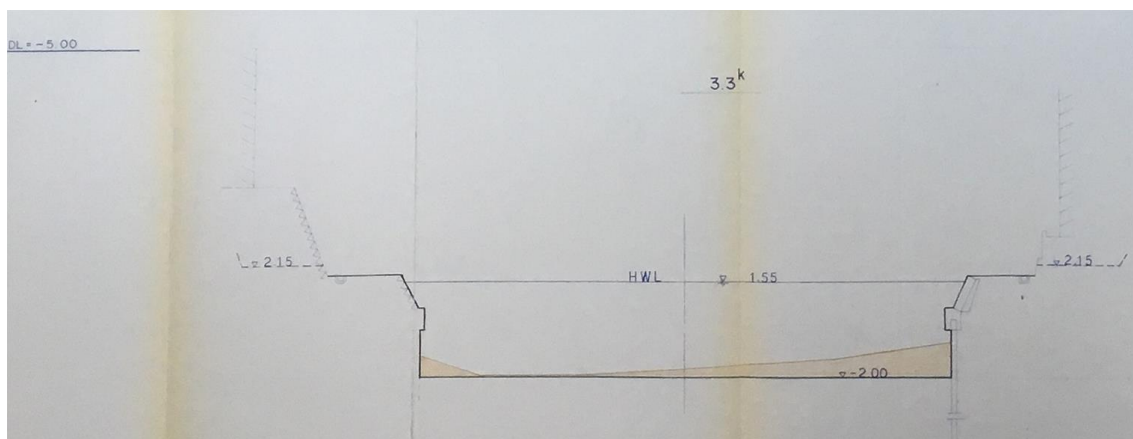
a) 治水上の懸念点に対する指標

河川敷地を使う場合、当然河川管理者と治水上、河川管理上の懸念については事前に相談をしておく必要がある。

市堀川周辺においては、遊歩道として整備された区域、遊歩道として整備されていないが護岸の平場部として整備されている区域、の二種類があり、このいずれもが、計画高水位(H.W.L.)の上であることが確認されており(図表3-2-1)、なにかものを置いても河積阻害を起こす心配がない。よって社会実験を行うのであれば、治水水面はクリアしやすい。

実際上問題ないかについては、社会実験を行った場合、実験期間中の水位の状況把握などが必要になることも考えられる。

図表 3-2-1 市堀川 3.3k ポストの河川横断面



b) 河川管理上の懸念点に対する指標

周辺の住民の合意形成において、その社会実験の主体が河川管理者ではなくあくまで社会実験の実施者にあることを確認した上で、地域へのサウンディング、地域からのフィードバックなどを社会実験の実施主体が責任をもって調査、分析し、管理者に伝えることが必要である。対象地である市堀川周辺では、遊歩道を整備した際に河川管理者と地域住民の間で関係構築をして、現状の管理状況（開放時間 9:00～17:00）

図表 3-2-2 遊歩道の管理状況



（図表 3-2-2）ができていく経緯を鑑みて、河川管理者は地域住民との合意形成に関して慎重に捉えている。この懸念点払拭のために、社会実験を行う際は地域の合意形成の状況を明確にして管理者に伝える必要がある。

3.2.2. 来街者のアクティビティ 「滞在時間」×「人数」

水辺空間の利活用により公共空間の質を高めることは、①対象空間の魅力や利便性を向上させるだけではなく、②周辺地区のイメージ改善、③中心市街地内における来街者の行動変化につながる可能性がある。従って、まちづくりの観点からは、公共空間利活用に係る社会実験において②、③に関しても効果を検証することが望ましい。そのためには事前及び実施中のデータとその取得方法が適切に計画される必要がある。

a) 従来方法の見直しから

① 利活用意義の明確化：「賑わい」 / 「回遊性」のあるまちとは？

中心市街地活性化を目的とした、従来の利活用事業では「賑わい」あるいは「回遊性」がキーワードとして頻繁に用いられてきた。両語は大変前向きなキーワードで、まちの目標に用いることへの同意は得やすい。しかし、波及させたい範囲や、それによる地域経済活性化

まで視野に入れるかなど、『「賑わい」や「回遊性」のある』具体的なまちの空間像が、少なくとも事業実施当事者間で共有されなければ、利活用で目指すべき到達点が曖昧になってしまう。

② 公共空間利活用は万能薬ではない

公共空間利活用は、対象地域の持つ空間のポテンシャルを引き上げるものである。例えば、自動車中心のライフスタイルにもかかわらず、近年公共空間の利活用事例が増加している米国都市（ミネアポリス市など）においても、「Goodな場をGreatに」という文脈で公共空間再編に力を入れている。

一方、地域価値について、公共空間利活用単独で、マイナスを0に（図表 3-2-3）、+1を+5に（図表 3-2-4）することが可能でも、マイナスをプラスに反転させることは難しい。利活用に合わせて、魅力のあるカフェや地域活動拠点をオープンするなど、沿道との連動性を持たせる一工夫が必要である。

図表 3-2-3 衰退した地域の住民/事業者の活動量を上げる

>デトロイトにおけるプレイスメイキング事例 (<http://www.crainsdetroit.com/>)



図表 3-2-4 車道の広場化で滞在者が増加、沿道の不動産価値向上。交差点改善を伴うことで、自動車ユーザーからも受け入れられた。

>ニューヨーク・プラザプログラム(三浦詩乃撮影)



③ ターゲットを絞った段階的改善

ユーザーの多様性への配慮やユーザーが置かれた状況への想像力を持った、デザインやマネジメントを試みた公共空間ほど、成功している。時間帯や、利用者の属性によって異なる利用傾向を把握した上で、まずはあるターゲットを設定し、(他のユーザーを排除しない方法で) 確実に満足させる空間設計のあり方が議論されることが望ましい。その繰り返して公共空間の質が高められる。

例えば、公共空間研究第一人者の Jan Gehl は、「滞在時間」×「人数」を指標として重視し、特に安心感のある空間づくりには、ターゲットに子ども、女性、お年寄り等が含まれるとよいと述べている。

デザインやマネジメントのプロセスで必要となるのは、アクティビティデータである。

通行量や売上高といったシンプルな量的データ、コンテンツ内容に関する質的データ(ユーザー評価・印象に対するアンケート等)はこれまでもとられてきたが、利活用実施箇所の選定や、交通規制のあり方に関する評価、ファニチャーのレイアウト改善等に役立てるには不十分である。

b) 来街者アクティビティデータ取得とそのメリット

アクティビティデータとは、簡潔に言えば、観察などによって得られた歩行者行動パターンを誰もが読み取りやすくビジュアライズしたものである。

無意識にユーザーが取る行動の分析や、コミュニケーション量のマッピングなど、分析の切り口を工夫することで、地価や通行量のみでは見えてこない、都市や公共空間のもつポテンシャルや課題を可視化することが可能である(事例1～3参照)。データベース化・公開されることで将来のまちづくり、合意形成にも活用できる。

図表 3-2-5 静岡市滞在活動調査

事例 1：静岡市滞在活動調査

* 横浜国大・交通と都市研究室実施

(赤：午前 緑：正午頃 青：午後)

滞在活動量の分布傾向が時間帯で異なることを可視化。例えば、七間町通りと御幸通りでは、歩行者通行量(H27)は同程度だが、滞在活動は前者の方が活発。



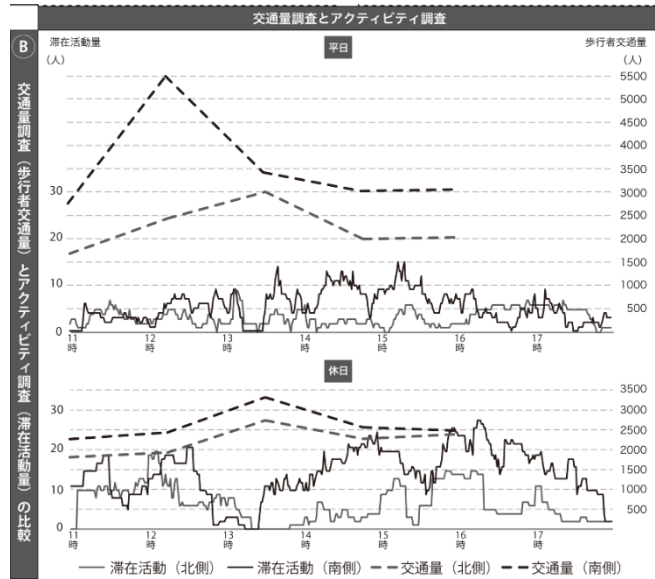
図表 3-2-6 池袋グリーン大通り社会実験
交通量調査とアクティビティ調査

事例 2: 池袋グリーン大通り社会実験

滞在活動のピークと通行量のピークは必ずしも一致しないことを実証。利活用運営には、双方の活用が望ましい。

写真出典*3-3

左図出典*3-4



事例3：ベトナム・ハノイ市パスターミナル

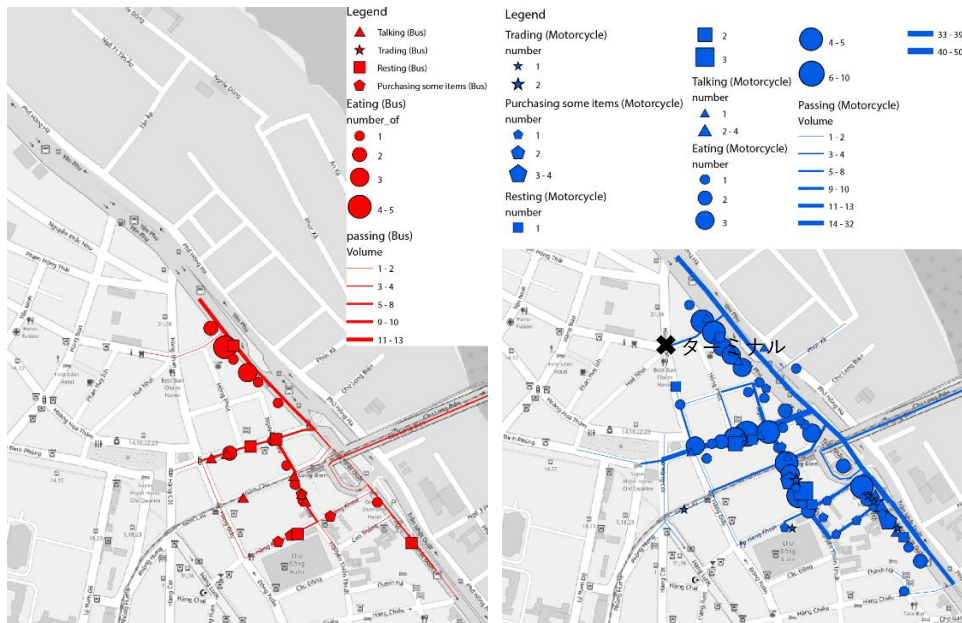
周辺街路上アクティビティ調査

* 横浜国大・交通と都市研究室

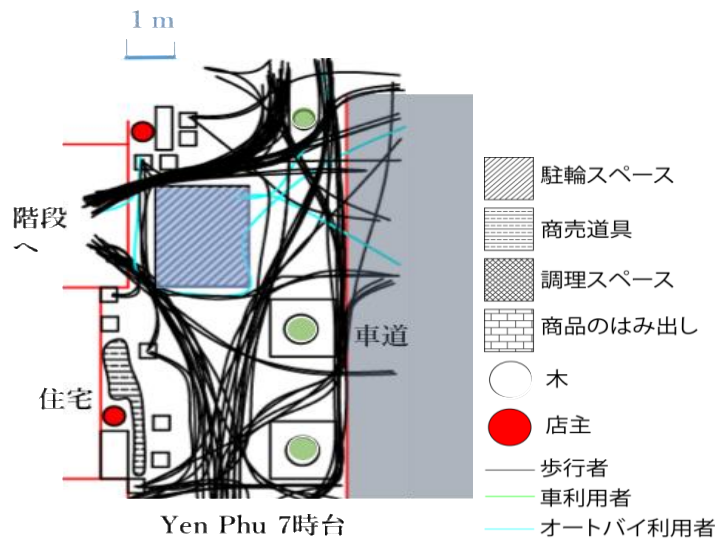
ベトナム都市はオートバイ利用者が多い。アンケート調査から歩行者（赤）、オートバイ利用者（青）別にアクティビティ量と種類、そして観察調査から歩道上動線（下図）をプロット。

オートバイ利用者による街路上の活動量は大きく、賑わいに貢献しているが、同時に駐輪で広く街路を占有しており、露天商よりも、歩行者の活動や安全性を阻害している面があることを示した。

図表 3-2-7 ハノイ市アクティビティ調査



図表 3-2-8 ハノイ市アクティビティ調査 歩道上動線



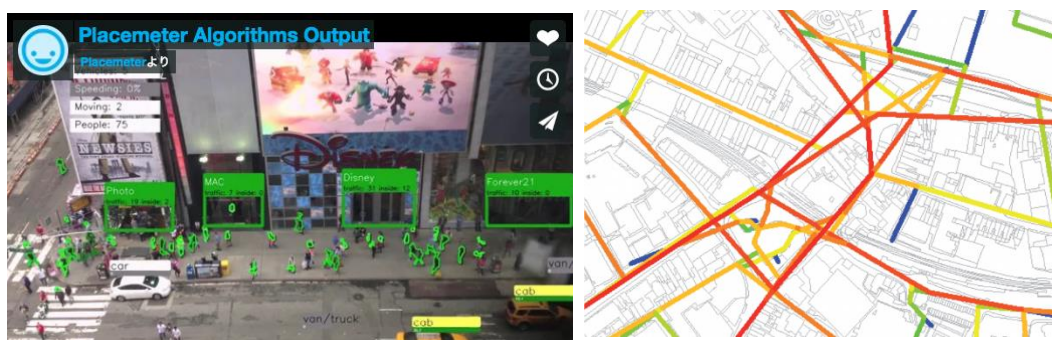
c) アクティビティ調査の種類

代表的手法やツールについて概要をまとめた。これらの組み合わせ、もしくは掲載した方法に縛られず、①調査対象（定量的/定性的データ）、②予算・人員に応じて調査計画を工夫することが望ましい。

図表 3-2-9 アクティビティ調査の代表的手法、ツール

規模	広域	地区レベル		
手法	GPS	動線調査	Space Syntax	イメージマップ
概要	アンケートと合わせると属性を反映した分析可能	来街者によるルートかきこみ、または観察調査+交通量調査	街路網のつながりの強さをグラフ理論から可視化	エリアのイメージマップを書いてもらう。回遊の際の目印等、地区の重要な空間要素を抽出
施策前後比較	○	△	○(ハード整備伴う場合)	△
動線把握	○	○	△	△
設備費	高	なし	要問合せ	なし
人員	システムによる	一般アンケート調査と同様	なし	一般アンケート調査と同様
対象サンプル	端末利用者/負担小	負担大	—	負担大
備考	方法 ①ビッグデータ活用：例) ドコモ・モバイル空間統計、訪日外国人行動分析 inbound insight等 ②アプリ配布、Google Fit等既存アプリ活用 ③少数サンプル>GPSロガー配布：YUPITERU AL20(6千~1万円/台)		街路のGISデータのみで分析可能	
規模	1~数街区		(規模にかかわらず) 利用者意見分析	
手法	Placemeter	観察調査	ビジュアル・インスピレーション	共分散構造分析/ロジットモデル等
概要	交通手段別交通量・方向・速度計測(屋内への立ち入りを含む)、データベース化	滞在活動を中心に時間別や属性別に位置をプロット	事例写真をボードにピンナップし、コンテンツとしてほしいものを把握	アンケート結果を用い、経験や行動選択に影響している要素を分析
施策前後比較	○	○	—	△
動線把握	△	△	×	△
設備費	高	なし	なし	なし
人員	システムによる	2~3人/街区	なし	研究者による分析
対象サンプル	端末利用者/負担小	調査員負担大	空間利用者	100以上のサンプル必要
備考	*新規店舗出店、賃貸料の交渉材料、広告効果等に活用実績149ドル/か所・月 または カメラ99ドル(画像解析アルゴリズム内蔵、必要な情報のみ出力)	局所的な利用密度把握、建物用途やファサードの特徴と合わせて考察	回答者も楽しめる。感動や印象も同時に尋ねられる。	仮設の立て方など分析者のスキルに精度が左右される。

図表 3-2-10 Placemeter による調査



Placemeter 映像解析の様子 (<http://press.placemeter.com/>) Space Syntax (<http://www.spacesyntax.com/>)

d) 和歌山市におけるアクティビティ調査 (案)

① 目的

- 事前調査：市堀川及び市営駐車場活用社会実験の計画に役立てる
- 実験中調査：社会実験の効果検証、将来の定期的活用につなげるための基礎データ取得

② 現況

2016年12月18日(日)、水辺空間に加え、その他のオープンスペース(道路・公園)現地視察を行った。

【実施予定地区の概要】

- ・南北に市営駐車場が立地している。
- ・実験対象の駐車場には一定の利用者が存在。
- ・生活道路では通過交通量、歩行者数とも少ない。
- ・橋詰や橋上広場は駐輪が多く、歩行者利用が少ない。
- ・店舗、リノベーション物件が点在する。飲食店が多い。

以上より、実験実施に向けたア) 駐車場ユーザーの行動調査、実験時のイ) 歩行者の主要動線把握、ウ) 周辺オープンスペースを含む滞在への満足度に関する調査を行うことを検討する。

特にア) については、今後中心市街地内の駐車場活用や再配置を行う際にも役立てられる。

③ 社会実験の目標設定（案）

図表 3-2-11 社会実験のアクティビティ調査箇所のご案内

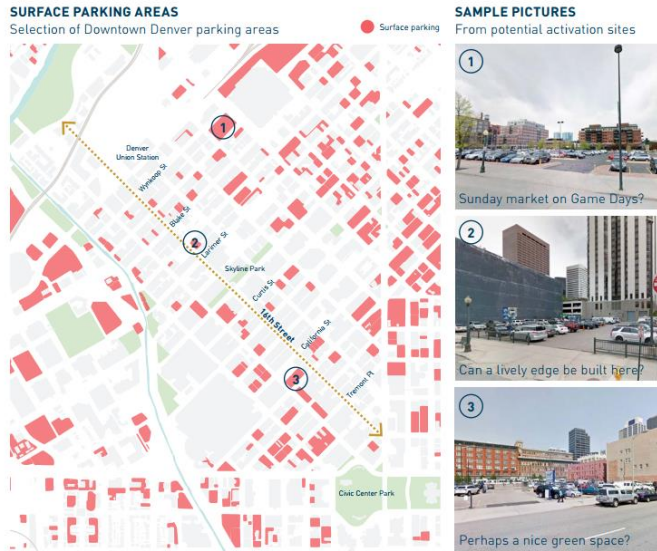


中心市街地現況と、実験対象地の立地、想定されるアクセッスルート、これらの3点から、周辺地区でポテンシャルを高めるべき3つのノードを設定した（図中の○）。社会実験実施により、ノードに囲まれた複数街区（図中の■）での歩行者回遊行動が活性化することを目標の一つとする。これを実証するようなアクティビティ調査を行う。

また、回遊行動の安全性、対象街区内の低未利用地有効活用の可能性（下記事例参照）についても議論できるようなデータを取り、その後の利活用実施の際に役立てるものとする。

図表 3-2-12 デンバー市のメインストリート活用事例

6.3 Consider how to leverage the opportunities of adjacent underused sites



デンバー市の事例：⇄で示されたメインストリートの利活用を青空駐車場（赤色）の有効利用に波及させる案（Gehl Architect）

④ 調査項目（案）

●事前調査

1) 実験対象地の駐車場ユーザー行動分析

前面の民間ステークホルダー、日常的に利用しているユーザーとの合意形成のために不可欠

→(3)アクティビティ調査の種類で示した Placemeter の活用検討（2～3か月）

※歩行者数把握にも使用できる。

2) ○（ノード）部分での交通量/滞在者数調査

前後比較のため。休日と平日で（晴れの日、実験と同様の時間帯）、20分×3回測定

●実施中調査

1) 歩行者回遊行動調査

ノード3か所、通り抜けができる駐車場周辺での交通量調査（歩行者/自動車）

2) 利用者アンケート

主に利用者の属性/歩行動線/駐車場利用実態/満足度について

必要に応じて多変量解析で分析

3) アクティビティ観察

利活用のコンテンツ、レイアウトや交通規制のあり方に関する議論に役立つような、水辺での滞在行動特性、歩行者の道路横断特性を把握

4) ビジュアル・インスピレーション等、ボードを活用した利用者意見把握

●実施後調査

協力事業者へのアンケート（非公開）：実験に直接関係する収支等

3.2.3. 経済性確認 売上把握など

経済性の確認も重要な指標である。

例えば、河川敷地占用許可準則での特例占用で認められた河川敷地をつかった経済活動が、対象店舗の売り上げにどのように貢献するかを把握することは、いくつかの点で重要である。

a) 河川敷地の占用料の妥当性を把握するために重要である。

河川敷地の占用料は県に対して納めるものであるが、経済活動を阻害する占用料の設定ではそもそも経済活動はうまれない。和歌山県河川法施行条例では河川占用許可準則の都市・地域再生等利用区域の指定をした場合の河川占用料に関する取り決めはなく、その他のその都度県知事が決める項目に該当する可能性が高い。

図表 3-2-13 和歌山県河川法施工条例 別表第2

(*3-5 和歌山県河川法施工条例)

別表第2(第3条関係)

(平14条例70・平25条例53・平26条例27・一部改正)

区分	単位	金額(年額)							
		特級地		1級地	2級地	3級地	4級地	5級地	
		甲	乙						
上屋、倉庫、仮設小屋その他の建築物	1平方メートル	1,540円から7,560円までの間で知事の定める額		1,070円	780円	550円	370円	220円	
軌道、軌条	1平方メートル	2,160円	1,080円	430円	350円	220円	130円	84円	
物揚場、物干場、物置場、棧橋、道路、橋りょう	1平方メートル	1,300円	650円	220円	170円	130円	84円	48円	
船舶係留、木材係留	1平方メートル	1,080円	650円	220円	170円	130円	84円	48円	
柵類	1メートル	1,080円	650円	220円	170円	84円	72円	48円	
管類、線類	外径80センチメートル未満のもの	1メートル	1,080円	650円	220円	170円	84円	72円	48円
	外径80センチメートル以上のもの	1平方メートル	1,300円	650円	220円	170円	130円	84円	48円
果樹作、木竹作、農耕地	1平方メートル	170円	84円	35円	22円	13円	8円	5円	
電柱、棒、くい(電柱の支柱及び支線は、それぞれ1本とする。)	1本	2,160円	1,080円	900円	720円	540円	430円	360円	
各種試験のための施設	1平方メートル	3,460円	1,730円	650円	430円	350円	260円	170円	
自動車練習場	1平方メートル	220円	120円	48円	35円	26円	17円	13円	
ゴルフ場、ゴルフ練習場	1平方メートル	430円	220円	84円	65円	52円	35円	22円	
その他	その都度知事が定める額								

備考

- この表の金額によることが不適当と認められるものについては、この表の規定にかかわらず、その都度知事が定める。
- 各級地に属する区域は、知事が別に定める。
- 占用の面積若しくは長さが1平方メートル若しくは1メートルに満たないとき、又は占用の面積若しくは長さが1平方メートル若しくは1メートルに満たない端数があるときは、それぞれ1平方メートル又は1メートルとして計算する。
- 占用期間が1年に満たないとき、又は占用期間に1年に満たない端数があるときは、月割りをもちて計算し、なお1月に満たない端数があるときは、1月として計算する。
- 土地占用料の合計額が100円未満の場合は、100円とする。
- 消費税法第6条の規定により非課税とされるものを除くものについての土地占用料の額は、この表により算定した額に100分の108を乗じて得た額(1円未満の端数があるときは、これを切り捨てた額)とする。
- 6の場合を除き、この表により算定した額に1円未満の端数があるときは、これを切り捨てるものとする。

良好な経済活動を生むことができるかを把握し、良好な経済活動を育むための河川占用料設定のためにも社会実験でどのような売り上げ向上がうまれたかを把握することが重要である。

- ・ 河川占用の社会実験に参加する飲食店の売り上げ把握
- ・ イベント収益
- ・ 周辺店舗の売り上げ把握

b) 河川占有によって、地域の魅力向上に貢献することができるか

河川占有料は法令にしたがって県に納付することになっているが、全国的に見ると都市・地域再生等利用区域に指定された区域内で行われる河川占有に関しては、占有料減免措置が取られていることがある。また、中間組織である施設管理者は又貸しをすることで、使用料から河川占有料を引いた差益を、河川敷地の維持管理、良好な河川空間の保全、創出などに使うことで地域に還元していることが見られる。

図表 3-2-14 河川における民間活用（オープンカフェ等）の占有事例*3-5

河川における民間活用(オープンカフェ等)の占有事例						
	広島・京橋川		大阪・道頓堀	名古屋・堀川	東京・隅田川	
占有区域	河川	公園	河川	河川	河川	公園
占有主体	協議会		鉄道会社	公益財団法人	民間事業者	
占有料	1,090円	免除	免除	免除	8,361円	13,536円
占有料納付先	広島県	広島市	大阪府	愛知県	東京都	台東区
施設設置使用者	民間事業者		民間事業者	民間事業者	民間事業者(同上)	
使用料	12,000円		32,400円	3,000円	売上の歩合制	
使用料納付先	協議会		鉄道会社	公益財団法人	オープンカフェ運営連絡会	
使用料還元用途	維持管理(除草、清掃) 良好な河川空間の保全・創出(イルミネーション、植栽、案内板設置)					

※占有料・使用料は年換算値(円/m²・年)で表示

15

公益財団法人 リバフロンティア研究所

市堀川周辺でおこなわれる河川占有の社会実験でも、地域に還元される価値はどうあるべきなのか十分に議論をした上で、河川の管理の在り方にまで踏み込んで実験が行われることが望ましい。そのときの指標は、

- ・ 地域のステークホルダーのサウンディング調査などによって測られる
- ・ 河川管理者へのサウンディング調査などによって測られる
 - ・ 実際に参加した占有主体へのヒアリング調査によって測られる

3.2.4. センシュアシティ

都市の本来の魅力を測る物差しに対するニーズが高まっている。これまで都市計画や不動産投資の市場原理で合理的に計画されてきた都市が必ずしも都市生活者が感じている都市の魅力につながっていないことに対する関心の高まりから生まれている。

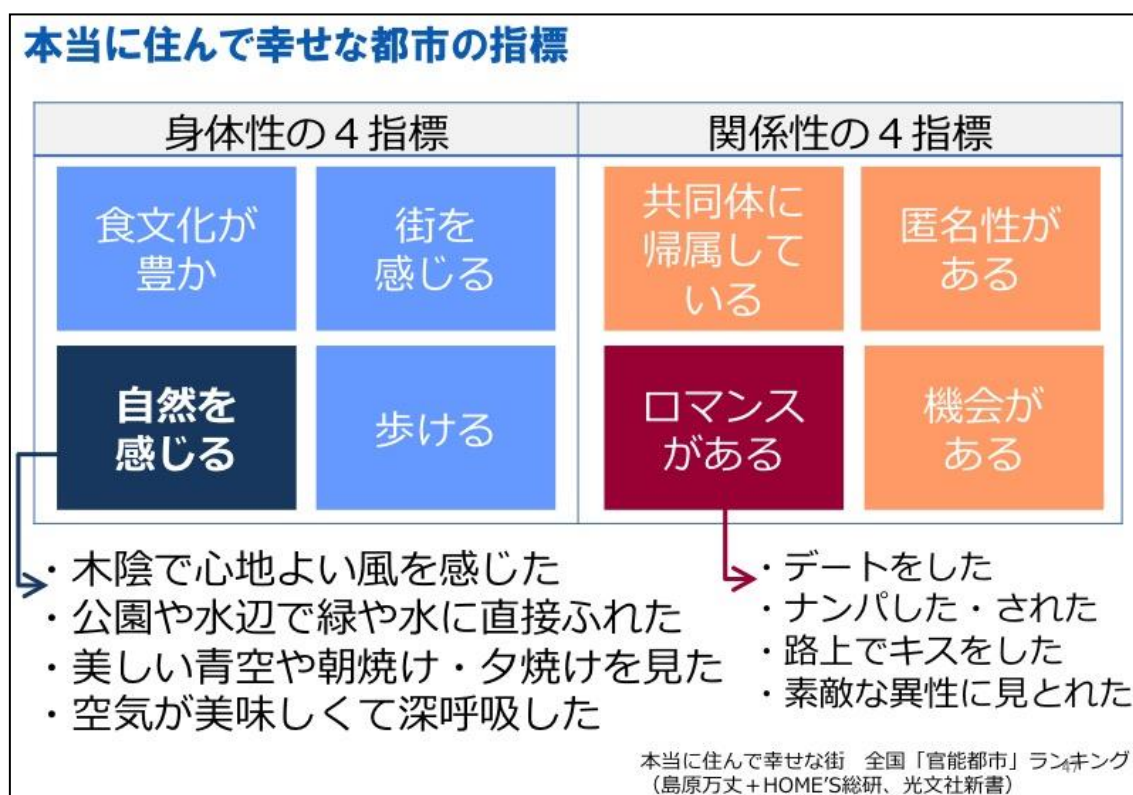
HOME'S 総研が発行する「Sensuous City[官能都市] ー身体で経験する都市；センシュアス・シティ・ランキング」(*3-6) のなかで、島原万丈は「人が都市に生活する」意味を以下の2点に集約されるという。

- ・ 人間は都市という場所で、不特定多数の他者との関係性の中に生きる
- ・ 人間は都市という場所を、身体で経験し五感を通して知覚する

官能性というキーワードで都市を評価するという指標を示し、「関係性」と「身体性」を豊かに経験できる都市こそが、魅力的な都市であるという。これまでの合理的な都市作りにはなかった指標として世の中に紹介された。

2017年2月16日に開催された「かわまちづくり全国会議」で、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課長小俣篤氏の講演で、「本当に住んで幸せの都市の指標」が Sensuous City 「官能都市」の引用で示された。水辺が、都市のなかで自然を感じる場所で、デートをしたくなる場所になる可能性があることに、ポテンシャルがあるという。

図表 3-2-15 本当に住んで幸せな都市の指標(*3-7)



水辺がどのような場所になるべきかという指標に、その都市の本当の魅力を測るためにつくられた指標であるセンシュアシティ調査を用いることは、都市の魅力を水辺のまちづくりを通じて創出するために必要である。

センシユアスシテイ調査は、インターネット調査を用いて、全国の都道府県庁所在都市および政令指定都市に居住する 20～64 歳までの男女 1 万 8300 名にヒアリング調査されている。各都市のサンプル数は 200 である。ちなみに、和歌山市はすべての指標において、ベスト 50 に入っていない。

和歌山市の水辺が魅力向上に貢献していることを測るために、センシユアスシテイ調査の結果がどう向上するかは重要な指標である。

3.3. のぞましい社会実験のあり方

和歌山の水辺空間を活かしたまちづくりのプロジェクトの進め方として望ましいのは、従来みられたような行政主導の政策誘導ではなく、多様な主体の参加を促し（オープンイノベーション）、共に共有できるビジョンにむかってそれぞれの役割を果たせるように（バックキャスト）多様な主体のモチベーションを調整しながら（中間組織による推進体制）、多様なひとびとの関心を高めながら（ソーシャルデザイン）、地域の合意形成を将来的に図れるように（協議会）、小さな成果を積み重ねそれを共有しながら（タクティカルに）推進していく、という進め方である。

3.3.1. OODA ループ

和歌山の水辺空間を活かしたまちづくりは、多様な民間組織がそれぞれに自律性をもって成果を成し遂げようとしている自律分散型でネットワーク型の組織モデルである。そのような組織が成果を成し遂げるためには、組織の意思決定理論モデルである PDCA サイクル（PLAN-DO-CHECK-ACT）や OODA ループ（OBSERVE-ORIENT-DECIDE-ACT）（*3-8）を参考にするとよい。

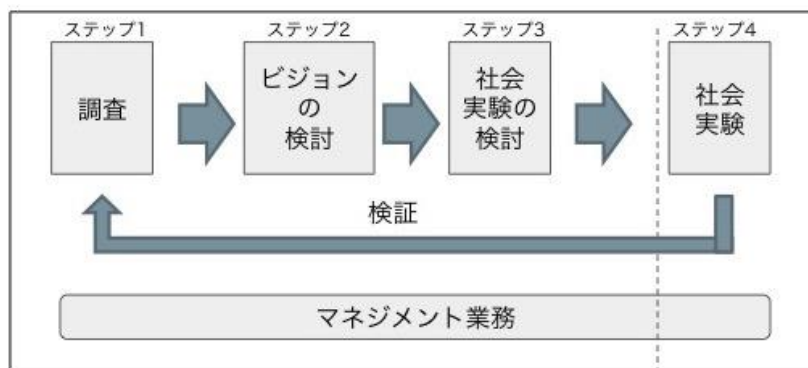
OODA ループは、監視-状況判断-意思決定-行動の一連の流れとそれをまた監視に戻すというループによって成り立っている。和歌山の水辺空間を活かしたまちづくりでいうと以下のようなモデルになる。

多くの主体を巻き込みながら水辺のまちを実現するために必要な4つのステップとそのループ

ステップ1. 調査: 現状把握、他の事例の調査、市内のステークホルダー調査
ステップ2. ビジョンの検討: アクションプラン準備、検討
ステップ3. 社会実験の策定: 社会実験のアクションプランと検証の策定
ステップ4. 社会実験
↳ステップ1. 調査にもどり、また繰り返す

社会実験は OODA ループの ACT（行動）の部分を担当。そしてその結果を監視して次の意思決定へつなげる。場合によっては政策レベルへの決定につながることもある。このループのマネジメントをするのが、このプロジェクトを推進する中間組織の役割である。

図表 3-3-1 和歌山の水辺のまちづくりループ



このループが円滑に回るようにするのが中間組織に求められる役割である。その円滑さのためには、行政や中間組織が配慮すべきポイントは、以下である。

3.3.2. 計画しても物事が思い通りにすすまないことを認識する

公的資金だけをつかった水辺空間を創出するプロジェクトでは成し遂げられない将来像に向かうプロジェクトなので、民間事業者や民間不動産オーナーの主体的な参加を促さないと成立しない。多様な主体の主体的な参加を促すということは、従来の計画優先のプロジェクトとは異なり、参加者の発議でプロジェクトの進め方が決定される。

3.3.3. 信頼関係の構築

オープンイノベーションの取り組みで、多様な主体が参加を表明した時に、そのモチベーションをうまく機会としてとらえて実現につなげることは、社会実験に参加する主体と推進する中間組織、行政との信頼関係を構築する上で非常に重要。最初は期待感だけで関係構築できるが、継続させるには信頼関係の構築が鍵となる。

3.3.4. 機運の醸成に努める

適切に PR をしてプロジェクトを応援してくれる人を増やし、機運の醸成を行うことで、社会的位置付けを確立すること。推進側の情報発信だけではなく、参加者や応援者が SNS 等で情報を共有してくれることも非常に重要。

3.3.5. 成果の共有

どんな小さな成果でも、実験に参加してくれている主体にとどまらず、多様な人々にその成果が伝わるといような情報発信をおこない、成果を共有すること。どれだけのひとがその成果を共有してくれたかも非常に重要な指標である。

3.3.6. 仮説の実証

新しい都市魅力を創出することは、評価ややり方がきまったことを遂行するのではなく、これから新しい価値をつくることである。こうなるといいはずだという仮説をたてて、それを小さく試してやってみて評価した上で、大きくするかどうかを決める、という仮説実証型であることが望ましい。仮説が現実には即していなければうまくいかないこともある。うまくいかない可能性のあることをやらないということではなく、うまくいくかもしれない可能性のあるものを小さくやってみる、うまくいかなかったら辞めることも辞さない、というスタンスが重要である。

3.3.7. やりやすいことから始める

民間の発議で社会実験を進める上で、そのプロジェクトの障害がどの程度のものなのかを把握して、民間と協議の上、やりやすいことから進めることが重要である。たとえば、規制緩和が必要な公共空間の利活用のプロジェクトだとして、その規制緩和のやりやすさの度合いを管理者と協議の上把握することがなによりも重要である。把握した上で、実現性が低いものにあえて取り組むのではなく、やりやすいことから小さな成果でもいいから実現していくことが重要である。

3.4. 社会実験の実施状況：2017 年度

2016 年度の本事業で、ワークショップ等を通じて立ち上がった複数のタスクフォースのメンバーを中心に、民間活力を活用した社会実験を 2017 年度、2018 年度 2 年間にわたり計画・実施した。

2017 年度の実験は、周辺の水辺の管理状況や周辺住民の意見等を踏まえ、実現できるところから計画し、実施していった。また多様な民間主体が実施するアクティビティ等と協調して、より小さな費用でより大きな成果が得られるように工夫し、さらに、それらの民間主体が機会損失にならないように調整、管理、運営を行った。さらに社会実験そのものが水辺の利活用の機運を向上させる好機であるにとらえ、PR を積極的に進めた。また、それぞれ成果指標を想定してメニューを決め、各種調査を行った。さらに次年度以降の動きを見すえ、官民ともに実績と成功体験を意識できるよう、事務局運営を行った。

具体的には 2017 年度は以下の要領で、社会実験を計画し、実施するとともに、社会実験のコア期間を「ワカリバ」(9 月 29 日～11 月 5 日) と銘打った。



1)直接開催事業：わかやま水辺プロジェクトが直接実施するもの

- ・社会実験を周知するためのプラットフォーム拠点：MIZUBE COMMON を設置
- ・水辺空間の活用を検討するための仮設栈橋を 3 か所設置
- ・その他：MIZUBE COMMON の必要設備設置、夜間空間演出デザイン、PR 等

2)協調開催事業：わかやま水辺プロジェクトが他

の事業者と協調して各種事業を実施した。また各種調査も実施した。

MIZUBE COMMON

3)調査事業：本事業の趣旨に沿い事業期間内に他団体が行う事業等に協力を求め、各種調査を実施した。

4)その他

- ・近隣対策：周辺自治会、店舗等への説明を入念に行った。
- ・店舗、イベント利用者のための安全対策等を十分に行った
- ・駐車場及び MIZUBE COMMON 利用者のための実施内容の告知を十分に行った。
- ・期間中、台風、長雨が複数回あり、河川管理者との事前協議に従い、川の水位を監視した。

10 月 22 日の台風 21 号の際には、いったん栈橋を陸上に退避するなどの対策を行った。

3.4.1. 直接開催事業

直接開催事業は、わかやま水辺プロジェクトが直接実施するもので、社会実験を周知するためのプラットフォーム拠点 MIZUBE COMMON の設置や、水辺空間の活用を検討するための仮設栈橋を3か所設置した。その他、MIZUBE COMMON の必要設備の設置や、空間演出デザイン、PR等を実施した。また、イベントとしては、9月3日の川開きクリーンアップ作戦、9月29日のオープニングパーティ、11月4日の水と月のライブでの餅まき、11月5日のワカリバクロージングパーティの4事業を実施した。

3.4.1.1. 社会実験周知のためのプラットフォーム拠点設置

社会実験周知のためのプラットフォーム拠点 MIZUBE COMMON を京橋駐車場の中央エリアに設置した。(図面は別紙参照) 木造片流れの小屋2棟と仮設トイレ2基を設置し、駐車場エリアにテントを左右2張りずつ設置した。(駐車場スペースは左右5台ずつ、計10台分を使用貸借)

小屋の建築に関しては、建築指導課との事前協議を行い、屋根素材を簡易なシートにすることで、建築確認申請が不要な仕様にする事とした。また、調理を伴う飲食店の出店ができる仕様にするために、保健所と事前協議し営業許可を取得した。

3.4.1.2. 仮設栈橋の設置

水辺空間の活用を検討するための仮設栈橋を3か所に設置した。(位置図参照)

MIZUBE COMMON にはドラム缶と足場板を材料にした浮き栈橋(Aタイプ)を設置した。サイズ2m×4mを2基作成し連結した。

2つ目は南海和歌山市駅近くの坂田ふとん店駐車場を使用貸借させて頂き、昇降階段を設置した。防舷材、階段及び手すり、看板を整備した。3つ目は中ぶらくり丁の雑賀橋のたもとにある階段を降りたあたりに、防舷材と手すり、看板を設置した。(簡易船着場Bタイプ)

仕様については河川管理者と事前に協議した。

浮き栈橋(Aタイプ)



簡易船着場(Bタイプ)



3.4.1.3. 賑わい創出のための利活用マネージメント

賑わい創出のために MIZUBE COMMON に、以下の設備、ユーティリティー等を設置した。

上下水道の整備、2 槽シンクの設置、手洗い場、照明、屋内屋外電気設備、Wi-Fi 設備、スピーカー、椅子、テーブル、パラソル、ハンモック、PR 用のバナー、観葉植物、人工芝、ガーランド、オーガンジー、PR 用のインフォメーションボード等を整備した。

水道は既存の水栓に子メーターを付け駐車場管理会社よりお借りした。(水道代金は後ほど計算したが、微々たるものとのことで免除していただいた) 排水設備は、ミートビルの飲食店、水辺焼肉 meat×meet の排水へつなぎ込み水中ポンプで強制排水した。

また WASSUP (SUP カフェ) の常設営業で SUP の格納場所として、身体障害者総合福祉会館の 1 階エントランス部分を期間中借り上げ倉庫として確保した。(賃料は 2 万円の寄付) 実際にはあまり使うことはなかったが、美術作品やグラフィットの一時収納庫として活用した。トイレや、排水問題を解決するために、身体障害者総合福祉会館の活用を検討し、事前調査を実施した。上下水道を復活させるには高压の電力契約を再開する必要があり、関西電力とも協議したが、コストがかかることが判明し断念した。

また、駿河町自治会長、福町自治会長、連合自治会長に社会実験の事前協議として城北自治会館に於いて建築物の図面等を提示して説明に伺い、社会実験の実施の了解を得た。遊歩道周辺は定期的に掃除することと灰皿の管理をすることが条件として提示された。住民説明会を開くかどうかは、実施者側の裁量で決めて良いとのことであったが、後日住民説明会の実施を求められ実施した。

近隣対策として周辺自治会、店舗等への事前説明を行った際、住民の興味関心は将来に駐車場の公園化の計画があることに関するが多かった。公園化の際に気になる点は、トイレの位置、駐車場の有無、子どもの道路への飛び出し、プールの設置等であった。また、紀陽建材さんは京橋駐車場を使ったイベントには以前から不満を感じているとのことであった。

3.4.1.4. 夜間空間演出

賑わい創出のために MIZUBE COMMON に、以下の設備、ユーティリティー等を設置した。

A) 市内中心地の夜間空間演出

2017 年度、市堀川および沿川遊歩道の夜間空間演出としては、橋や遊歩道の欄干に取り付けられた LED のイルミネーション照明による空間演出が実施された。

イルミネーションによる夜間空間演出は市堀川沿いの他、JR 和歌山駅周辺でも実施され、夜間空間の景観創出に寄与している (整備は和歌山市商工振興課)。

図表 3-4-1：イルミネーション事業の実施エリア（和歌山市報道資料より抜粋）



図表 3-4-2：市堀川のイルミネーション



B) JR 和歌山駅周辺イルミネーション

JR 和歌山駅東側ロータリー、西側の駅地下広場、けやき大通りに LED イルミネーションを設置し、夜間空間の賑わいを演出している。

C) 市堀川イルミネーション

京橋プロムナードに設置した LED イルミネーションのオブジェや橋の欄干、市堀川遊歩道の転落防止柵に設置した LED イルミネーションを点灯させ、河川空間を幻想的に演出している。

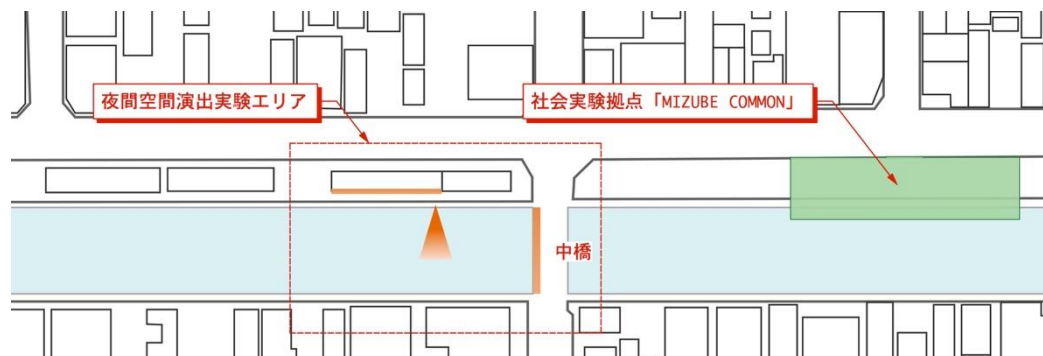
プロムナード上は多色光源を用いて華やかに彩っており、記念撮影を狙った装飾なども設置して、人の溜まり場としての仕掛けの意図も見受けられる。

遊歩道は暖色系（電球色）の光源に統一してイルミネーションが施されている。回遊性を狙う情緒的な雰囲気遊歩道空間をつくるだけでなく、市堀川の水面に映り込むイル

ミネーションが、河川空間全体を情緒的な景観をつくりだしている。

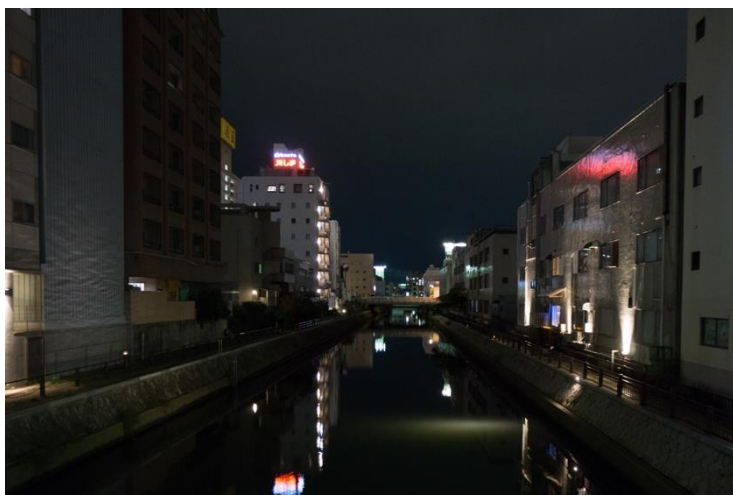
D) 演出実験について

図表 3-4-3 演出実験実施エリア



① 河川・遊歩道に面する沿川建物の外壁面をライトアップ

市堀川右岸側の建物は東西方向に幅をもち、壁と窓がある程度規則的に構成されていることから、この壁面部分を照らした。光源は屋外用（防雨型）電球色 LED スポットライトを用意し、建物足元に設置。筋状の配光で壁面をライトアップした。



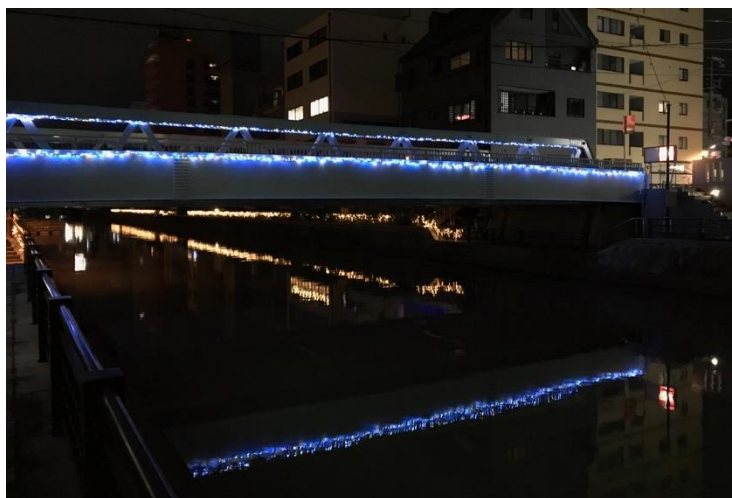
② 河川水面のライトアップ

市堀川は河口部分で海と繋がっており、潮位の影響を受けることから常に水の流れが発生することから、水面を照らすことで、水面の動きや揺らぎを活かす照明演出を狙った。光源は屋外用（防雨型）電球色 LED スポットライトを用意し、遊歩道欄干に設置し、水面に投射した。



③ 橋梁ライトアップ

中橋の橋桁に使用されている部材の形状を活かし、特徴的なフォルムが際立つライトアップを実施した。光源は市内のイルミネーションで使用されている器具と同じ LED イルミネーション光源を用いて設置した。



E) 演出実験の成果と課題：「見たくなる光／歩きたくなる光／戯れたくなる光」

- ・壁面ライトアップについては一定効果があると思えるが、実施建物の外壁面に設置されている各種設備の器具や配管を考慮した器具配置と配光を行うことが求められる。
- ・川を渡る橋からの見通しにおいて、壁面ライトアップは河川空間の夜間景観形成に寄与できたが、これを鑑賞する視点場がないため、遊歩道への視線を引きつけるに至っていない。
- ・水面ライトアップとその反射光による動的陰影は夜間景観において、非日常的な印象を与えることができた。
- ・一方で建物の外壁面として活用できるものが少ないため、護岸法面や橋の裏面を対象にしてその効果を検証したい。
- ・中橋西面のライトアップにより、城北橋からの見通しに対してシンボル性をつくることが出来た。また水面に映り込む照明が、さらにその効果を高めたと評価する。
- ・遊歩道へアプローチする動線がわかりにくく、遊歩道を使った回遊性においてはアクセスのし易さも検証する必要がある。(視認性、障害物の有無など)
- ・既設の遊歩道欄干に設置されたイルミネーション(京橋～中橋間)がつくる夜間景観は見る夜景、歩きたくなる夜景として既に醸成されており、区間内を歩く人も見受けられるが、右岸側と左岸側、あるいは区間ごとで歩きやすさの観点から現場の環境や仕様が大きく異なっている。これらの要因も回遊性の誘発に寄与していると考えられ、照明による演出だけではなく、これらの点と複合的な検証が必要である。
- ・夜間空間演出について、市堀川の河川空間を含めた中心市街地における現状と課題、アクションプランについては「平成 28 年度和歌山市夜間景観形成計画策定業務」においてまとめられている。この中でも市堀川の水辺は夜間空間演出における重要な都市軸のひとつとして位置付けられており、ここに示されている方向性を下敷きに、沿川建物から漏れる光など民間の河川空間活用の取組で夜間照明に関するアクションへのチャレンジも次年度以降の課題として挙げる。
- ・大阪市の「大阪川床「北浜テラス」」では運営する北浜水辺協議会が定める「北浜テ

ラス設置運用規則」の中で夜間照明について、照明の色温度や配置に関するルールを定め、夜間景観づくりに協調している。このような民間の自主的な取組によっても夜間空間演出の取組事例もあることから、市堀川の水辺空間でも利活用の際に考慮できる手法のひとつとして示す。

3.4.1.5. 水環境学会への参加

2017年9月26日～28日に和歌山大学において第20回日本水環境学会シンポジウムが開催された。一部の企画が市堀川周辺で開催されるとの計画もあったが実現ならず、和歌山大学とテクニカルツアーとして紀ノ川で実施された。各研究委員会のセッション、本部企画、特別講演会（関西支部企画）のほか、大学院博士後期課程レベルの研究奨励を目的とした若手研究紹介（オルガノ）セッション、年間優秀論文賞（メタウォーター賞）の受賞者講演、テクニカルツアーなど多彩な企画が用意されていた。

わかやま水辺プロジェクトは展示参加し、活動のPRとして作成したタブロイド紙の展示、配布し周知を行なった。

3.4.2. 協調開催事業

本社会実験では、わかやま水辺プロジェクト事務局がプラットフォームとなり、他の事業者と協調して行う協調開催事業を行った。事務局は公共空間の利活用の差配を市と協力して行い、市内外の幅広い世代を巻き込み、やる気のある事業者とともに水辺空間の賑わい創出を試みる社会実験を行った。事業者募集は、チラシやホームページを作成し7月中旬より開始したが、9月末時点では、市民からのMIZUBE COMMONを活用したイベント企画の申し込みは、ほぼない状況であった為、水辺プロジェクトスタッフも企画スタッフとして活動した。

3.4.2.1. 飲食系

社会実験コア期間中、British cafe THE SPACE のオーナーである大江亮輔氏がWASSUP (wakayama sup the space) という名前でSUPカフェを常設店舗として営業し、調査、運営協力頂けた。WASSUPは西側のコンテナを使用して営業した。期間中東側のコンテナや、テントを使った飲食ブースの営業も実施した。営業は、単発営業、イベント併設営業と実施したが、単発での営業はPRが課題である。常設のカフェ営業はある程度の事業性は見込める。土日にイベントがあり、集客ができれば事業性は高まる。

天候や気温により動員数にかなりの影響が出る。(土日のイベント時に台風により3日間閉店) 後半の売上が向上したことは、周知の高まりにより事業性が高まったと考えられる。

民間の地先を利用した飲食店としては、市堀川沿いに面した飲食店、バール・ヌメロオンセや、水辺焼肉 meat×meet の民間の地先を利用したオープンカフェの実施を試みた。遊歩道を一時占用し回遊性や水辺の遊歩道の可能性を調査した。

バール・ヌメロオンセでの実施にあたり、近隣住民への周知を図ったところオープンカフェの実施に反対する意見があり、和歌山市と事務局とともに調整を図ったが今回の実

験では無理に実施しない方が良いとの判断に至り残念した。

ミートビルの水辺焼肉 meat×meet では遊歩道を一時占用しオープンデッキと昇降用の階段を設置し、店舗から遊歩道へアプローチ出来る仕様とした。一部、成果が上がったが、実施期間が短かったことと、台風等の悪条件もあり利用は一部にとどまった。夜間のみ営業の店だったので、ライティングが必須であり、ライトアップを追加した。屋外空間なので気候の良い時にしか利用できない可能性もあり、次回は天候、季節もあわせた検証も必要である。

3.4.2.2. 物販系

ポポロハスマーケット実行委員会の企画として毎週水曜日に水辺のマルシェを実施し、手作りアクセサリや、有機野菜、お弁当などの飲食販売も行った。また、それ以外の曜日にもふみこ農園さんによる物販販売を実施した。

売り上げについて「(少ないという) 予想通り」や「予想よりかなり少ない」など、期待したほどではなかったという意見が多かった。イベントなどが無い平日の昼間は、人通りも少なく、売り上げがかなり少なかった。

「とてもいい空間」と水辺空間に対する評価は高かった一方で、人が少なく寂しい、音楽が欲しいという意見もあった。歩行者の通行量はもともと少ない場所であることを改めて確認した。社会実験が、イベントなど一時的に歩行者が増えるのには貢献できているが、常態として歩行者数が増えるのに貢献できるかどうかは確認できていない。

3.4.2.3. イベント系

回遊性の創出を検証するイベントや、水辺での滞在時間を向上させる企画などの実施を通して水辺利用マインドを醸成することや多様な方への水辺の価値や魅力を PR することを目的に様々なイベントを企画調整した。子ども向けの屋外教室やベビーダンス体験、絵本の読み聞かせ、音楽ライブ、トークイベント、映画上映会、フラダンスショー、アートイベント等様々な主体と協調してイベントを実施した。近隣住民からの音に対する苦情があり、中止にしたイベントもあった。

アンケート調査ではあったらいいと思うものの1番に「音楽、BGM」があがった。近隣住民から音楽に対する苦情がある一方で、利用者から「音楽」に対するニーズが大きいというのは象徴的であった。

SUP、カヌー体験会、舟運のために、本実験では仮設栈橋を3箇所を設置し、活用したい主体に対し積極的に利用を促し、PR 協力を実施した。

SUP 体験の実施は、WASSUP の大江亮輔氏が SUP カフェを常設店舗として営業し、期間中 SUP のレンタルと、スクールを実施した。また、ポポロハスマーケット実行委員会は、ポポロハスマーケットと同日開催で、カヌー体験会を実施した。内川をきれいにする会は、内川スタディークルーズの実施と、NHK 和歌山放送局の協力で内川のこれまでの歴史を展示した。事務局は、参加者からの満足度調査と意識調査を行った。

3.4.3. 調査事業

社会実験ワカリバの成果を検証するために、ワカリバ利用者、事業者、舟運利用者、事業者に対し、調査を行った。

調査の実施状況は以下の通り。

○調査対象：期間中に MIZUBE COMMON とその周辺で実施された

- ・直接開催事業
- ・協調開催事業

のほぼすべてを対象とした。利用者調査は個人を対象、事業者調査は店（または団体）を対象とした。

○調査期間 9月29日～11月5日



3.4.3.1. ワカリバ利用者調査

○設問項目：

(属性1) 年齢、性別

(ワカリバについて) 何で知ったか、何をしたか、満足度、よかった点、改善点、勧めた
いか、施設・備品等ニーズ、滞在時間

(属性2) 誰と来たか

(属性3) どこから来たか、交通手段は何か

○調査方法：

- ・アンケート調査（直接記入して回答→MIZUBE COMMON に調査用紙を設置し回収箱で回収
または調査員が回収、QRコードを使ってネット回答）
- ・ヒアリング調査

○設問方式：選択式、一部自由記述

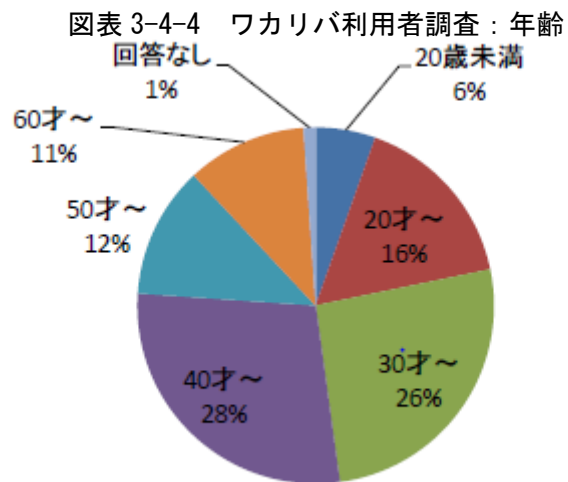
○調査期間 10月7日～11月5日

○記名方式：無記名方式

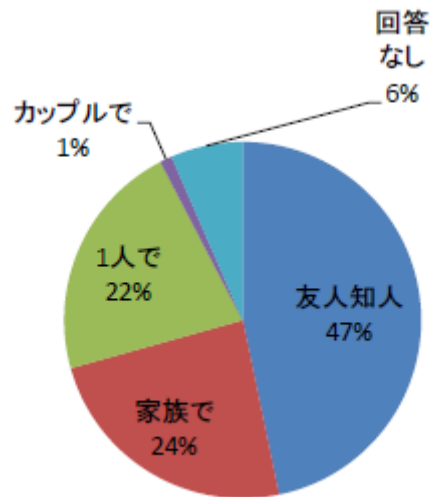
○集計結果：回収数 92

以下、主な結果を示す。

- 1) 年齢、誰と来たか：40才代、30才代、ついで20才代が多い。友人知人と来た人が5割近く、「家族で」がそれに続く。周辺はオフィス街で仕事のお昼休みに来た人が多い、また若い家族連れが多いことを示していると思われる。

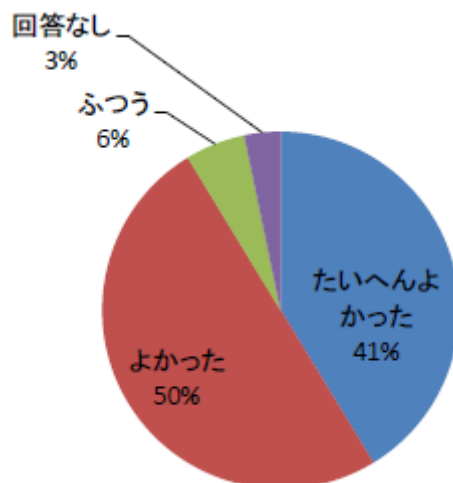


図表 3-4-5 ワカリバ利用者調査：誰と来たか



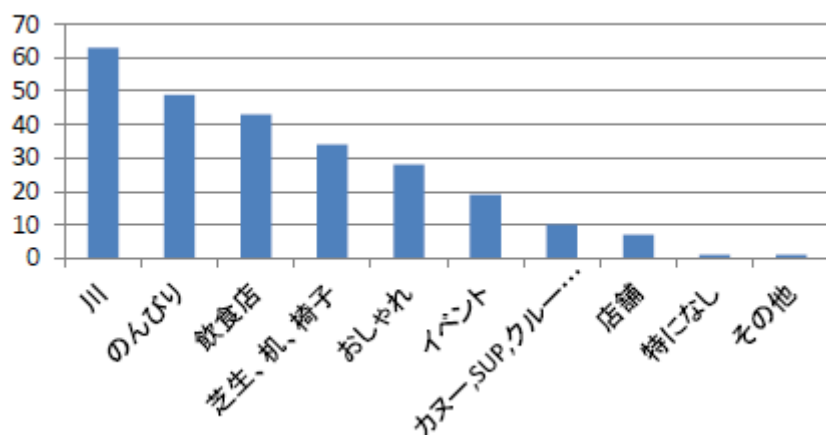
2) 満足度：「たいへんよかった」「よかった」を合わせると9割を超える。高い満足度を示している。

図表 3-4-6 ワカリバ利用者調査：満足度



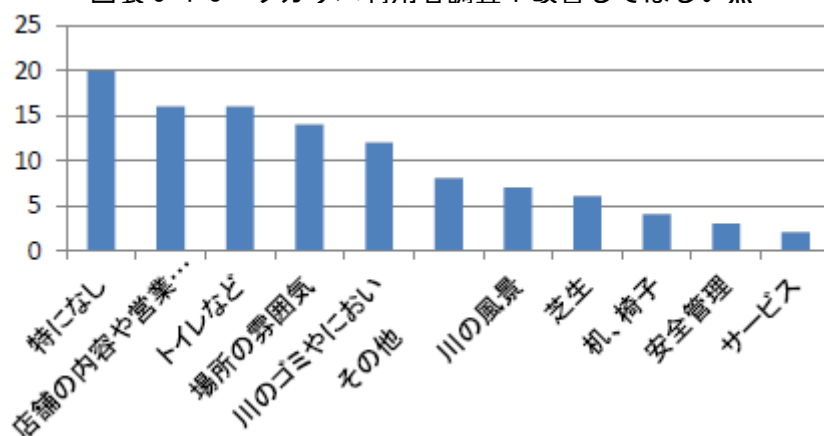
- 3) 良かった点（複数回答）：全体の6割を超える人が「川に近い雰囲気」を評価している。そのほか、「のんびり」「芝生・机・椅子」などゆったり空間を評価する回答と、「飲食店」「イベント」など活気ある雰囲気を評価する回答も多い。

図表 3-4-7 ワカリバ利用者調査：良かった点



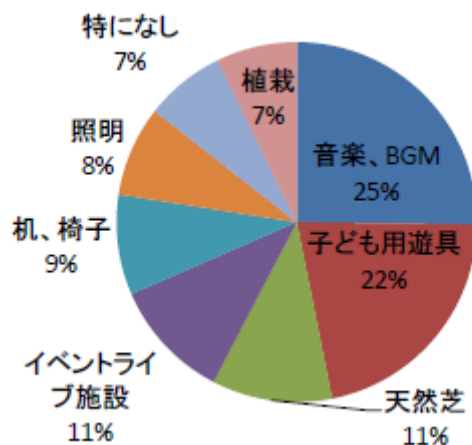
- 4) 改善してほしい点（複数回答）：回答は多岐にわたり自由記述も多かった。「店舗の内容や営業時間」を改善するよう望む声（種類やメニューを増やしてほしい、音楽をほしいなど）がある一方、「トイレ」「川のごみやにおい」などこの場所の基本的な特性にかかわる意見もあった。しかし一番多かったのが「特になし」と現状を容認する意見であったことにも注目したい。

図表 3-4-8 ワカリバ利用者調査：改善してほしい点



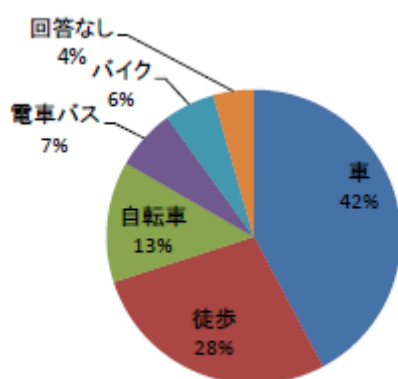
- 5) 施設・備品等ニーズ（複数回答）：あったらいいと思うもの、の問いに「音楽・BGM」が一番多かった。近隣の方々から音や音楽に対する敏感な反応があるのに対し象徴的。ついで「子供用遊具」「天然芝」が多く、この場所で従来の公園機能が求められていることがわかる。ついで「イベントライブ施設」など新しい機能への期待が感じられる。）

図表 3-4-9 ワカリバ利用者調査：施設・備品等ニーズ



- 6) 交通機関：「車」を使って来た人が全体の4割を超える。「どこから来たか」や「誰と来たか」とクロス集計したが、「どこから来たか」や「誰と来たか」によらず、まんべんなく「車」が利用されていることが分かった。

図表 3-4-10 ワカリバ利用者調査：交通機関



- 7) 自由記述から抜粋：

○肯定的意見

- ・和歌山じゃないみたい!!おしゃれですごく楽しかったです。
- ・せっかくの良いロケーションなので、今後もこのスペースを活用していく事に賛成。
- ・SUPを初めて体験してすごく楽しかったです。
- ・週末に2度の台風。途中の雨つぶきも残念でしたが、いつもとちがうこの川べりの風景が、いつかは日常になるといいな、と心から思いました。

○PRについて

- ・知らない友人も多いので口コミしておきます
- ・イベントがあるまで、この場所を知らなかった。
- ・近くのお弁当さんやMy 弁当を持ち込んで気軽に使えるのだが、そういう使い方をしてもいいと知らない人には入りにくいかも。

○励まし、提案

- ・期間限定なのが勿体ないと思う。5月～7月くらいにしてほしい。
- ・カフェで若者たちの話を聞いていると、いろんなアイデアを持っているようです。「ビーチみたいにならないか」とか。そんな若者の声を生かせたら。
- ・ソーラーパネルで電気まかなってみては。小水力発電とか。

3.4.3.2. ワカリバ事業者調査

○設問項目：

(属性) 店名

(出店状況) 出店場所、営業日、時間、天気、出店料、同時開催イベントの有無

(営業状況) 売上または客数、客単価、売り上げに対する評価、今後の出店意欲

○調査方法：

- ・アンケート調査（調査員による手渡し→直接記入してもらい調査員が回収）

○設問方式：選択式、一部自由記述

○調査期間 9月29日～11月5日

○記名方式：記名方式

○集計結果：回収数 72

※原則として出店営業日ごとに調査。内訳は期間中継続して営業した WASSUP（飲食、SUP 体験）の回収数 34、一般事業者（飲食、物品販売など）の回収数 38。無料イベントなどの事業者は対象から除いている。

以下、主な結果を示す（詳細は「資料編 ワカリバ事業者調査」）

- 1) 売上と天気の相関：天気が売上にどれくらい影響するのかみるため、クロス集計した。若干、晴天で売上が上がり、雨で売上が落ちることは確認できるが、晴天でも売上が0だったり雨でも売上を多く上げたりしているケースもあり、天気が決定的な原因ではないと思われる。

図表 3-4-11 ワカリバ事業者調査：売上と天気の相関

売上(円)	晴天	曇り	雨	大雨	総計
0	5	0	2	2	9
～5000	7	3	4	0	14
～10000	4	3	4	0	11
～20000	7	2	4	0	13
～30000	9	3	1	0	13
30000～	9	3	0	0	12
総計	41	14	15	2	72

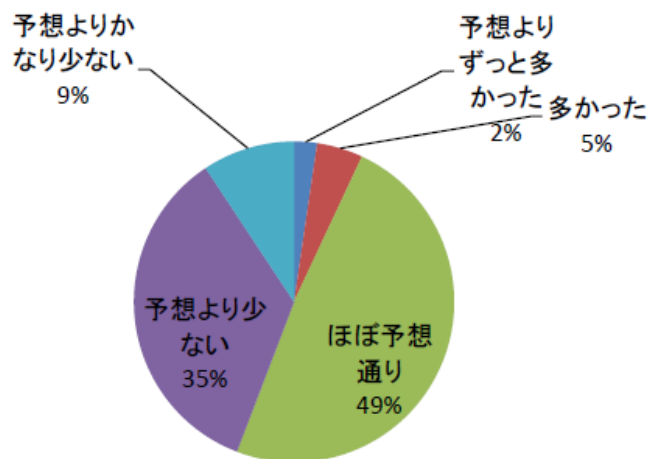
- 2) 売上と同時開催イベント有無の相関：イベントの有無と売上との関係を見るため、クロス集計した。平均売上でイベントがある方が約 1.6 倍となり、イベントと同時開催のほうが売上に貢献できることがわかる。

図表 3-4-12 ワカリバ事業者調査：売上と同時開催イベント有無の相関

売上(円)	イベント無	イベント有	総計
0	5	4	9
～5000	10	4	14
～10000	6	5	11
～20000	4	9	13
～30000	6	7	13
30000～	8	4	12
合計件数	39	33	72
合計売上	538,380	773,650	1,312,030
平均売上	13,805	23,444	18,223

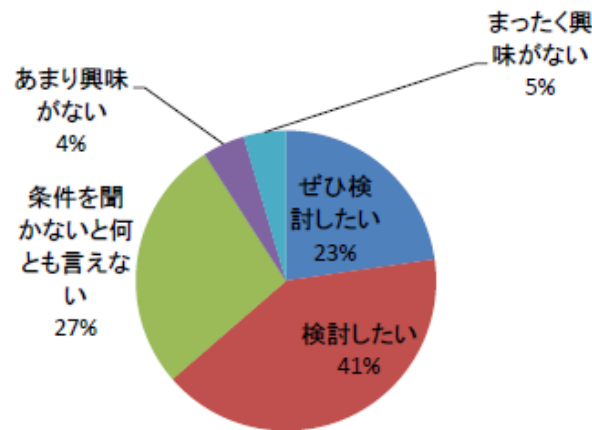
- 3) 売上予想：事前の売上予想に対して、「ほぼ予想通り」が一番多く、ついで、「予想より少ない」となっている。自由記述でもある通り、事前からそれほど売上が上がらないと予想していたケースも少なくないと思われ、「予想通り」だが「期待通り」ではなかったかもしれない。

図表 3-4-13 ワカリバ事業者調査：売上予想



- 4) 今後の出店：「検討したい」「ぜひ検討したい」が全体の 6 割を超える。水辺での出店に期待が大きいことを示している。

図表 3-4-14 ワカリバ事業者調査：今後の出店



5) 自由記述から抜粋：利用者調査に比べて肯定的意見が少なく、否定的意見が多い。

○肯定的意見

- ・川の景色と秋晴れに感謝の一日でした。
- ・誰でも気軽にドアをあけずに来てもらえること、毎日のように来てくれる方やリピートの方も後半は増えてきていました。
- ・グリーン、ブルーをモチーフにされて素敵です。のんびりとできる憩いの場として、これからも持続させていただけたらいいなと思いました。またゴミもなくていいですね。
- ・近所との音の問題はありますが、ワカリバに来てくださった皆さんからはこの場所を続けてほしいという声が多く聞かれました。
- ・ご近所の飲食店のオーナーさんが今日来てくれました。すごく喜んでくださって「1カ月だけでなく長期で続けて認知度を上げてほしいね」とおっしゃっておられました。ご近所の方にも好感触なようです。

○否定的意見

- ・たくさんの人は来ないだろうと思っていた通りの感じでした。
- ・お菓子や雑貨は売れにくいと感じました。
- ・平日なので人が少ないのかな。また通る方も少ない場所かな。
- ・台風のため、2回中止になり材料の仕入れからかなりの赤字になりました。
- ・長雨と気温の低下で客足が遠のき、特に夕方以降の売り上げが下がりました。
- ・土日はイベントがないと平日以下の来店になります。
- ・季節的にも水辺でテント営業は厳しいものがあります。風が吹けばテントはぐらぐらで看板が飛び倒れ、夜ともなればかなり冷え込みます。人出が悪く売り上げが思うようにない中でのテナント or テントの利用料金は高いと思います。集客の必要性があると思いました。
- ・この通りは日常的に人が通らないので、イベントに興味のある人だけになると思います。

○PR・運営等について

- ・イベントとしては素晴らしいと思うので定着化してほしいですが、運営していく上での

販促／企画／管理が不十分と感じました。

○励まし、提案

- ・Wakuwaku することをどんどん形にしてください。待っています。
- ・音楽がほしい
- ・もう少し水が透明だと（川の水が）嬉しい。
- ・お客様用のちょっと置ける無料（格安）の駐車場が数台あれば立ち寄りやすいかも。

3.4.3.3. 舟運利用者調査

舟運としては、以下の協調開催事業、調査協力事業において、クルーズ船、カヌー、SUP などが実施され、アンケート調査等を行った。（実施順）

<POWER OF わかやま>

- ・実施日時：7月16日（日）12時～18時
- ・利用栈橋：なし（独自制作）
- ・実施内容：カヌー体験・SUP体験
- ・参加費：無料
- ・主催：一般社団法人和歌山青年会議所
- ・利用者数 143名（うち、中学生以上 73名）、アンケート回収数 62

<市駅”グリーングリーン”プロジェクト2017>

- ・実施日時：9月9日～10日（日）11時～16時
- ・利用栈橋：勝海舟栈橋・雑賀橋栈橋
- ・実施内容：クルーズ船
- ・参加費：1人500円
- ・主催：市駅”グリーングリーン”プロジェクト2017実行委員会（資料提供：和歌山大学永瀬ゼミ様）
- ・利用者数 185名、アンケート回収数 134

<内川スタディークルーズ>

- ・実施日時：10月1日（日）10時～16時
- ・利用栈橋：京橋栈橋
- ・実施内容：クルーズ船
- ・参加費：無料
- ・主催：内川をきれいにする会
- ・アンケート：実施せず

<ポポロハスマーケット>

- ・実施日時：10月8日（日）11時～16時
- ・利用栈橋：京橋栈橋、雑賀橋栈橋
- ・実施内容：クルーズ船・カヌー体験
- ・参加費：クルーズ船は1人300円、カヌーは大人1500円、小人1000円
- ・主催：ポポロハスマーケット実行委員会
- ・利用者数 102名（クルーズ船75名、カヌーは大人9名、小人18名）、アンケート回収

数 41

<まちなか河岸>

- ・実施日時：11月19日（日）11時～16時
- ・利用栈橋：京橋栈橋
- ・実施内容：クルーズ船
- ・参加費：500円
- ・主催：城下町バル実行委員会（資料提供：（株）メガチューブ島英雄様）
- ・利用者数 40名、アンケート回収数 22

○設問項目（共通）：

（属性1）年齢、性別

（舟運について）満足度、よかった点、改善点、定期的に実現してほしいか、次に利用するときは、勧めたいか、料金について

（属性2）どこから来たか

○調査方法：

- ・アンケート調査（下船後、協力を依頼、回答→調査員が回収）

※アンケート回答は、中学生以上をお願いした。

○設問方式：選択式、一部自由記述

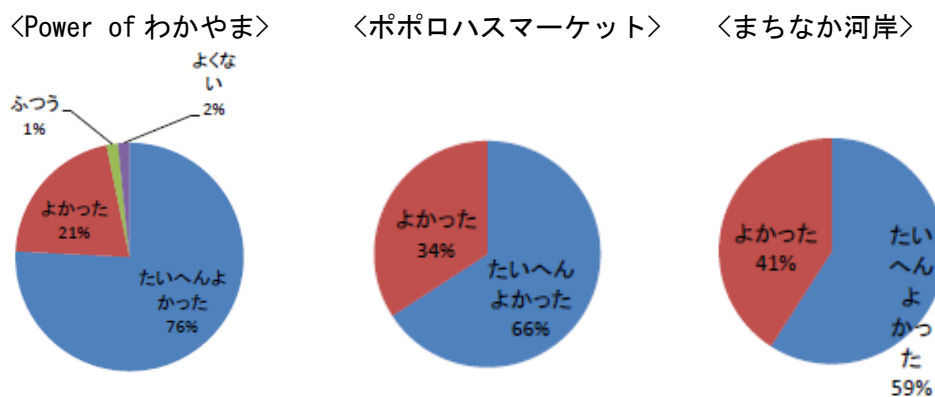
○記名方式：無記名方式

※「市駅”グリーングリーン”プロジェクト2017」については、独自アンケートのため、比較はせずに参考資料として示す。

以下、主な結果を示す。

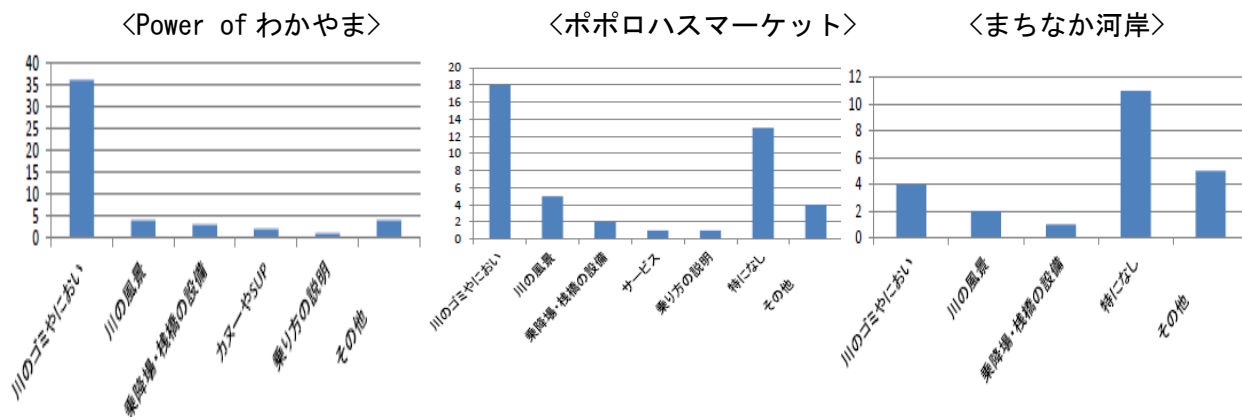
- 1) 満足度：いずれのイベントでも「たいへんよかったが半数以上を占める。「よかった」と合わせるとほとんどの人が満足している。

図表 3-4-15 舟運利用者調査：満足度



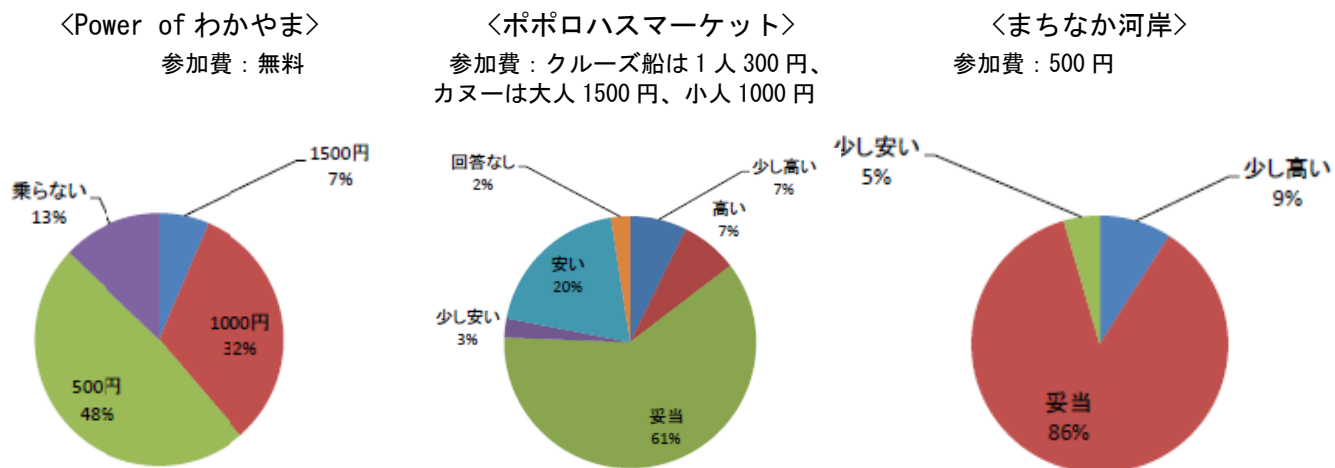
- 2) 改善してほしい点:どのイベントでも「川のごみやにおい」をあげる人がかなり多い。
川の水質改善が舟運には非常に重要であることを示している。

図表 3-4-16 舟運利用者調査：改善点



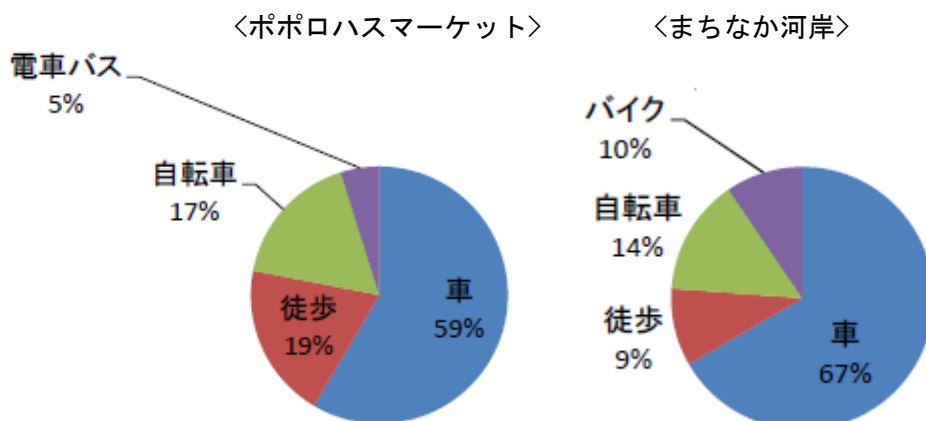
- 3) 料金について：イベントごとに料金が異なる。〈Power of わかやま〉ではクルーズ船、カヌーとも無料だったので、有料ならいくらが妥当か聞いたところ、500円、ついで1000円の回答が多かった。〈ポポロハスマーケット〉ではクルーズ船とカヌーと料金は違うが、いずれも妥当という回答が多かった。〈まちなか河岸〉でも妥当という回答が多かった。

図表 3-4-17 舟運利用者調査：料金



- 4) 交通機関：「車」を使って来た人が全体の5割を超える。ワカリバ利用者アンケートと同様、「どこから来たか」にかかわらず、「車」が利用されている。
※〈Power of わかやま〉では交通機関の調査項目なし。

図表 3-4-18 舟運利用者調査：交通機関

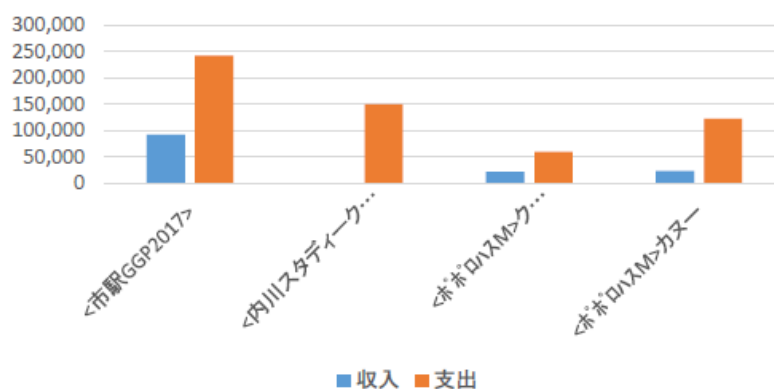


3.4.3.4. 舟運事業者調査

各舟運の事業者に、事業収支等についてヒアリング調査を行った。
以下、主な結果を示す。

・収入と支出：収支のわかっている事業について、それらと比較すると、いずれも支出が収入の2倍以上となっている。いずれの場合も、クルーズは安全性を確保するために、またカヌーなどは技術指導のために人件費が高くならざるを得ない。稼働率を上げる、参加費を上げる、経費を下げるなどが考えられるが、いずれも条件が厳しく採算をとるのは難しいことがわかる。

図表 3-4-19 舟運事業者調査：収入と支出



3.4.3.5. 通行量調査

○調査項目：

- ・車、バイク、自転車、人の通行数

○調査方法：

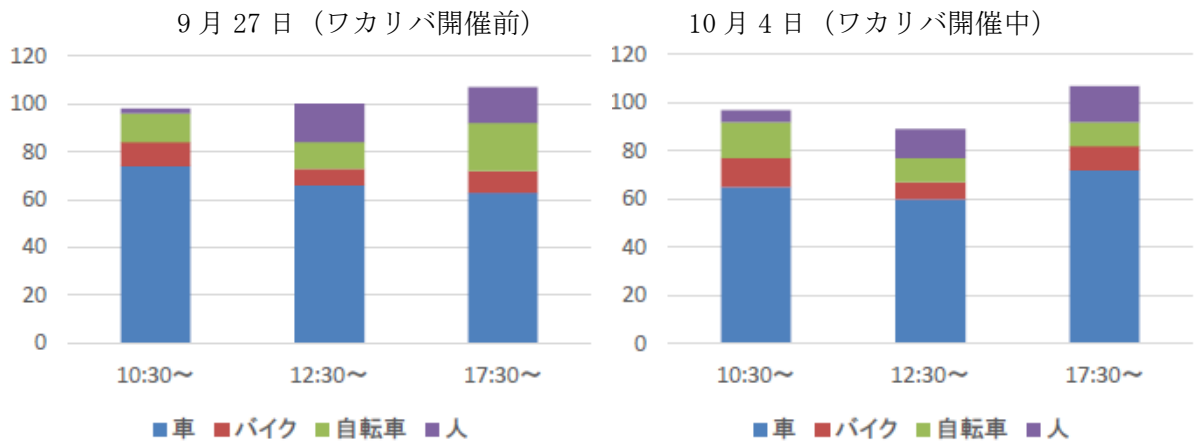
・ MIZUBE COMMON 前道路での調査員によるカウント。1日3回各20分間（10時半～、12時半～、17時半～）

○調査日 9月27日（ワカリバ開催前）、10月4日（ワカリバ開催中）

以下、主な結果を示す。

・ 通行量と質の比較：全体に車等（車、バイク、自転車）が多く、人の通行数はかなり少ない。特に車とバイクが多く、直線道路でスピードをだして通り過ぎていく。これはワカリバ開催前後、各時間帯でもほとんど同じ傾向。お昼休みと夕方には若干、人の通行数が増えるが多く時間帯でも20分間で20名に達しない。ワカリバ開催中に、昼（水辺のマルシェ開催中）、夕方（WASSUP 開店中）の人の通行量が増加傾向はほとんど見られない。

図表 3-4-20 通行量調査



3.4.4. 検証

より小さな費用でより大きな成果をあげるという課題を達成するために、わかやま水辺プロジェクトが直接実施する直接開催事業と、わかやま水辺プロジェクトがプラットフォームとなって他者と協調して事業をおこなってもらい協調開催事業、そして調査事業の3つの方法で事業を実施検証した訳であるが、協調開催事業の企画調整や勧誘に多大な労力を要することとなった。

趣旨は分かっていたが、何をして良いのかわからない、何かできたら良いな、と興味を持っていただける方はかなりいたが実際に企画を起し実施していただけるまでは、何度も打ち合わせをし、プロジェクト側のスタッフが企画を進めないと実施に至らない案件も多かった。紀州まちづくり舎、ポポロハスマーケット実行委員会、市民の力わかやまが主催事業者として開催した企画は、経済的側面はプロジェクトとは別で、人的リソースは水辺プロジェクトと同じなので企画運営に負担もあった。一方で、しっかりと企画運営してくれる事業者もいたことは事実でありとてもありがたいことであった。イベントの内容が良くてPRがうまくいけば集客はできるが、裏を返せば、このエリアは、イベントがないと集客が無いということがよくわかった。一方で、期間中常設営業を続けた SUP カフェ (WASSUP) を目的にくるお客さんがいて、期間後半では常連のお客さんもでき、常設の飲食店営業はビジネスとして成り立つ可能性がある。

イベント実施期間中、何度か音楽ライブを実施した際、音の苦情が寄せられたことから、このエリアでの音楽ライブの開催は地域住民とのトラブルになる可能性が極めて高い。

仮設栈橋を整備することで、SUPの日常利用や、舟運の利用があったことは、水面へのアプローチがしやすい環境を作ることで、水面の利活用が進むと考えられる。カヌーは、インストラクターによる指導や、安全管理が必要で、コストがかかるので事業性が低い。舟運事業もコストが高く、黒字化は難しい。水質や河川環境の改善を指摘する声も多く、今後の課題である。一方、飲食店併設のレンタル SUP や、今回実験できなかったが、技術がなくても利用でき、安全性の高いスワンボートのような船のレンタル事業は、飲食店と組み合わせることで事業性が高いと考えられる。

社会実験期間中、台風、長雨が複数回あり、企画したイベントが中止になることも度々あり、10月22日の台風21号の際には、いったん栈橋を陸上に退避するなどの対策を行った。クレーンを使って浮き栈橋の撤去と昇降用の階段の撤去を行なった。大潮の満潮が夜になること、大雨で川の水が増水してきていることから判断し事前措置として撤去を開始し、その後水位は撤去条件に達したので事前判断は適切であった。社会実験期間中にこのような実験ができたことは、河川管理者との信頼関係も築け、とても良かった訳であるが、このようなことが度々あると対応が大変でコストもかかる。水面へのアプローチは撤去不要な構造の浮き栈橋や、雁木のような構造が理想的である。

今回の社会実験で市堀川の水辺の利活用をPRできたことは確かであり、川の水質や環境に興味を持ってもらえたことも成果であった。特に伏虎義務教育学校の生徒たちが、川に興味を持ち川の環境を改善したいと思い、自分たちにもできることを考え活動したことは、水辺プロジェクトとしても今後の大きな成果につながると思う。

そして何よりワカリバ利用者の満足度が9割を超え、高い満足度を示していること、良

かった点として川に近いことや、飲食店があり芝生・や机・椅子などのんびり、ゆったり空間を評価する声が高かったことはこの場所の利活用の方向性を示している。

3.4.5. 社会実験の総括:2017 年度

より小さな費用でより大きな成果をあげるという課題を達成するために、わかやま水辺プロジェクトが直接実施する直接開催事業と、わかやま水辺プロジェクトがプラットフォームとなって他者と協調して事業をおこなってもらう協調開催事業、そして調査事業の3つの方法で事業を実施検証した訳であるが、協調開催事業の企画調整や勧誘に多大な労力を要することとなった。

本年度の調査検討業務は、前年度掲げたOODA ループにおけるビジョンの検討、社会実験の検討をもとに社会実験を行い、検証し、得られた知見をさらに次につなげるフィードバックをまとめることが求められている。

和歌山の水辺とまちに必要な政策を策定するための4つのステップとそのループ

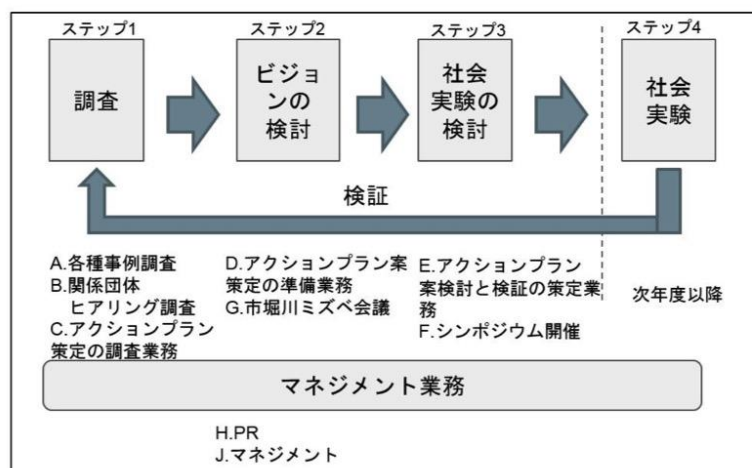


図1.業務の全体構造

ステップ1. 調査: 現状把握、他の事例の調査、市内のステークホルダー調査

ステップ2. ビジョンの検討: アクションプラン準備、検討

ステップ3. 社会実験の策定: 社会実験のアクションプランと検証の策定

ステップ4. 社会実験

↪ステップ1. 調査にもどり、また繰り返す

実際に行ってみないとわからない知見や、事前に予見できなかったこと、創造されていたけど実証されたこと、逆に想像とかなり異なっており厳しい現実が突きつけられる状況も生まれた。

これら新しい知見をもとに、今後水辺のまちづくりの方向性はどのように進むべきなのか見えてきた。まずやってみることでわかる知見には大変価値があることがわかり、そもそもこの手法自体の有効性が実証されたと言える。

その上で、この社会実験を通じた調査を行うにあたり、民間のボランティアの方々に多大なるご支援とご協力いただいたことをあらためて報告し、彼らの協力なしにはこれらの重要な知見を得ることができなかったことを記しておく。

この場を借りて、参加いただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

1) 社会実験でわかった、水辺の楽しさ、気持ち良さ

水辺でお弁当を食べたり、カフェを楽しんだり、芝生に寝転んだり、ハンモックでお昼寝したり、水辺空間で過ごす時間の気持ちよさや、SUP やカヌーに乗って楽しんだり、様々なイベントに参加することができた社会実験であった。市堀川周辺でこのような空間はとても貴重である。

→水辺は気持ちがいい。今回実験した 9-10 月はすでに寒くていろいろ都合が悪かった面があったが、もっと期間が延びればたくさんのひとに、外部空間と水のそばであることを感じてもらえる。そういった場所が和歌山の中心市街地に皆無であるので、できれば価値がある。

一方、荒天時や夜間のシェルターの重要さも確認できた。

2) 社会実験でわかった、水辺を居場所にするによってわかったこと

イルミネーションにはじめて気が付いたというひとがいたり、いつも同じところで同じように過ごしたりされる方々がいる。毎日掃除することで、どんな方がどんな風にこの空間を利用しているのかを感じることができた。

→水辺はいままでも気持ちいい空間であったかもしれないが、居場所としての居心地の良さをみにつけて、座って長い時間滞在してくれるひとがうまれることによって、まちの見方が変わる、ということがわかった。

3) 社会実験でわかった、和歌山の中心市街地のポテンシャル

社会実験実施にあたり、様々なタスクフォースが立ち上がった。中心市街地を流れる市堀川周辺には市駅前には水辺座や、酒蔵世界一統があり、ミートビル、パール・ヌメロオンセ、カニ道楽、喫茶店、居酒屋、料亭、ラーメン屋、ぶらくり丁といった飲食店やコンテンツがある。これらのコンテンツを生かした企画がたちあがり、オープンカフェやマルシェイベント、舟運実験等が実施された。

企画段階でまだ実施できていないが、世界一統さんの酒蔵を使ったツーリズムやそこを起点にした舟運事業等を開発し実施していくことは、域外からの利用を増やす上で最も重要なコンテンツになりうるであろう。

→中心市街地をつらぬくように水辺があることは、中心市街地再生を考える上でとても重要。

中心部にあることで、ひとが集まりやすいことはまだ確かである。そしてさまざまな出会いを通して、あらたなコンテンツを作ってみようという機運が高められることがわかり、水辺の広場がそのポテンシャルを最大に活かした。

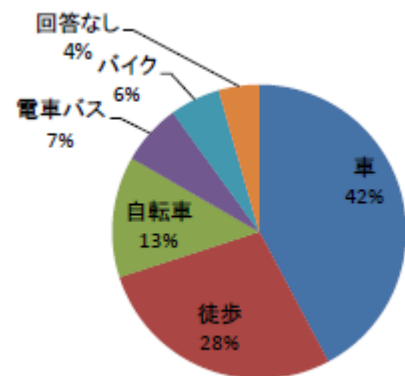
どのような利用方法にせよ、水辺があることを生かしたまちのコンテンツのつくりかたが、これからの中心市街地再生のキーになる。

4) 社会実験でわかった、中心市街地の現実と賑わいのあり方

会場運営で感じた、人通りのなさ、という現実。中心市街地では平日の人口が比較的多く、イベントのない休日や祝日はひっそりとしている。これは賑わいとか、商売とかを抜きにして考えると、ゆったり時間が流れていると感じることもできるが、社会実験中の出店者にとっては、厳しい現実であった。目的としてきてくれるほどのコンテンツとその PR が賑わいづくりには不可欠である。

また、これまでかつての中心市街地としての機能が失われていったことで、中心市街地が住宅地として利用されているという現実もわかった。ただ単に賑わえばいいということではなく、住んでいる人たちの環境向上に繋がらなければならないことも音楽イベントのクレームがあったことを通してわかり、課題として継続的に取り組み、どのような中心市街地になったらいいのかという大きな課題解決の必要性を感じた。

ワカリバ利用者調査：交通機関



→中心市街地で行われるイベントであるということで、ここを目的地にしなくてもふらっと訪れるような人が現れるだろうと楽観してはじめた社会実験だったが、現実には厳しく、歩行者がまったくいないし、車でとおるひとも寄ってくれるということがなかった。

京橋駐車場近辺の賑わいの現実を把握し、賑わいをつくるとしても、『目的地になる』コンテンツ、事業を作る必要があると感じた。どのような事業がその『目的地になる』コンテンツになり得るかは、事業主のアイデア次第である。

→中心市街地が今後どのようなコンテンツを優先させるかという幅広い議論が必要。住宅はそのなかでどのような価値を提供するのがいいのか、大きく議論し、そのあり方を模索する必要がある。

5) 公共空間活用における、人手間の重要さ

公共空間活用の趣旨を理解していただき、面白がってくれるが何をして良いのかわからない、何かできたら良いな、と興味を持っていただける方はかなりいたが実際に企画を起し実施していただけるまでは、何度も打ち合わせをし、プロジェクト側のスタッフが企画を進めないと実施に至らない案件も多かった。

→魅力的な空間をつくっただけでは人は使ってくれない。営業して、企画協力して差し上げることでようやくイベントとして世の中にだせる。しかも企画しただけではお客さんは来てくれないので、PR、広報に手間をかける必要があった。SNSを通して発信し、魅力あるイベントへの理解をしてもらうためには、適切な人材を充てなければならない。

単に樹木の剪定や清掃管理にとどまらず、いかにして多くの人々に使いこなしてもらおうかということを営業して魅力を知ってもらい、その企画を知らしめる能力ある人が関わることの重要さを実感した。

6) 社会実験でわかった、事業主の重要さ

期間中、常設の飲食店を営業し続けてくれた WASSUP の大江亮輔氏には感謝である。人通りの少ないエリアでの飲食店営業にも関わらず、ある一定の集客が作れたこと。期間後半は常連客ができるまでになっていた。事業主がこの川のポテンシャルを認め熱い想いを持って取り組んでくれたこと、ここでの営業を楽しんでくれたことが結果につながったのであろう。

→魅力的な空間をつくっただけでは人は使ってくれない。その空間を使いこなしてサービスを提供してくれる事業者がいてくればはじめて、市民が使いこなすことができる。サービスを提供してくれる事業者が思いをもって参加してくださることで、事業性がなくても実験が成立する。もし社会実験から実施フェーズに移行したとしても、事業主の思いをどう受け止めることができるかが、空間管理者の力量が問われるところである。

7) 社会実験でわかった、同時多発的取り組みの重要さ

10月からのイベントを一定期間おこなっただけでは、中心市街地を劇的に変えることはむずかしいことがわかった。

しかしながら、たくさんの方が関わったことで、水辺に対する理解と中心市街地の置かれている現状に対する理解は深まったものと考えられる。これは一事業者の一事業では成しとげることができない成果である。もし、和歌山の課題を解決するのであれば、もっと多元的にたくさんの方々の取り組みが連動し、ともに盛り上げる状況を作る必要があるのではないだろうか。その動きの連動感が強ければ強いほど、人々の関心度合いは高ま

るのであろう。

→今回、一事業者ではなくたくさんの事業者が行政と連動してやってみることで、一定の成果をあげることができた。このような取り組みがあと2~3別の場所で同時多発的にうまれると、和歌山の中心市街地に対するイメージはがらっと変わるのではないかと感じた。

8) 社会実験でわかった、分野を超えた取り組みの必要性

水辺を活かしたまちづくりは、これを民間事業者が実施することで、さまざまな波及効果があるのではないかとと思われる。例えば、舟運実験を通してわかったのは、この舟運は域内の交通利用より域外からのかたの利用を促すための観光事業者や観光政策と繋がる必要があるのではないかと考えるに至った。これは、水辺を活かしたまちづくりがほかの行政的所掌へ社会実験の成果が波及するというに他ならない。

舟運を実現しようとする、事業者が供給する船の置き場の問題が発生することが判明した。置き場がないために事業者が舟運事業への参入に障壁を感じているということがわかり、それは、今回の社会実験の範囲の外で、置き場を確保するということへの分野を超えた取り組みの必要性を物語っている。

京橋広場のあり方とも連動して、道路の路側帯幅員が道路全体の幅員に裂かれている自動車交通の幅にくらべて、非常に狭く、その結果運営上安全配慮に多大な労力を割かなければならなかったが、そもそもこの道路構造を変えることで、水辺の環境がよくなり、賑わいにつながるのであれば、都市道路政策との連動も必要になる。

このように、今年度の実験で、他の行政政策との連動が図れば、もっと水辺は活性するはずだという知見が得られることができた。この取り組みを通して、分野を超えた取り組みに発展し、和歌山が魅力を世界中に発信する状況につながることを望む。

→行政の縦割りを超えて価値をつくる必要性を感じた。連動してあらたな価値をつくる取り組みへの発展が望まれる。

9) にわとりとたまごの理論をちょっとだけ超える取り組みの必要性

今回の社会実験をとおして、やはり多くの人から水質改善の必要性に対する意見が聞かれた。水辺交流会で小学生からのプレゼンテーションもあり、改善すべき課題として、今回の社会実験を通してその声は大きくなったように感じる。

この水質改善の取り組みは、原因がたくさんあり、その責任者はたくさん数にのぼる。なにかひとつの取り組みや政策を行ったからといって、すぐに改善するものでもない。ましてや、全市民的な合意がなければ、原因となっている下水整備や越流水(CSO)の対策を行う財源確保にはいたらず、なにかをおこなえば必ず綺麗になるということではないということはこれまでの水質改善に対する先人たちの取り組みをみても明らかである。

しかしながら、その市民的合意は関心をもつことから始まるということを考えると、今

回の取り組みによって水質改善の必要性を多くの人々が感じたというのは、水質改善へのみちのりの一歩を歩んだということに言い換えることができるのではないだろうか。

水質が改善しなければ賑わいが産めない、というのと、賑わいができれば、水質改善への関心がたかまる。という関係は、にわとりとたまごの関係に他ならない。今回の京橋駐車場で社会実験をはじめ、さまざまな取り組みで市堀川への関心を高めることができた。そのことで、水質改善への関心喚起もできたとすれば、そのにわとりとたまごの関係を、実際に少しだけ超えたということがいえるのではないか。

むずかしい物事も、ちょっとだけやってみせることでちょっとだけなら動き出すことがある。まさに今回の社会実験を通して、受託した側はそのことに気がつき、今後のさまざまなまちなかの課題解決のヒントとして活用していくことが必要だと感じた。

→関心を高めることで実現する未来があるとすれば、今回の社会実験は関心を高める機会になったことは事実。これをいかに継続させて、にわとりとたまごの関係を超越するか、そしてそれにだれがどのようにこのよきサイクルにコミットしていくかが課題であり、まさに官民を超えて、この町をどのようにしていきたいかという『意志』がつくる未来を垣間見た機会となった。

3.4.5.1. かかげた12のバリューの達成度合い

2016年度の水辺のまちづくり手法検討調査業務で作成した、市堀川で大切にすべき12の価値観にもとづいて、本年度の社会実験でなにが成し遂げられたかをまとめた資料が以下である。星が達成度合いを示す。

12のバリュー(価値観) 2018.02	短期	中期	長期	2018.02時点の評価
1 きれいな川、綺麗な水にしたい 豊かな自然環境にしたい (目標の修正が必要)	★ さわれる	★ 魚釣りが楽しめる	★ およげる 流れがある	未達/継続 自分事に思う人を増やし、全市民的な取り組みへ成長させる必要がある。イベントをやることで意識を高めることはできた。
2 居場所作り	★ 椅子、本、ピクニック	★ サンドイッチもって座れる	★ 子供が安全に遊べる立ち止まりたくなる場所	社会実験期間中は達成 運営者の思いが通じ、人が寄りたくなる空間ができた。一方で、お店のためだけの場所だと勘違いする人がいたこともわかっており、改善する必要がある。
3 クルーズができる楽しめる街にしたい	★ イベントの船交通	★	★ レストラン船などの日常利用 日常使いの船交通	イベントの船交通は達成/ 達成したが課題がたくさんみえた。今後は、船のルート環境整備、船の係留場所の確保、BtoCではなくBtoB的パートナーシップを模索し、さらに継続
4 緑の環境づくり	★ 芝生の広場 食べられるガーデン	★ 桜を植える 野花 食べられるガーデン		芝生ひろばの有効性を立証 その他は未達 船コースの緑化は進めたほうがいいのではないかな?
5 水上アクティビティがある街にしたい	★ SUP、カヌーなどの手漕ぎ	★ スワンボート、貸しボート	★ ウォーターポール ジェット、パワーボート、外洋へ	SUPの実証 SUP体験を実証。経済性確保に難があるが、コンテンツとしてはありえる。今後スワンボートなどを実証する
6 納屋河岸マルシェのにぎわいづくり	★ 短期的なマルシェの もりあがり	★ 日常的なマルシェ 開催 周辺の商業にも好影響をあたえる		PR告知がきちんとできているものは、集客ができた。 継続実施によって、集客につながる可能性があることはわかった。
7 歩ける水辺、走れる水辺。健康な水辺	★ 毎朝ウォーキング	★ ウォーキングをしたくなる環境整備 フットパスを町中にもつなげて整備	★ 日常でつかえる 水辺の道	未達/ ベビーダンスをやってくれた団体がいた。野天で貸出できるスペースがあると、ヨガやベビーダンスのインストラクターにとっては魅力的な空間になる可能性がある。
8 いろんなイベントがおこなわれる水辺であってほしい。	★ 花火、映画鑑賞	★ フェス。食フェス 水上パレード		イベント運営やイベント実施者への営業は手間と時間がかかり、中間団体にかなり負担がかかる。この人件費をどのように捻出するか、幅広い議論が必要に思える。
9 食文化が育まれる水辺	★ フードカー フィンガーフード	★ 川床	★ 牡蠣船	飲食店の経営を実施。継続運営されることで、その認知度はあがる。一方、まちなかに客を送客できるようなコンテンツにはなっていない。牡蠣小屋のようなコンテンツを試す必要がある。
10 和歌山レガシー	★ 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	★ 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	★ 和歌山の歴史とつなげる 来歴に沿った水辺の あたらしい姿	未達/ 来歴に沿った水辺の新しい姿の模索は、周辺事業者などと協調し、あらたな事業をつくりだす必要がある。そのための戦略作りをすすめ、水辺ビジョンに盛り込む。
11 夜も楽しめる水辺	★	★ 夜も明るい	★ 飲み屋、BAR	実施済み。継続実施によるファンが増えることがわかった。明るい伝統がともる風景が、安心感を生む。
12 学べる水辺	★ 学べる	★ 学べる	★ 学べる	学びの機会が生まれ、提供する側も受ける側もどちらも満足度が高い。

これら、12のバリューのうち、どのような企画をすると、それ自体がまちに集客を促す強力な『目的地になる』コンテンツになるのかということが、重要な指標として浮上したということが言える。都市における中心市街地が、集積することだけで求心力を生んできたことを考えると、その前提を度外視し、まさにその『集積をどのように促すか』、という課題を水辺が負うことができるのかどうかという課題と向き合うことに他ならない。

その観点からすると、次年度以降、いままでやってこなかったことで、『目的地になる』コンテンツになりそうなくつかの事象と、『目的地になる』ための環境整備のあり方を模索し、その実現性を議論したり実験したりしてみる必要がある。

→12のバリューの達成度合いはばらつきがあるものの、達成されたものもあり、そのことで多くの知見が得られた。

→一方、12のバリューを単に実現するだけではなく、『目的地になる』コンテンツの強さがあるかどうか、この場所には求められており、ひいては、中心市街地のあり方とかなり連動して議論が必要だということがあらためてわかった。

3.4.5.2. かかげた8つの仕組みの達成度合い

2016年度の水辺のまちづくり手法検討調査業務でかかげた8つの仕組みの達成度合いは以下の通りである。

8つの支える仕組みと考え方	短期	中期	長期	2018.02時点の評価
A 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する	水辺へのアクセスのノード ここからさまざまなアクティビティに派生			棧橋利用の事業参入を引き続き誘致するSUPは実験済み。 技術のいらないスワンボートの実証の設置。
B 中間組織事務局提案			推進していくためのPPPのエージェント	中間組織運営は、自立経営できなかった。 かなり人件費、労力がかかる。これをどのように負担するのか、議論が必要。 協議会と中間組織は別組織のほうがいいのではないかと？地域の合意形成と運営が一体的でないほうが、よいのではないかと？
C 官民連携のフェスをおこなう	官民の連携のよい事例を積み重ねる ひとつのつながりを作り続ける			民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになり、相互理解に役立った。
D 内川ファンドを含めた財源の確保			内川ファンドを含めた財源の確保	占用料の扱いを検討し、地域の魅力創出活動の財源になることが望まれるが、テナントからの家賃収入、イベント収入がどの程度見込めるかは現状は不透明
E メディア、PRを推進	メディア、PRを推進			十分PR期間をもうけて、専任のPR担当者を設置できる状況がのぞましい。PR目線のイベント立案が重要(もちまきで実証)
F 民間不動産の活用推進もおこなう	リノベーションスクール			水辺座などのリノベーションスクール案件ができて、水辺に関する関心の高まりがうまれた。引き続き水辺にあらたなコンテンツがうまれるように、周辺事業者との協働をすすめる。
G 交通を考える		レンタル自転車 駐車場 バス		京橋駐車場周辺に歩く人がいないことがあらためてわかった。また、イベント時に車線にはみ出す人の安全確保など、道路交通に関する課題が発見できた。これを解決するためには、より広範囲な中心市街地のなかの交通計画が重要であり、交通行政と連動して課題解決に取り組む必要がある。
H 協議会をつくる	やってみなはれの精神			周辺の住民への音の問題による負担があることがイベント期間中に判明した。これを解決するために、ルール作り、意識の共有などを行う機関が必要であり、それを協議会が担うのではないだろうか？

A) 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する。

棧橋を設置したことによって、さまざまな利用と、さまざまなチャレンジは生まれた。WASSUPによる、SUPのレンタル事業は実施期間中毎日継続して行われ。これは大きな成果であり、このことによって、市堀川の水辺の特性がよくわかった。

SUPのレンタル事業は可能だが、初心者にはハードルが高く、もう少し裾野が広い簡易なアクティビティ（スワンボートのような）による事業をやってみてはどうかという意見がうまれた。棧橋利用の事業参入を引き続き誘致し、舟運利用も含めて、検討を続ける必要がある。

→棧橋がそもそもないと生まれない数々の取り組み。棧橋があることで、うまれる取り組みがあり、そこに可能性がまだみえているのであれば、継続的に実験的な棧橋を設置し、将来公設によるインフラとしての棧橋設置の必要性がうまれることを期待して、継続的に実験を行う。

B) 中間組織

中間組織運営は、今年度は収益を生まず、自立経営にむけてはハードルを感じるものがたくさんあった。

まず、イベント誘致や場所の告知、イベントの告知、資料作成、周辺の地権者、住民との調整、関心層との調整、連絡、伝達にかなり人件費、労力がかかることがわかった。しかも中間組織には能力として、『行政との折衝能力』⇨『民間ステークホルダーとの関係構築』、『デザインされた資料の作成』⇨『行政向けの報告書作成』、『現場でなんでもつくってしまうたくましさ』⇨『物事を戦略的に組み立て、計画通り進める能力』という、相反する能力がもとめられることが今年度わかった。これをすべて理解する能力がある人物を育てる必要性と、それを組織的に支える多様な人材を抱える必要性が垣間見えた。これらを運営するためにどれくらいのコストがかかるのか、試算が必要である。また、これをどのように負担するのか、幅広い議論が必要である。また、相反する能力を補完するため、この組織のなかには異なる出自の人材（民間でデザインをしてきたひと、イベントをおこなってきたひと、行政で職務経験がある人など）がそれぞれの経験を生かせるような人事交流の必要性もあるのではないかと考える。

また、今回協議会と中間組織は別組織のほうがいいのではないかと浮き彫りになった。協議会は地域の既存の価値観をもつ人々が、中心市街地をどのようにしていくかということを幅広く議論する場であるはずで、それを参考にとりいれて、実験的な取り組みをどんどんおこない、いままでなかった価値観をつくるという中間組織が目指す役割との違いが明確になった。本来、協議会があってその合意をもとに、中間組織が地域の価値を高めることを行うことが望ましいのだが、今回は中間組織が地域への説明を

→中間組織は地域に『これまでなかった価値をつくる』という価値があり、それをどのように評価し運営に地域の資源を投下できるのか、幅広い議論が必要である。

行う業務を担い、議論や機運が高まっていない地域のステークホルダーとの意見調整で地域の合意形成と運営が一体的でないほうが、よいのではないかと？

C) 官民連携のフェスをおこなう

民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになり、相互理解に役立った。このことで、未来にあらたな価値をつくるという課題を解決するために必要な能力をお互いに補完しあえる関係を構築することができる。引き続き、相互の歩み寄りをおこなう機会をたくさんつくり、成果を上げ続ける必要がある。

一方、行政と民間が意思疎通を行うためにはむずかしい面もある。その意思疎通をおこない、円滑に物事をすすめるための、人的資源の投下は止むを得ず、このプロジェクトにおける、民間、行政の理解が進むことを望む。

→官民連携は、実績を積むことが大事。

さらに、その実績を幅広く共有し、さらなる理解がすすむことを望まれる。

D) 内川ファンドをふくめた財源の確保

長期目標としてかかっていた、財源の確保の課題であるが、実際実験をおこなうことで見えてきた課題がある。公共空間の占用料の扱いによって民間事業者からの収入得ることによって、地域の魅力創出活動の財源になることが望まれるが、テナントからの家賃収入、イベント収入がどの程度見込めるか、現状は不透明と言わざるをえない集客効果だった。今後、事業者がどれぐらいの収益を見込めるのかさらに事業企画をつくりながら判明していくものと考えられる。『これまでなかった価値をつくる』という価値が、共助的、公共的価値があるのではないかと考えられ、中間組織が将来地域の価値をあげるための組織として運営される時に、民間からの投げ銭的財源、公的財源投入も含めて、検討の余地がある。

→次年度以降、『これまでなかった価値をつくる』組織運営がどのようなものになり、なにをかかえて運営しだれがそれを担うのかを、どこまでの価値を高めることができるのかを検討し、そのコストがいかなるものなのか試算する。そしてその価値がどのような価値なのかを幅広く議論した上で、財源としてどのようなあものがありうるか、より深い議論ができる。

E) メディア、PR を推進

今回の社会実験の大きな反省点として、PR が不十分だったということがあげられる。PRにはそれなりの技量が必要であり、十分PR期間をもうけて、専任のPR担当者を設置できる状況がのぞましい。また、単に企画をPRするのではなく、PR目線でのイベント企画が重要であることが、「もちまきハロウィン」イベントで実証された。このような目線にたった、中間組織運営が必要であることがわかった。

→PR だけではなく、PR 目線のイベント、組織運営が共感と関心を生む。

F) 民間不動産の活用推進もおこなう

水辺座などのリノベーションスクール案件ができて、水辺に関する関心の高まりがうまれた。引き続き水辺にあらたなコンテンツがうまれるように、周辺事業者との協働をすすめる。とくに、『目的地になる』ことを水辺や中心市街地が目指すならば、事業者単体による開発ではなく、地域全体でそれを支援するあり方が必要なのではないかと考えた。地域としてポテンシャルを秘めた資源ととらえ、民間不動産の価値向上が地域の価値向上と直結しているというところに認識を高め、その役割を中間組織が担うということが未来像として想像できた。そして、先に掲げた「同時多発的な取り組み」を影で支えることで、地域にあらたな価値を生むことが求められているのではないだろうか。

→単に不動産事業を産めばいい、不動産事業のなかに事業コンテンツを埋めればいい、ということにとどまらず、その周辺の環境や、同時多発的な取り組みを支援する役割が必要である。

G) 交通を考える

京橋駐車場周辺に歩く人がいないことがあらためてわかった。また、イベント時に車線にはみ出す人の安全確保など、道路交通に関する課題が発見できた。これを解決するためには、より広範囲な中心市街地のなかの交通計画が重要であり、交通行政と連動して課題解決に取り組む必要がある。

→京橋駐車場の前の道路は、路肩の幅員確保によって、水辺を歩けるようにするべきである。

H) 協議会をつくる

周辺の住民への音の問題による負担があることがイベント期間中に判明した。これを解決するために、ルール作り、意識の共有などを行う機関が必要である。

また、そのルールを作る際に、このまちがどのような方向性のまちになるべきなのか、幅広い議論がまだ必要である。そのような議論をできる環境を、協議会が担い、未来にたいする責任を果たせる仕組みをつくり、その一端を行政だけではなく民間も担うために、中間組織をつくり、かれらに権限を委譲する、ということが必要なのではないだろうか？

→次年度以降、地域が目指すべき未来を、幅広く議論できるひとびとによる協議会設立をし、運営を推進する。

3.5. 社会実験の実施状況：2018年度

2017年度の社会実験では以下の1)～9)のことが実証され、フィードバックが得られたが、それに基づき、各々、検討を行った。

1) 社会実験でわかった、水辺の楽しさ、気持ち良さ

➤ 外部空間で楽しめる場所ができれば、価値は高い。シェルター機能は必須。

⇒ 展開方法について検討

- 和歌山市が京橋駐車場を親水公園とすることを都市計画決定したため、水辺の社会実験で得られたフィードバックを和歌山市に伝えた。今後の整備や運営手法決定に生かされる予定である。

2) 水辺を居場所にするによってわかったこと

➤ 現状は居場所ではないが、居場所としての心地よさがあることで、長い時間滞在してくれる人が生まれ、まちの見方が変わる。

⇒ 引き続き検証必要

- 和歌山市が京橋駐車場を親水公園とすることを都市計画決定したため、水辺の社会実験で得られたフィードバックを和歌山市に伝えた。今後の整備や運営手法決定に生かされる予定である。

3) 中心市街地と市堀川の水辺の関係

➤ 水辺が中心部にあることが、中心市街地再生を考える上で重要である。中心市街地にひとが集まりやすい広場があることをどう生かすかがキーポイント。水辺があることを生かしたコンテンツ作りが重要である。

⇒ 中心市街地をどうするべきか、という議論へつなげていく

- 中心市街地のあり方を議論するべく、水辺を生かしたまちの姿をバックキャスト的に見える化する水辺チャレンジを実施し、議論喚起する。

4) 中心市街地の現実と賑わいのあり方

➤ ふらっと訪れてくれるような場所ではないという現実をふまえ、どのようなコンテンツが必要なのか、事業主のアイデアを活かせる状況をつくるのが大切である。

⇒ 展開方法を検討

- テラスを利用した店舗を拡充。
- 中心市街地のあり方を議論するべく、水辺を生かしたまちの姿をバックキャスト的に見える化する水辺チャレンジを実施し、議論喚起する

➤ 中心市街地が今後どのようなコンテンツを優先させるのかを、多くの人々を巻き込んで議論することが必要。

⇒ 中心市街地をどうするべきか、という議論へつなげていく

- 中心市街地のあり方を議論するべく、水辺を生かしたまちの姿をバックキャスト的に見える化する水辺チャレンジを実施し、議論喚起する

5) 公共空間活用における、ひと手間の重要性

➤ 魅力的な空間作りだけでなく、ひとが積極的に関わったり運営したりしなければ

ならない。広報や、積極的な営業を通して、魅力をつくっていかなければならない。
⇒ ひとが関わることができる水辺の公共空間のあり方を模索し、PARK-PFI などの公共空間活用の施策へつなげる

- 和歌山市が京橋駐車場を親水公園とすることを都市計画決定したため、水辺の社会実験で得られたフィードバックを和歌山市に伝えた。今後の整備や運営手法決定に生かされる予定である。

6) 公共空間活用における、事業主の重要さ

➤ WASSUP の大江氏があたたかみのあるオープンな雰囲気のお店を毎晩営業してくれたことで、それを楽しむひとが生まれた。サービスを提供してくれる事業主の思いが重要である。

⇒ ひとが関わることができる水辺の公共空間のあり方を模索し、PARK-PFI などの公共空間活用の施策へつなげる。

- 和歌山市が京橋駐車場を親水公園とすることを都市計画決定したため、水辺の社会実験で得られたフィードバックを和歌山市に伝えた。今後の整備や運営手法決定に生かされる予定である。

7) 同時多発的な取り組みの重要さ

➤ 一事業者だけではなく、たくさんの事業者と行政が連動したことで、効果をあげることができた。さらに増えると中心市街地のイメージはがらっと変わる。連動性が重要である。

⇒ 中心市街地をどうするべきか、という議論とともに、どのようなマネジメント体制がのぞましいか、という議論につなげていく

- 和歌山市が京橋駐車場を親水公園とすることを都市計画決定したため、水辺の社会実験で得られたフィードバックを和歌山市に伝えた。今後の整備や運営手法決定に生かされる予定である。

8) 分野を超えた取り組みの必要性

➤ 観光政策や、まちづくり、都市政策につながりうる要素が、水辺にはある。連動性をもって進めるべき。

⇒ 可能な限り連動してすすめる。

- 観光舟運のテストクルーズを実施し、事業性、満足度などを調査する。

9) にわとりとたまごの理論を超えられるか

➤ 「水質改善がされなければ、賑わいがつくれなない」あるいは「賑わいがつくれなければ、水質改善の意識は高まらない」は、ほぼ同じ結果を導くための別の手法であり、どちらが欠けてもいいということはなく、まさににわとりとたまごの関係である。賑わいをつくることで、環境意識が高まることと環境啓蒙を連動させることが重要である。

⇒ 水質改善はにわとりとたまごの理論。着実にどちらも推進することでしか解決できない。

- 子どもたちへ環境学習機会を提供するなどを引き続き行う。

これらの検討に基づき、以下の方針で、2018年の社会実験を実施した。

- 1) 観光で舟運は活かせるか
 - ⇒ 活かせるが、工夫が必要
 - ① 棧橋が必要
 - ② 景観形成、修景が必要
 - ③ まちなかのコンテンツとの連動が必要
 - ④ 関係者が自発的に事業を起こすためのきっかけが必要
- 2) 環境学習機会をつくることで、どのような効果が得られるか？
 - ⇒ 子どもたちの水質環境への意識が高まる
 - ⇒ 義務教育学校の実験的取り組みとして位置付けられる
 - ⇒ 文教地区としての中心市街地の価値を高められる
- 3) 子どもがいる家庭もターゲットにしたコンテンツを水辺にあつめると、人はくるのか
 - ⇒ 2017年度のターゲットが、一人でくる大人を想定していたが、和歌山市の中心市街地でイベントをするときには、子どもをふくめてターゲットにする必要があるのかもしれない。
- 4) この指とまれ方式で水辺イベントをやると、協力者は現れるか？
 - ⇒ それぞれの方法で、有償無償のさまざまな協力をいただく。未来への貢献を共有できる機会をつくることで、さまざまな主体と協力関係を持てることは、今後のまちの価値向上のために、重要である。
- 5) 水辺イベントをやることで、将来の水辺の賑わいをイメージできるようになるか
 - ⇒ これまでのアンケートでは水辺が賑わうことへの肯定的意見は多かった。実際にこのような機会を、より多くの人々と共有し続けることでまちが変わっていくかもしれないので、継続して実施できる方法を検討する。
- 6) 水辺のレストランなどの事業者は、規制緩和をすると、ルールに則った活用をしてくれるか
 - ⇒ 事業者によるルール順守とそれをサポートする仕組みを検討する。
- 7) オープンイノベーションでコトを起こしていく時に中間組織として必要な能力とはなにか
 - ⇒ 他者と信頼関係を構築
 - ⇒ 聞く耳をもつこと
 - ⇒ 公共的利益と私的利益を分けて考えることができる能力
 - ⇒ 俯瞰的に見たり、マクロで見たりなど、さまざまな見方ができる能力
- 8) 財源確保のために、どのような手段があるか。イベントでどの程度稼げるか
 - ⇒ 稼ぐことは難しいが、投げ銭やクラウドファンディング、会費制のクラブ運営組織などを試してみるといいのではないかと。
- 9) 中間組織は、どのような組織にすることがのぞましいのか
 - ⇒ 和歌山の場合、中間的な組織が、年一回程度のイベントを目指して組織を運用していくこと、その組織が規制緩和をうけるための実行組織であること、その

組織には建築や都市計画などの専門家、経営的視点を発揮できる人材、行政との書類のやりとりに慣れている人材が必要ではないか、などを検証する。



わかやま水辺プロジェクトのあゆみ

実現してみたい水辺の未来をともに描く

水辺であそぼう！

WAKAYAMA MIZUBE CHALLENGE

より多くの方々とともに
チャレンジする機会を

2018



公共空間活用実験

わかやまの水辺でできることをやってみせる。
いくつかの実験を行いました。

多様な主体に使っていただく運営の実験



2016

ワークショップを複数回開催。和歌山の
水辺に対する期待を言葉や絵にして
みました

2017

イベントがあれば、人は来てくれるのだが・・・

舟運実験

可能性はある。遊覧、コンプレックスなど一歩ずつ改善したい

レンタルボート実験

可能性はある。事業性の可能性はある。

水上アクティビティ実験

水辺のことに関心をもった方がたくさん来てくれる

文教科

区ならではの新しい魅力になる。子供達の思いがけず受け入れ

3.5.1. 事前調査

2018年の社会実験実施にあたり、水辺プロジェクトの活動とともに実施できる団体や、イベントを探った。わかやま城下町バルとの連携、舟運ルートの開発、水上アクティビティ、内川ファンド、総合学習等、それぞれの分野において事前調査を行なった上で、今年度の社会実験実施のプランを組み立て、各方面に調整を図った。

1) 舟運ルート開発

まず各地の主な観光船の事例調査を行った。



これまで舟運ルートといえば、南海市駅前～ぶらくり丁雑賀橋間で実施されることがほとんどであった。市堀川から周辺部への舟によるツアーやこれまで実施されたことがなかった夜間の舟運や、屋形船による食事とセットで提供するサービス等を検討した。7月17日、事前調査としてユタカ交通さん、語り部さんに参加してもらいルートや所要時間等を確認してツアー案を作成した。また、足こぎペダルボートによるアクティビティ開発が可能かどうかを検証するために電話によるヒアリング調査を行なった（大池遊園、黒沢牧場）

2) 内川ファンド

財源確保に関する調査については、まず本年度実施する社会実験において企画するプログラムへの協力を募るかたちを取り、地元企業とのつながりをつくることに取り組んだ。

これまでの取り組みで関わってもらった個人・企業や今後の活動を見据えて地元の個人・企業に打診し、数社（数者）の協力（物品等を無償提供していただいたものに限る）を得ることが出来た。

●協力企業等一覧（順不同）

協力者／協力社	協力内容	備考
フェスタ・ルーチェ実行委員会	フェスタ・ルーチェ フォトスポット	
白樫木材	角材ベンチ	
島さん（メガチューブ）	丸太脚ベンチ	
世界一統	酒蔵見学	
和歌山市（商工振興課）	遊歩道イルミネーション	

●提供物品・サービス（順不同）

フォトスポット	丸太脚ベンチ	角材ベンチ
		
遊歩道イルミネーション		酒蔵見学
		

白樫木材白樫氏、フェスタ・ルーチェ実行委員会、メガチューブ島氏からは水辺チャレンジのイベント拠点に設置するベンチやフォトスポットの提供を受け、多くの方に利用された。

和歌山市商工振興課とは昨年につき、市が進める遊歩道のイルミネーション整備に対して助言を出し、中橋から城北橋の区間でイルミネーション整備が行われ、10/20に合わせて点灯スタートさせた。世界一統からは自社の酒蔵見学や解説などによる企画協力を受け、舟運を使った観光ツアーを実施することができた。

財源確保という点では、直接的な成果を得ることはできなかったが、今後の継続的な協力関係をつくるきっかけと捉え、引き続き財源確保のための手法について、リサーチや検討を進める必要があることを挙げる。

- 財源確保のための具体的アクションは十分に行えたとは言えないが、「わかやま水辺チャレンジ」を通して個人、企業や団体とのつながりをつくることは出来、イベント時に様々な形での支援、応援を得ることができた。
- 来年度以降この取組を受け継ぐ民間の推進主体は、この関係性をさらに深める努力、工夫を重ね、自立した組織運営を目指すことが課題になる。
- 資金調達方法のResearchについて継続し、最適な財源確保の手法を備えることは急がれる。当面は水辺空間の利活用を行う事業者の「受益者負担」による体制維持も最善の方法である。
- エリアマネジメントを見据えてイベント収入をあてこんだ運営を行ったが、それだけで自立した経営をすることは難しかった。今後予想される公共財産の民間活用の仕組みをうまく活かし、民間による稼ぐ仕組みとエリアマネジメントを中心に市街地活性化の目的のもと、一体的に運営することが望ましい。
- 既存公共空間の利活用や新たな公共空間の整備、運営において、受益者負担の原則による持続可能な運営は必要である。さらに民間が公共空間の運営や投資回収事業を継続するための仕組みを検討することは継続して行う。行政側が公共サービスとして行うべきことと民間が行うべきことを整理することで、最適な財源を確保することにつながる。

3) 総合学習

2017年は、京橋駐車場で実施した社会実験に興味を示した伏虎義務教育学校6年生の生徒たちとともに川の来歴や、生き物に関する学習を行った。2018年度も同校の先生方に、総合学習等で水辺を題材にしたアクティブラーニングについてヒアリングを実施したところ、3年生担任の中山義之先生が興味を示され(株)総合水研究所の平井研氏を交え数回にわたる打ち合わせ実施し、以下の計画を立てた。

○市堀川生物調査 実施計画書

1、実施日：2018年6月1日（金）

2、実施場所：和歌山市立伏虎義務教育学校、及び市堀川

3、対象：3年生 3クラス 計90名

4、講師：

楫 善継（和歌山県立自然博物館 学芸員）

平井 研（(株)総合水研究所、和歌山県環境学習アドバイザー、徳島大学大学院非常勤講師）

伏虎義務教育学校：3年1組 広田先生、3年2組 沼本先生、3年3組 中山先生

5、実施内容

市堀川での水辺の生物調査を実施。投網やカゴなどを用いて、市堀川に生息する生物を捕獲、観察する。

6、タイムスケジュール

時間	内容	担当
前日	<input type="checkbox"/> カゴの設置	平井
12:00	<input type="checkbox"/> 生物調査 準備 (京橋駐車場 集合) →投網の試験実施、設置カゴの状況確認	楢先生、平井
13:35	【2階多目的室】 <input type="checkbox"/> 講師自己紹介 <input type="checkbox"/> 活動時の注意説明 <input type="checkbox"/> 内容の説明 →どんな生き物がいるのか事前に予想してもらう	平井
13:50	<input type="checkbox"/> 市堀川へ移動	中山先生
14:05	<input type="checkbox"/> 現地到着 <input type="checkbox"/> 生物調査実施、捕獲した生物の解説 →網やカゴにかかった生き物の観察	楢先生
14:40	<input type="checkbox"/> 生物調査終了 <input type="checkbox"/> 学校へ移動	中山先生
15:00	<input type="checkbox"/> ふりかえり →活動から学んだこと、感じたことを文章にまとめる →意見と分かち合う	中山先生
15:25	<input type="checkbox"/> 授業終了	-

7. 準備品 機材 個数 準備担当

機材	個数	準備担当
ノートPC	1	平井
大型モニター	1	学校
投網、観察用水槽	適	博物館
魚カゴ、エサカゴ、ロープ	適	平井
セルびん、おもり	適	平井
エサ (サンマ、オキアミ)、カッター	適	平井
たらい、バット、ふるい	適	平井
バケツ	適	平井
工具箱	適	平井
胴長、長靴、カッパ	適	平井
水質計、透明度板	適	平井

子ども達には汚れてもいい服装・靴、着替え、水筒、帽子、タオルを準備してもらってください

8、危機管理対策

▼実施前確認事項

当日実施前に必ず関係者全員でミーティングを行う。

確認事項	チェック欄
①参加者及びスタッフの人数確認	児童： 人、スタッフ： 人
②参加者及びスタッフの体調、アレルギーなどの確認	参加者： 、スタッフ：
③現地の異常確認	
④緊急時の連絡先を確認	連絡先：
⑤避難場所、救急箱などの所在確認	避難場所： 救急箱：

▼危険が予想されるポイントと対策

危険のポイント	対 策
①熱中症にかかる	15分を目安に水分補給をするよう声掛けをする
②落水する	指導者よりも前に行かないように事前説明しておく
③移動時に交通事故に遭う	列の前後に大人を配置し、周囲の車両に注意する

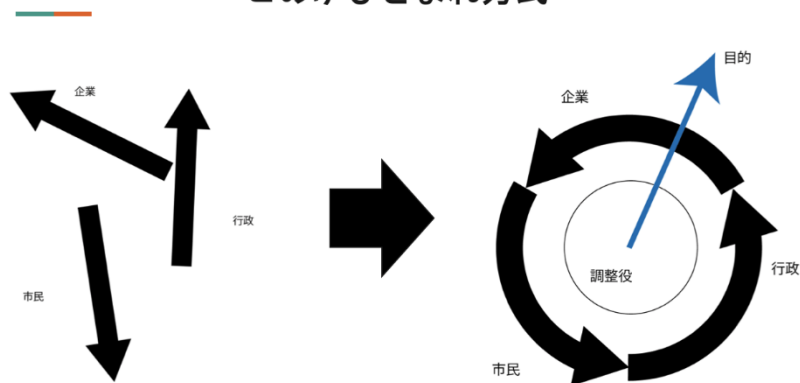
3.5.2. わかやま水辺チャレンジ

和歌山水辺チャレンジと題して、2018年10月20日(土)11:00~21:00に京橋を中心に、水辺にひとが集まり、楽しめるまちにしたいという願いを込めて、みなさんに提案する、わかやまの“まちなか”、“水辺”を楽しみ尽くせる日!として企画。

同日開催の「わかやま城下町バル」と連携し、水辺を介してまちを楽しめる仕掛けを用意した。雑賀橋、京橋、伝法橋の3箇所に船着場を設置し、シャトル船の運行や、世界一統酒蔵ツアーと題して酒蔵見学と屋形船ツアー

を企画した。和歌祭で御船歌を披露する『唐船御船歌連中』による舟歌も披露して頂き、演出にもこだわった。また、WASSUPさんの協力で、昨年実施できなかったSUPツアーやSUPカフェを企画して頂いた。水辺の夜間演出のライトアップ社会実験と、それを船から楽しむこと、屋形船として飲食を楽しみながら体験することを提案した。周辺飲食店の地先利用とバルイベントとの連携により、地先利用のPRも実施した。

このゆびとまれ方式



○イベント概要

開催日時：2018年10月20日(土) | 11:00~21:00

開催場所：京橋プロムナード、京橋駐車場広場ほか、市堀川の水辺

主催：和歌山市

運営：わかやま水辺プロジェクト

協力：わかやま城下町バル実行委員会、株式会社世界一統、ユタカ交通株式会社、フェスタ・ルーチェ実行員会、よしもとクリエイティブ・エージェンシー、那智勝浦町、WASSUP、アルゴス、JR西日本和歌山支社、南海電気鉄道株式会社、唐船御船歌連中、NPO法人市民の力わかやま、長町志穂 | 株式会社LEM 空間工房 (順不同)

図表 3-5-1 : イベント地図



○ステージイベント

ミュージシャンのライブや中学生の合唱、船唄やけん玉パフォーマンスなどが演じられたほか、和歌山県住みます芸人「わんだーらんど」によるマグロ解体ショーを披露していただいた。

- ・ステージイベント 協力団体数 9

図表 3-5-2 : ステージイベントの様子





○マグロ解体ショー

和歌山県住みます芸人の「わんだーらんど」さんが、マグロ解体のトレーニング中とのことで、水辺チャレンジを初お披露目の機会としていただいた。お客さんの前で見事な包丁さばきでマグロ解体を披露。華々しく「マグロ解体芸人」としてデビューした。テレビ番組やラジオで水辺チャレンジのイベントの告知も積極的に協力していただいた。

協力：那智勝浦町

図表 3-5-3：マグロ解体ショーの様子



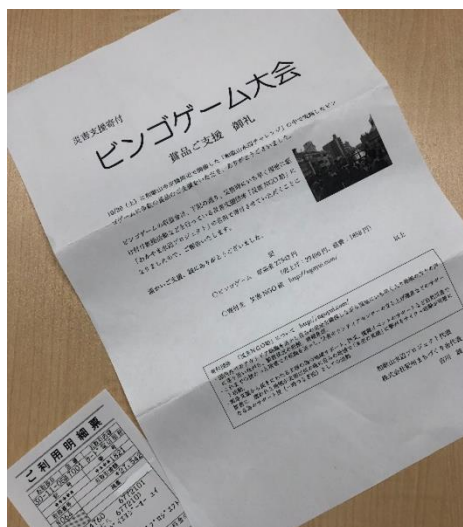
○チャリティービンゴゲーム

イベントに来場してくれた方や協力してくれた方々に楽しんでもらう企画としてチャリティービンゴゲームを実施。

イベントに協力、協賛いただく団体などから景品を募り、ビンゴカード（1枚300円）の収益金は災害NGOに寄付した。

- ・ビンゴ大会参加者数 138人（現金98人、その他はステージ登壇者等の無料券）
- ・収益金 27,542円
- ・協賛団体数 26団体

図表 3-5-4：チャリティービンゴ大会の様子



○わくわくダンボール迷路

京橋の上でダンボール迷路を子ども連れのファミリー層が楽しめる企画として実施。参加費一人100円。

- ・参加者数 55人
- ・売上 5,500円

○水辺宝探しゲーム

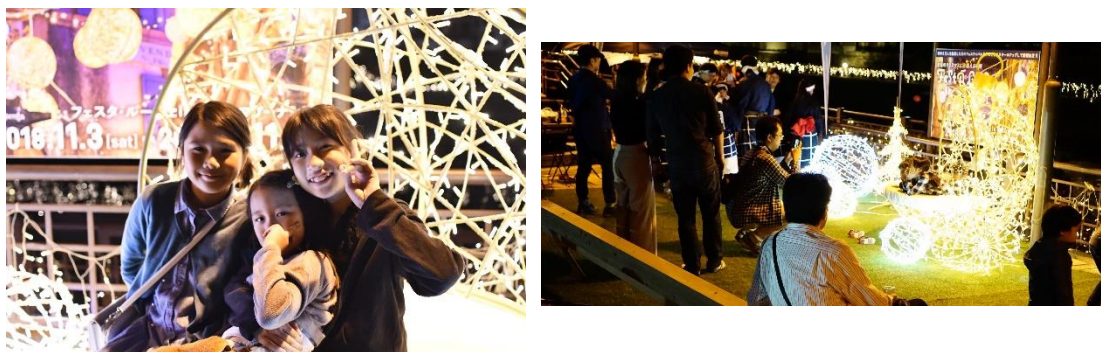
まち歩き感覚でまちなかや水辺を楽しんでもらう企画として、宝探しゲームを実施。まちなかに仕掛けられたヒントを頼りに宝箱を開ける数字を探すゲーム。参加費一人800円。謎解き好きが集まった。この機会をきっかけに船に乗ったり、水辺をあるいたりする機会をつくることができた。参加者も楽しんで頂けた。

- ・参加者数 13人
- ・売上 10,400円

○フェスタ・ルーチェ フォトスポット

マリナシティで開催されるフェスタ・ルーチェとのタイアップ企画として実施。夜の水辺のスポットとして賑わいに大いに貢献していただいた。

図表 3-5-5：フェスタ・ルーチェ フォトスポットの様子



●協力者の声：和歌山城下町バル実行委員会：西さん



京橋の上でいつもより狭くなったんだけど、それによる人の密集感がよかった。

いつもと違う客層もきてくれて、ありがたいなあ。

向かいのエリアも有効に使えたらいいなあ。

テントを木製でオシャレにできたらもっと雰囲気よくなると思う。

- 「この指止まれ方式」
水辺チャレンジ実施にあたり、この指止まれ方式でたくさんの人を巻き込み協力体制を作っていた。それぞれにしかできない方法で、有償無償でさまざまな協力をしていただいた。未来への貢献を共有できる機会をつくることで、さまざまな主体と協力関係を持てることは、今後のまちの価値向上のために、重要である。
- 「3方良し」が望ましい
「3方良し」を基本に事を進めていくことが成功への鍵であると考えている。例えば、ワンダーランドさんのマグロ解体ショーを例に挙げると、ワンダーランドさんにとってもマグロ解体芸人としての初披露の機会であり、イベント主催者にとっても、お客さんにも、那智勝浦町にとっても win-win-win-win な関係を持つことができ、広報にも大きく貢献していただいた。
- 「巻き込み協力体制」
中心市街地は居住人口が少なく、何もない週末より平日の交流人口の方が多い。何かイベントを打ち出す時の告知の進め方が重要である。この点においてもこの指止まれ方式でたくさんの人を巻き込み協力体制を作っていたことで効果的に実施できた。
- 「子どもをターゲット」
子どもがいる家庭もターゲットにしたコンテンツを水辺に集めたことで集客に効果的であった。中心市街地でイベントをするときには、子どもをふくめてターゲットにする必要があると感じた。
- 「回遊性を促すしくみ作り」
今回同日開催でわかやま城下町バルを開催したことや、少し離れた大新ピクニック（大新公園で行われたマルシェイベント）も同日開催されたことは、結果としてまちに回遊性を促したと感じている。にぎわい創出において、回遊性を促す仕組み作りが重要であることが認識できた。
- 「水辺の賑わいをイメージさせる」
シャトルクルーズや屋形船の運行、水辺の夜間景観形成を1日に凝縮してみせることができたことで、このまちの、この水辺の可能性を市民の方は感じたと思うし、将来の水辺の賑わいをイメージできたと感じる。観光、まちづくり、都市政策につながりうる要素が水辺にはあって、連動性を持って進めていくことが重要である。

3.5.3. 地先利用

昨年度につづき、市堀川の河川空間に接する民間建物で営業する飲食店舗による地先利用の社会実験を実施した。

今年度は市堀川に面する飲食店舗の事業者への取り組み周知による認知度向上、事業者の社会実験参加を通して水辺空間の主体的管理運営に関心を持ってもらうことを成果目標とし、昨年度に引き続き市堀川に整備されている遊歩道や護岸等の地先利用社会実験を企画・実施した。

3.5.3.1. 地先利用の具体的内容とPRについて

昨年度の地先利用事例や現場の実情を踏まえて利用例を示し、参加事業者と相談のうえで利用スタイルを決定してもらった。

地先利用の告知にあたり、企画内容を記した案内資料を作成し、ホームページやFacebookなどのソーシャルメディア上や定期開催していたオープンミーティングの場を使いPRを行いながら、市堀川沿いの店舗事業者を訪問し、企画説明と参加協力の依頼を行った。この中で参加してほしい事業者イメージも示し、今後の水辺空間利活用の主体づくりも見据えた。

この取り組みについては、あらかじめ関係する地域の自治会への説明も行い、社会実験の目的への理解を図った。

図表 3-5-6：地先利用呼び掛け用資料

わかやま水辺プロジェクト
遊歩道スペース等の水辺空間活用社会実験のご案内

【社会実験の主旨】

わかやま水辺プロジェクトは昨年引き続き、市堀川を中心に市内水辺空間の魅力を活かした利活用のあり方を考えていきます。
今年度は川沿いでお店などを営業される方々に遊歩道などの公共スペース利活用に関心を持ってもらうことを目的とした社会実験の準備を進めます。
この社会実験は、まちの財産でもある水路や水辺空間の価値や魅力を高めることにつなげ、和歌山のまち魅力を高めることや新しいまちの賑わいをつくる機運をさらに高めることにつなげていきたいと考えています。

【社会実験の内容】

市堀川、和歌川の水辺に整備されている遊歩道スペースや未利用の土地を期間限定で利用できます。
【利用例】

- イスやテーブルなどの家具を置いて遊歩道の一部を外席として利用する。
- 店舗から出入り出来る川床を設置して、水辺に接するオープンスペースをつくる。
- 遊歩道からお店に出入り出来る階段・通路をつくり、水辺につながる





家具を置いてオープンテラスとし 川床を設置してオープンスペースをつくる 遊歩道から出入りする階段等をつくる

また、上記以外の利用アイデアがあれば、事務局に相談してください。

利用期間は10月20日(土)に開催予定の「城下町バル(主催:わかやま城下町バル実行委員会)」を含む期間を予定しています。
なお利用期間に応じた社会実験参加費が必要です。
・A: 「城下町バル」開催日(10/20)の一日利用 --- 2,000円
・B: バル開催日を含む一定期間*の長期利用 --- 7,000円

*「一定期間」とは河川管理者から許可を得た期間となります
※城下町バルに参加希望の方は別途バル参加費(3,000円)が必要になります
城下町バルの詳細は実行委員会事務局にお問い合わせください
※参加費は社会実験の広報PRの活動やツール製作にあてます
※長期利用の際の利用開始日は河川管理者からの許可取得後の決定となります

【こんな方々の参加をお待ちしています!】

- まちなかの川や水辺に何か魅力や将来性を感じている方。
- 水辺の遊歩道や未利用の空地をお店の一部として使用したいと感じている方。
- お店に新しい魅力や価値観が欲しいと感じている方。
- 河川や遊歩道空間の魅力な使い方のアイデアを持っている方。
- 水辺空間の管理運営を通して、地域の魅力づくりに貢献したい方。

【社会実験概要・注意事項】

- ・ 利用期間: A: 一日利用(10/20予定)
B: 長期利用 ※開催日、期間は河川管理者との協議にて決定
- ・ 参加対象者: 上記河川沿いの飲食店等店舗オーナー、ビルオーナーなど
- ・ 実施対象エリア: 市堀川、和歌川の一部/遊歩道や未利用の地先などの河川空間
エリアは市堀川の一部、和歌川の一部の河川水辺空間(赤色点線の範囲)(和歌山県河川管理区域内)
- ・ 参加費用: 利用期間ごとに異なります(A: 2,000円 B: 7,000円)
- ・ 申込方法: 添付申込書に必要事項を記入してプロジェクト事務局までFAX、メールにて送付ください。
- ・ 申込期日: 2018年8月31日18時まで



【注意事項】

- ・ 河川管理者、地元地域住民など関係者協議の結果、河川占用許可がおりない場合があります。
- ・ 遊歩道に設置する椅子やテーブル、テラスや階段などの準備・設置にかかる費用は参加事業者の負担になります。
- ・ 社会実験時に設置したものは河川占用許可期間終了7日までに撤去し、原状回復することになります。
- ・ わかやま水辺プロジェクト、和歌山市、実験参加者でつくる社会実験運営チームに加わり、安全管理などの利用ルールづくりや社会実験のPRやアンケートなどの調査に協力いただきます。
- ・ 社会実験に関する問い合わせはメール・ファックスをお願いします。希望者には個別に相談をお受けします。
(個別相談は事務局にお問い合わせいただき、相談日程を調整します。)
- ・ その他、地先利用社会実験に関する詳細は下記問い合わせ先までご相談ください。

【申込、問合せ先】

わかやま水辺プロジェクト 事務局(担当: マツモト)
メール | area@kisuyumachi.com FAX | 073-425-8583
ウェブサイト | <https://www.wakayama-mizube.com>
Facebookページ | <https://ja-jp.facebook.com/wakayama.mizube.project/>

【参加申込書】

参加者氏名(会社名・代表者名)	参加者住所
店舗名	電話番号/FAX番号/メールアドレス 全てご記入ください。
店舗の概要、ホームページアドレスなどを記入ください。	
希望する利用期間を教えてください A: 一日利用 / B: 長期利用	

II-91

図表 3-5-7：直接社会実験への呼び掛け店舗の一覧

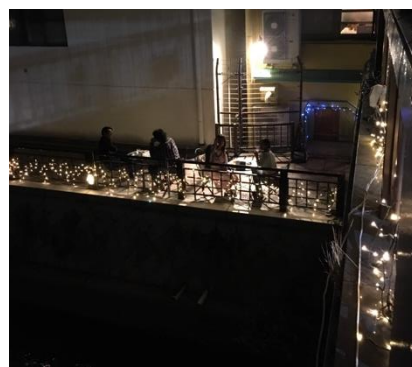
店舗名	業態	社会実験への参加
バー エイト	飲食店（バー）	×
ヌメロオンセ	飲食店（バー）	×
Bar 風	飲食店（バー・レストラン）	○
慈庵	飲食店	×
炭火焼鳥 だん	飲食店（居酒屋）	×
GRASS	飲食店（バー）	○
むすび家	飲食店	×
水辺焼肉 meat×meet	飲食店（焼肉店）	○
水辺座	飲食店（居酒屋）	○

今年度は 4 軒の飲食店舗より地先利用社会実験への参加協力のもらい、当該建物の地先部分の河川占用許可を受け、地先利用を行った。

4 軒のうち 2 軒は遊歩道上を占有し、椅子・テーブル等を配置した簡易な利用モデルでの実施、2 軒は工作物を設置した利用モデルでの実施となった。

地先利用は 10 月 20 日の「わかやま水辺チャレンジ」に合わせてスタートし、今年度末までの占用期間内で利用可能とした。

図表 3-5-8：地先利用実施の様子



3.5.3.2. 成果と課題／検証項目の評価

今年度は一昨年の社会実験の取り組み準備の経験を踏まえ、早い時期からの企画検討と実施 PR と参加店舗の決定、許認可手続きが行えるように準備を進めてた。実験の開始は 10 月 20 日実施の「わかやま水辺チャレンジ」にあわせ、当日開催されていた城下町バル（主催、城下町バル実行委員会）を楽しむ利用客に水辺の外席として体験してもらうことができた。ただし利用できる店舗の事前周知が十分に行えなかったことや「わかやま水辺チャレンジ」の実施会場での周知を行うことができなかった事は課題として捉えている。

また、地先利用社会実験に参加した店舗のうち「水辺座」の地先利用については河川管理者との協議の結果、不法占用状態にある工作物設置をこの占用許可の手続きに含めることで適正化できることを確認し、その旨を事業者も了承の上で社会実験に加わってもらった。しかし、手順の不備や利用状況に対して近隣よりクレームが届く結果となった。

言うまでもなく河川空間は公共空間のひとつであり、それは常に近隣や地域、公共に対する配慮と貢献を伴う自治精神を意識することが重要であり、改めて使用する事業者や利用調整を図る事の重要性を痛感し、この点は今後立ち上げを予定している水辺のまちづくりを推進させる民間の中間組織において注意する点である。河川空間の適正な利活用を進めるためには、事業者の意識を高める事、近隣や地域との関係性を円滑に深めるための機会・場づくりと情報発信が課題になる。

この件からは地先利用に関して、利用方法や設置する工作物等の内容の把握とこれを確実にするための手続きの確立が必要で、万が一の時のリスクの負担や責任の所在を含め、利活用に取り組む中間組織と地先を利用する事業者との間で各種ルールを遵守する旨の書面をかわすなどの具体的方法の検討を水辺空間の利活用を進める中間組織に向けて提案する。

地先利用の内容などについて、実験に参加した店舗の利用実績は十分なものとは言えず、実績の蓄積は当事者意識の醸成という点では課題残ったと捉えている。事業期間内での醸成は難しく、来年度以降も関心ある事業者との対話やワークショップなどの学びの機会を作り、意識醸成をはかる必要がある。

しかし、事業者の地先利用や河川空間への興味や関心の度合いを確認できたことは大きな成果であった。特に10年20年と長く市堀川の水辺で飲食店を営む事業者の方々からは、「遊歩道の活用や河川空間そのものに対して色々な意見や考えを思いつき、これを市や県に訴えたいと思うことが度々あったが一個人の声が届いたり取りあげられたりすることは難しく、どうしようもないと思っていた」が、今回の取り組みにより「同じ思いを持つ人たちが集まることで個々が持っている考えを話し合い、意見を共有することができ、地域の声として掲げることができる」と話されており、今回の社会実験への参加は他の事業者を知り、考えを交わすきっかけになると評価してくれた。また事業者の方々に来年度以降の河川空間利用の継続や利活用推進に取り組む中間組織への参画協力の打診を行った結果、利用継続の意向と参画協力についても前向きに考えたいとほとんどの方から頂くことは出来た

ことは、大きな成果である。

- 9軒の店舗に直接案内を行なった結果、4軒が手を挙げ地先利用にチャレンジしてくれた。
- 実際の利用法として遊歩道の一部を外席として利用したり、遊歩道上にテラスを設置して外席として利用していたが、1軒のみ具体的な利用法が示されたり実施されないまま、工作物を設置し続ける店舗があった。
社会実験時の利用ルール周知が不十分であったことや、公共空間利用への理解を求めることが不十分であったために、利活用の拡大解釈を促す結果を招いたことは重大な反省点であり、今後の河川空間利活用とこれをマネージメントする中間組織においては、利用目的や方法、責任の明確化やリスクに備える各種ルールの策定が重要である。
- 今年度参加した3軒の事業者については、引き続き地先利用を行なっていくことで、水辺利用の推進主体としても協力したいと表明してくれている。これらの思いある事業者と共に地先利用に関するルールを策定し、運用しながらその様子を見てもらいながら、事業者の参加を促がす事が最善であると考え、地先利用の取組は継続することが望ましいと考える。

3.5.4. 舟運

舟運社会実験事前調査で行なった各種ヒアリングなどをもとに次の舟運事業を企画実施し、評価を行った。

3.5.4.1. モニタークルーズ

2018年7月30日事業者向け舟運モニターツアー実施した。徳川をテーマに和歌山城を含む和歌浦周辺の観光スポットを巡るツアーと屋形船で和歌山の幸弁当とお酒を楽しむ屋形船ツアーの2本立てで実施した。モニターツアーにはユタカ交通、近畿日本ツーリスト、JR西日本、和歌山ミオ、みんとしよ、よりご参加頂きアンケートを実施した。舟運に適した船の選定、検討、情報収集を実施した。船は今回アルゴス号及び農水丸を使用した。

(ア) 「水辺から徳川家ゆかりのスポットを巡る」舟運ツアー

(イ) 夜間実施 屋形船ツアー

2018年7月30日に、観光事業者様を対象とした「わかやま水辺観光モニターツアー」を実施した。テーマは最もオーソドックスで知名度の高い徳川家に焦点を置いた「徳川水辺の足跡を追う」とし、ツアー名を「水辺から徳川家ゆかりのスポットをめぐる」とした。

徳川家の持つ歴史と水辺(船移動)が結びついたきっかけは、和歌山市内にある多くの観光スポットは船でつなぐことができるとわかったからです。和歌山市の市街地の観光スポットを船で周遊することで、川・海の楽しみも加わり、より観光客の皆さんに楽しんでいただけるようになるのではないかと考えた。

そこで、旅行会社や鉄道事業者など観光事業者様を対象にしたモニターツアーを実施した。旅程の検証を行うとともに、参加者にアンケートを実施した。

(ア)「水辺から徳川家ゆかりのスポットを巡る」舟運ツアー

当日は午後1時に和歌山市駅近くの伝法橋を船で出発し、観光スポットを船と徒歩、観光タクシーの組み合わせで回る旅程で実施した。

まず説明を受け、伝法橋を出発！ 快晴。



京橋駐車場で一旦下船し、和歌山城を見学。
歩きながら、徳川家のこと、昔の町並みのことなどをガイドしてもらう。



そしてまた船に乗り込み、養翠園へ移動。
水の上から見る和歌山市の町並みは、普段見られる風景とは全く雰囲気が違い、格段にきれい。車に乗ってではなかなか見られないものもたくさん目に入ってくる。



船の上でも和歌山市の歴史や観光スポットについてレクチャーを受ける。



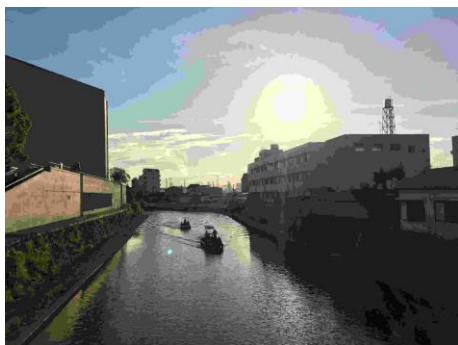
目的地近くの棧橋で船を降り、養翠園へは徒歩移動。

養翠園は紀州徳川家によって造営された庭園です。文化財として国に指定されている。



タクシーで紀州東照宮などのスポットも巡る。「徳川」というテーマに絞っているが、たくさん見どころがある。

紀州東照宮は徳川頼宣によって創建され、徳川家ゆかりの神社として知られる。本殿等は国の重要文化財に指定。



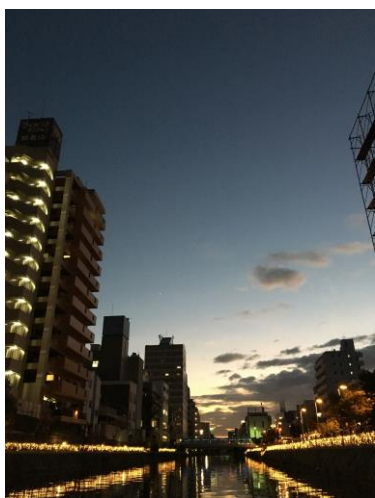
観光スポットを回っていると日が暮れてきて、帰り際には夕日に。

船から見る夕日は最高の体験。

(イ) 夜間実施 屋形船ツアー



夜には船の上でお弁当を食べたり、ライトアップを楽しんだり。昼とは全く違うまちの顔が見られる。



船で移動しながら和歌山市内の観光スポットをガイドさん付きで巡るツアーは、これまでにない体験をしてもらえるものになると実感した。

図表 3-5-9 : 当日の行程

13:00	集合～昼の部スタート～ 伝法橋へ徒歩移動→挨拶、説明
13:05	乗船（伝法橋）
13:20	下船（京橋駐車場） 昔の道沿いに町歩き観光（大手道）
13:40	和歌山城観光（～14:20） 今の道沿いに町歩き観光（本町通）
14:35	乗船（京橋駐車場）
15:00	下船（養翠園近くの棧橋） 徒歩移動
15:10	養翠園見学・トイレ休憩（～15:40） タクシー移動班
15:55	紀州東照宮（～16:25） タクシー移動班
16:35	妹背山（～17:00） タクシー移動班
17:15	乗船（養翠園近くの棧橋）
17:50	下船（伝法橋）
18:00	昼の部アンケート実施→昼の部解散
18:20	乗船～夜の部スタート～（伝法橋） 夜のコース（市堀川から見る夕日・ライトアップ）
20:00	下船・解散（京橋） 夜の部アンケート実施 （回答できなかった人は翌日メール等で送付）

図表 3-5-10 : 水辺から徳川家ゆかりのスポットを巡る、説明資料 1



図表 3-5-11 : 水辺から徳川家ゆかりのスポットを巡る、説明資料 2



参加者アンケートの主な結果・意見（抜粋）を紹介する。

- 乗り心地、景色、コースの意見
（肯定的な意見）

- ・ 普段見ることのできない景色を楽しむことができた。
- ・ 帰路の住金の全景と海から見る和歌山城が良かった。
- ・ 川と海の両方を楽しむことができてよかった。

(中間的な意見)

- ・ デッキの広い船だと快適なのではないかと感じた。
- ・ 船の時間が長いと感じた。帰りはタクシーでもよい。

(否定的な意見)

- ・ 海水がかぶって服が水浸しになった。
- ・ 暑かった。時期によるが日よけがあるとよかった。
- ・ 座りっぱなしになるのでクッションが用意されていると良かった

○和歌山城、和歌浦、語り部についての自由意見

(肯定的な意見)

- ・ 和歌山城は見ごたえあるし初めて聞く話も多かった。語り部の話が良かった。
- ・ 妹背山もあわせて和歌浦の魅力を初めて理解できた。
- ・ 写真やイラストでの説明が良かった。

(中間的な意見)

- ・ 時間が短かったと感じた。
- ・ 単発のコンテンツとしては多いと思うので丸一日ツアーであれば組み込みありと思うが、今日の内容ではもったいない。

(否定的な意見)

- ・ 少しコースが多い気がする。涼しい時間帯、季節であればなおよかった。
- ・ 全体的に同じトーンで話をされていたので、面白い内容に強弱をつけるなどエンタメ性を管理する必要があるかもしれない。
- ・ 船の上はエンジン音があり声をかき消されていた。

○全体、船で移動、改善点、価格設定、時間等に関する意見

(肯定的な意見)

- ・ 物語的な要素が感じられた。
- ・ 地元の方でも知らない観光地が多いと思うのでこのツアーをきっかけに和歌山の観光地を発信していきたい。
- ・ 船で移動は面白いと思った。やり方次第じゃないかと感じた。

(中間的な意見)

- ・ まちなか(和歌山城)からスタート、東照宮か天満宮周りで終了、あるいはその逆のコースで十分に思った。
- ・ 本日のコースはやや多いと思われるなと思うがもう少し付加価値を高める必要。
- ・ 地元の方を対象としたツアーとして普段見ない景色などを楽しむことができてよいと思ったが、県外の観光客やインバウンドのお客様には景色などの面で少し弱いように感じた。

(否定的な意見)

- ・ 今日のコースで商品化は難しいのでは？

- ・安全を考えると乗降場などに配慮が必要、川のおおいが少し気になった。
- ・棧橋の設備をもっときれいに改善してほしい。

○夜の部の意見

(肯定的な意見)

- ・途中でエンジンを止めてくれたので静かになり会話も楽しめた。また 2 隻の船をつないでくれたので一層会話が弾んだ。
- ・お弁当はふたを開けたときびっくりするくらい豪華でした。
- ・昼間だとどうしても目に入ってしまうゴミや雑排水が見えないのが良い。

(中間的な意見)

- ・船にテーブルとちょっとした照明、音楽があればいいと思う。
- ・お酒に合う食事を楽しめて少し高めの設定ができる内容が良いと思う
- ・満潮時に行けないところがある。

(否定的な意見)

- ・日にちや時間帯によると思うが川に浮かぶゴミが目立った。建物から漏れる明かりが少ないと感じた。
- ・座りやすい椅子、テーブルは必要。
- ・遊覧船とした場合見所が不足、住金の夜景が使えるなら◎、河口からの城は絶景のはず。

3.5.4.2. 屋形船で行く世界一統酒蔵ツアー

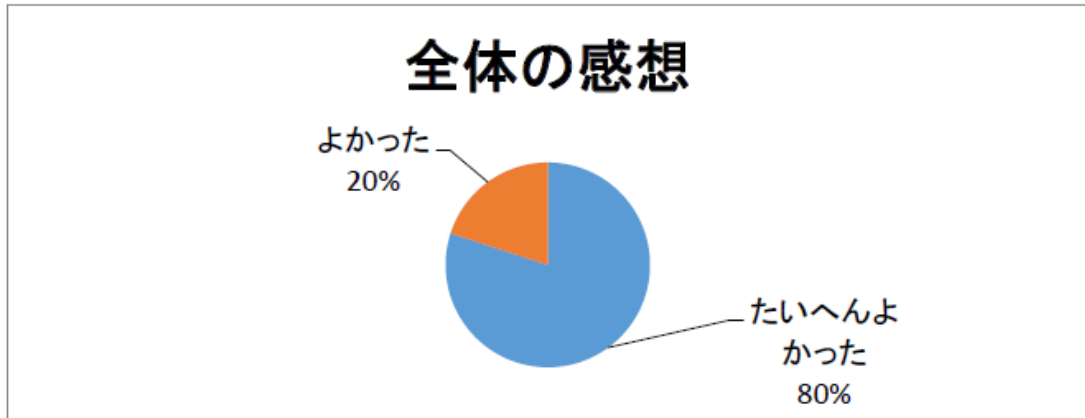
観光で舟運は活かせるかを検討するために屋形船と酒蔵見学をツアーにすることをユタカ交通さんとともに探った。まちなかのコンテンツとの連動が必要であると考え、世界一統の南方さんも協力を依頼した。

銘酒「世界一統」がつくられるリアルな現場の体験や、船上での美味しい食事とお酒を楽しむツアー。クルーズ出発時には唐船御船歌連中さんのお船歌による見送りもあり演出にこだわった。京橋をスタートして伝法橋へ、徒歩で世界一統酒蔵見学ツアーへ参加頂き、利き酒のお酒と各自升を頂いて再び乗船、和歌山の幸が詰まったお弁当とお酒でライトアップされた水辺を楽しんで頂いた。参加者の反応は上々であった。

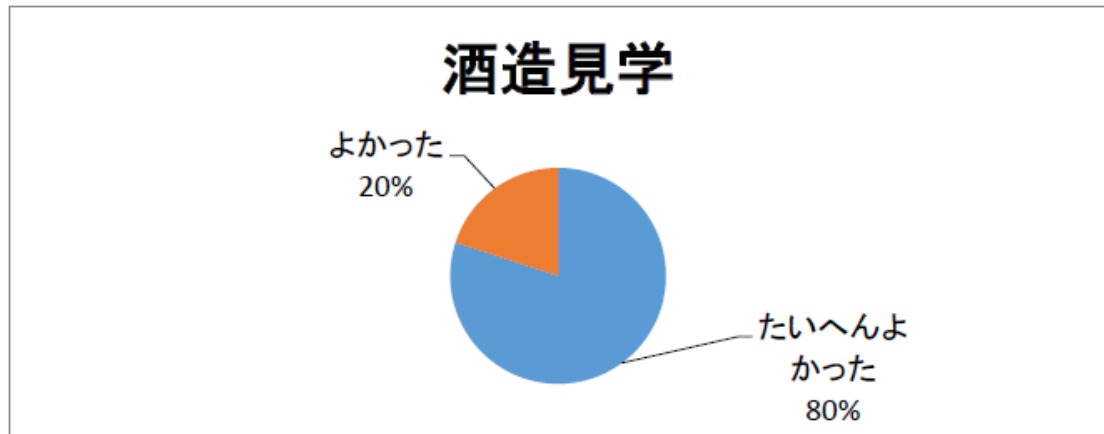
- ・実施日時 2018年10月20日(土) 16:30~18:30
- ・参加者 13名
 - 参加費 お弁当とソフトドリンクセット: 3,500円
 - お弁当とビール・酎ハイセット: 4,500円
- ・売上 55,000円
 - 内訳 お弁当とソフトドリンクセット: 8名、27,000円
 - お弁当とビール・酎ハイセット: 6名、28,000円
- ・支出 32,005円
 - お弁当 24,300円、ドリンク代 3,305円、駐車料金 1,400円。広告代 3,000円
- ・収支差額 22,995円(船代金等のぞく)

参加者アンケートの主な結果を紹介する。

- ・酒造見学について、たいへんよかったという意見が8割を占めた。

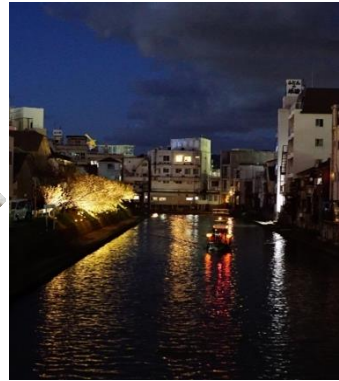


- ・全体の感想：たいへんよかったという意見が半数を占めた。



図表 3-5-12：世界一統酒蔵ツアーの様子





●協力者の声：ユタカ交通：川島さん、奥野さん



毎週水曜日のミーティングの課題を反映できているのか不安に思ったり、モニタークルーズに参加したり、大変だった。結果的にうまく行ってよかった。色々な人と関わられたし、普段できない体験もできた。長町さんの話とかも聞けて、とても勉強になった。屋形船ツアーで、人集めるのもどうなるかと思ったけど、集まってよかったし、収支もプラスでよかった。今回は一回だけの開催だったけど、継続的にやっていくのは、準備とか大変だと思った。赤提灯やりたい♪

- 「舟運のための景観整備」
夕方から夜間にかけて、水辺のライトアップを楽しんでいただくことは、評価が高かった。今後の課題としては、川沿いに植樹等による景観形成が必要である。また参加者の安全を確保するためには栈橋設置は必須である。
- 「酒蔵見学」
世界一統さんの、観光酒蔵ではない酒蔵見学は希少性がありプレミアム感があってよかった。
- 「観光拠点」
世界一統さんが観光拠点の一つとして自発的に活動していくことが望ましいと考える。そのためには、旅行代理店等の関係者が関わり、事業を起こすためのきっかけ作りが必要である。

3.5.4.3. 船でまちなかを移動！ リバーシャトル

昨年度に引き続き、まちの魅力を再発見する機会づくり、河川空間を体験する機会づくりと空間活用のひとつとして、まちの新しい魅力に触れる機会づくりとして、わかやま水辺チャレンジの中でクルーズを企画した。今年度は和歌山市駅付近、イベント拠点付近、まちなか付近の3箇所（雑賀橋、京橋、伝法橋）に船着場を用意し、これらを巡回するシャトル便として2艇のクルーズ船を運航した（運航協力：アルゴス）。利用に関して、乗船料を現金のほかに運航時に同時開催している城下町バルで発券するバルチケットを利用できる様に調整し、バル利用者の移動手段として利用してもらう事もねらい、舟運や河川に関する調査を行った。

実施概要

- ・日時：2018年10月20日
 - 昼便（11:00～16:00）
 - 夜便（18:30～21:00）
- ・料金：500円／1区間（バルチケット1枚で1区間の利用が可能）
- ・利用者数：160名（延べ人数／バルチケット利用、招待客含む）
 - 現金 63人（延人数・区間）
 - バルチケ、ちょいチケ 44人（延人数・区間）
 - 無料券（ステージ登壇者等） 約40枚
 - 宝探し 13人
- ・売上：44,700円（現金、バルチケット利用者に限る）
- ・コース：雑賀橋～伝法橋の区間



利用者アンケートから見ると、概ね好評価を得ており、川そのものを体験できたことや川から見るまちの景色に対する評価の高さは河川空間の潜在力の高さを示していると再確認できた。特に夜は水辺のライトアップ社会実験を実施したこともあり、ナイトクルーズへの評価は高く、舟運コンテンツのひとつとして有効である事を確認することができたと捉えている。

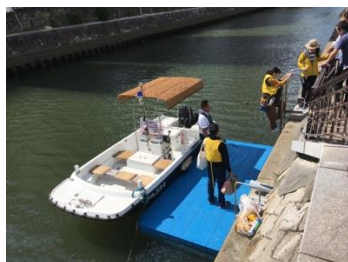


また、小さな子ども連れ利用者の意見から、船着場などの利用のしやすさ、利用者が船とまちをどの様に楽しむのかといったハードとソフトの双方にまだまだ検証や改善の余地が見られることから、引き続き実験的な取り組みが必要であり、舟運事業の実現を可能にする課題整理や環境整備に向けた取り組みが必要である。

3.5.4.4. 舟運事業実施に伴う施設整備について

昨年度の舟運社会実験では一部の船着場は護岸に直接横付けして船舶への乗降を行っていたが、協力珠運事業者への事前ヒアリングの結果、水位変化に伴う利用客の乗降時安全確保と船舶の安全に接岸させることへの懸念が上がり、これを改善するために今年度は係整備するすべての船着場に浮き桟橋を整備する計画とした。

京橋船着場



雑賀橋船着場



伝法橋船着場



仕様する浮き栈橋は既製品フロートを舟運事業者の協力により準備し、各船着場の護岸部分に係留して整備した。また水位変化への柔軟性を高めること、より安全に係留させる目的で簡易な係留金具を設置し、各船着場を同一仕様で整備することができ、浮き栈橋の安全性を確保した。

係留金具



3.5.4.5. 成果と課題／検証項目の評価

舟運の取組について 2018 年度の社会実験方針「観光で舟運は活かせるか」ということについて評価をあげる

- 舟運を活かすことは可能であるが、相当の工夫が必要であると言える。和歌山市において「舟運」とい体験はまだまだ浸透しているものではなく、引き続きイベント等による体験の機会をつくる必要がある。
- 河川から見る景色、風景や景観は高いポテンシャルを持っていると言えるが、これも整備の余地やより魅力的に見せるための仕掛けをつくる余地がある。水辺に面するお店がつくる賑わいの風景や緑化・ライトアップなどの環境整備、船上での飲食やアクティビティなどによる満足度を高めるコンテンツ作りへのチャレンジを期待する。
- 浮き栈橋を置いて舟運社会実験を行ったが、台風や豪雨の際の緊急避難に置いてコストやリスクが高いことが継続性を保つハードルになり、安全・安心のある操船や乗降を保つためにもハード整備による船着場整備が行われることが望ましい。

3.5.5. 水上アクティビティ

市堀川では水上アクティビティとして 2014 年より民間団体によるカヌー体験や SUP 体験が毎年継続的に実施されている。このことは、この川で遊べることを少しずつ市民に浸透させてきている訳であるが、実施事業者の収益性、経済合理性を担保できないことには継続実施は難しい。そこで今年度は、足こぎペダルボートの経済合理性に関する可能性を検証した。また、昨年検証した SUPCAFE と SUP レンタル事業に関しては、わかやま水辺チャレンジにおいて SUP ツアーを実施し、ツアーコースを検討した。

3.5.5.1. 足こぎペダルボートの利用及び経済合理性に関する調査

これまで、カヌー体験やSUP体験を実施してきたが、一般の方にこれらのアクティビティを提供する場合にはインストラクターの存在が必要不可欠であり、実施や安全管理にランニングコストがかかることが課題であった。そこで足こぎペダルボートが誰でも扱える比較的安全な水上アクティビティとして、収益性を担保し、恒久的に実施することができるか可能性を検証した。

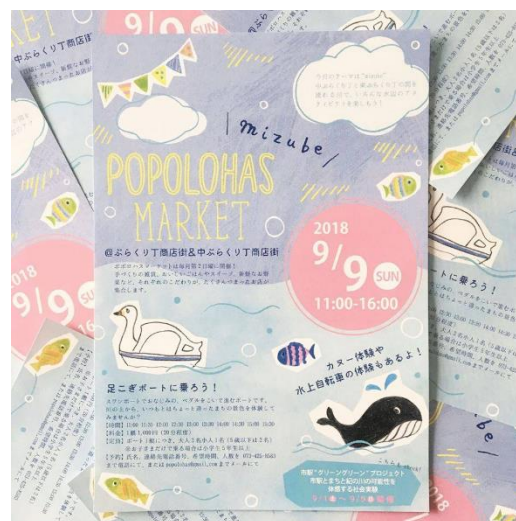
まずは、足こぎペダルボートによるアクティビティ開発が可能かどうかを検証するために電話によるヒアリング調査を行なった。

大池遊園さんによると、流れのない池のようなところであれば良いが、池でも風がある日は戻ってくるのが大変な時もある、川でのペダルボートの実施は難しいのではないとのことであった。ペダルボートの貸し出しは不可とのことであった。黒沢牧場さんは、ペダルボートの貸し出しに協力してくれるとの回答を頂き、現地に行きボートの確認と搬出ルートを確認をした。

2018年9月9日ポポロハスマーケットのテーマを水辺とし、雑賀橋周辺で足こぎペダルボートのレンタル事業を実施した。ボートは黒沢牧場より2艇お借りし、トラック輸送した。

レンタル価格は1艇20分1000円とした。(福岡の大濠公園の価格を参考)最大で大人2名小人2名の乗船が可能。11時から30分刻みで16時まで10回×2艇、合計20回はフル回転で利用があった。事前調査では川は流れがあるので難しいとの意見があったが、市堀川ではそれほど流れが問題に感じるほどではなかった。しかしながら、航行範囲を事前に伝えていてもそれを超えて航行される方もいたため、戻ってくるのに時間がかかったりもした。そのため事前にロープ等でエリアの明確な区分があったほうが利用者にもわかりやすく、安全管理の観点からも良いという意見も運営側からの意見としてあった。また、足こぎペダルボート座礁の危険性については、ボートを借りた事業者が普段使っているところも水深60センチ程度の浅い池であることから座礁の危険は少ないと考える。客層は家族連れ、親子での利用が多かった。

ランニングコストは、船の乗り降りのサポートと受付スタッフの人件費程度なので、例えば、他の事業(例えば飲食店)との組み合わせで実施すれば、コストもさらに下がり収益性はあると考えられた。





3.5.5.2. SUP CAFÉ 体験＋ツアー

昨年検証した SUPCAFE と SUP レンタル事業に関しては、わかやま水辺チャレンジにおいて SUP ツアーを実施し、ツアーコースを検討した。

- ・ SUP 利用者 10 人
- ・ SUP 売上 12,000 円



3.5.6. イルミネーション

昨年度に引き続き、夜間景観の向上を目的として、ライトアップ社会実験を行った。

今年度は限られた条件の中で、確実にインパクトを残すことを目的に実施方法や実施エリアの検討が必須であることから、他地域で照明による夜間景観創出で多くの実績を持つ照明デザイナーの長町志穂氏（株式会社 LEM 空間工房代表取締役）の協力を受け、実施エリアのリサーチ、夜間景観創出の意味や価値を理解するためのレクチャーを行い、照明点灯による夜間景観創出を実施し、その効果をはかった。

3.5.6.1. 実施エリアについて

社会実験実施エリアの夜間の現状をリサーチした上で、特に景観的価値・文脈的価値のあるポイントをピックアップし、以下の場所を選んだ。

図表 3-5-12 : ライトアップ実施場所 1～6



ライトアップ実施日と期間は社会実験イベントに合わせた1日限定とし、WEB等による事前告知のほか、実施日当日はイベント会場での周知のほか、実施エリア付近で歩行者等に向けたチラシの掲出を行った。

図表 3-5-12 : ライトアップ お知らせ掲示

WAKAYAMA MIZUBE CHALLENGE
水辺を彩るライトアップ(夜間景観社会実験)のお知らせ

わかやま水辺プロジェクトでは、10/20(土)の夜に、水辺やまちの魅力・価値を再発見するプログラムのひとつ「水辺を彩るライトアップ」を行います。

当日は夕暮れ時から、市堀川の水辺に並ぶ歴史的・文化的価値を秘めたお宝「景観資源」をライトアップし、夜のまちなみを彩る風景づくりにチャレンジします。

当日、たくさんの方々に夜のまちにお出かけいただき、水辺の夜間景観をご覧ください！

ライトアップをご覧いただいた方は、ぜひアンケートのご協力をお願いします！

<https://goo.gl/forms/G2f3rMLbLqowgpEb2>

ライトアップ実施 MAP

水辺を彩るライトアップ

実施時間：10月20日(土曜日)
点灯 17:00 / 消灯 23:00

ライトアップの鑑賞は橋の上や水辺の遊歩道からの他、当日 21 時まで運行するリバーシャトルクルーズ船をご利用ください！

WAKAYAMA MIZUBE CHALLENGE

日時：10月20日(土曜日) 11:00～21:00
場所：京橋プロムナード(本部) | 京橋駐車場広場
市堀川の河川・水辺空間
詳細は <https://www.wakayamamizube.com> をご覧ください！
*第14回わかやま城下町ハルも同時開催します！

[問合せ] わかやま水辺プロジェクト 事務局
(株式会社紀州まちづくり舎内)
TEL | 073-425-6583

3.5.6.2. 照明演出について

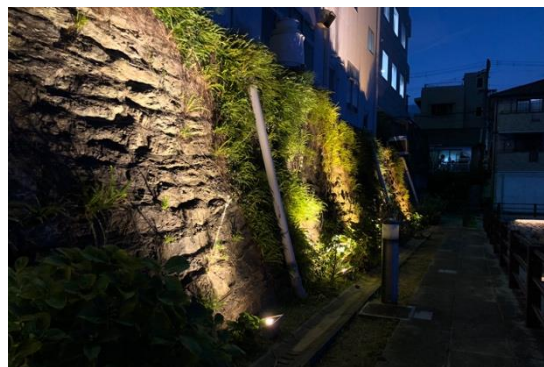
すでに市堀川では京橋プロムナードと京橋駐車場付近の遊歩道エリアで LED ストリングライトを用いた整備が行われ、イルミネーションによる夜間景観がつくられている。今回の実験ではこれらの表情とは違う照明演出による夜間景観の創出をねらうこととし、スポットライト等を用いたライトアップによる照明演出を実施した。

(※寄合橋欄干は当日強風による安全確保のため実施取りやめとなった)

中橋



遊歩道沿い石垣



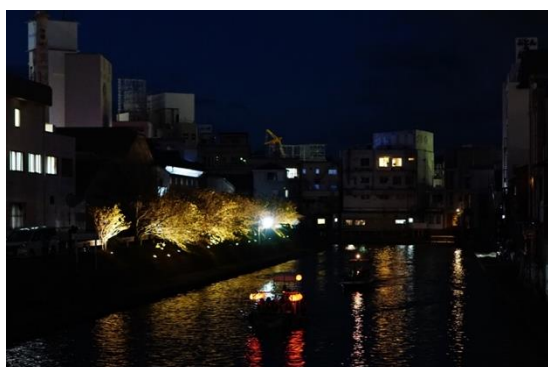
遊歩道護岸



旧ボランティアサロン外壁



桜並木



照明演出の内容は主に LED スポットライトを用いたもので、遊歩道護岸は LED テープライト、中橋と旧ボランティアサロンについては調光装置を使用して、光の色を変化させ、多様な景観創出を試みた。

3.5.6.3. 成果と課題／検証項目の評価

アンケートは主に夜のシャトルクルーズ乗船者に行ったほか、掲出チラシに掲載した QR コ

ードからアクセスできる WEB 上のフォーマットを利用し、歩行者などをターゲットに実施した。

回答内容を見ると、ライトアップが中途半端である、目的がわかりにくいという意見や PR が不十分であるなどの意見もあったが、ライトアップ全体は概ね好印象という結果を得ることができた。特に中橋、旧ボランティアサロン外壁、桜並木の評価は高く、これらは残して欲しいという意見も多い結果となった。

また、ライトアップによる効果として、夜間の散歩など外出のしやすさ、観光客の増加への期待、飲食店が増えることによるまちの賑わい創出への期待のほか、明るくなることによるまちの安全安心への寄与という効果も期待できる意見、地元住民も夜の外出機会創出も期待できるといった意見が得られた。

ライトアップの周知、見てもらうための効果的な手法としてはナイトクルーズの実施、オープンテラスのある川沿い店舗の充実と言った意見などから、河川空間の利活用の有効性を確認できた。

- イルミネーション（夜間景観）は観光舟運の見せ場のひとつとして成立することがわかった
- 夜間景観の整備はまちなかの夜の楽しみ方を PR する上でも効果が期待できるコンテンツであり、夜間景観が整うことで水辺—まちなかの回遊性をつくることも期待できる。
- 日常の水辺空間においても夜間の安全・安心など心理面への効果も期待でき、地域住民のまちなかへの楽しみ方を変える可能性も孕んでいると考えられる。
- 社会実験で実施したイルミネーションについて、市や関係企業団体などと協力して、常設整備のための手法を考えると共に、夜間景観の魅力を PR する工夫も考える必要がある。
- 夜間景観の整備により、これを活かすコンテンツづくりが進んでいくことにも期待する。例えばライトアップされた景色に魅力を感じ、飲食店などの出店を考える事業者があらわれる事で、水辺の空きテナントへの人気が高まり、長期的には建て替えやリノベーションなどの不動産価値向上への波及も期待も考えられる。

3.5.7. 総合学習

水辺を題材にしたアクティブラーニングについて昨年実施した伏虎義務教育学校にヒアリングを実施したところ、3年生の中山義之先生が興味を示され（株）総合水研究所の平井研氏を交え数回にわたる打ち合わせ実施し、3回に渡る学習機会を提供した。

1回目は6月1日に生きもの調査を平井先生と県立自然博物館の楫先生による生きもの調査を実施した。前日より川に入り、生きもの採集を実施して頂いた。蟹、フナムシ、ボラの稚魚、ハゼなどが見つかった。当日子ども達の前で、投網、蟹籠による採集を実施したが獲得できなかったのは残念であった。しかし、前日採集した生き物を観察し子ども達の興味

を引くことができた。

2回目は6月21日に内川を綺麗にする会の野井一重氏に60年程前から今までの市堀川の歴史を教えてもらった。これを受け子どもたち自らも聞き取り調査等を実施した。

3回目は7月13日大人が考える市堀川水辺魅力アッププランと題し、(株)紀州まちづくり舎の吉川誠人氏にこれまでのわかやま水辺プロジェクトで市民の方から集めた意見を元に作成したプランや実施している社会実験について説明して頂いた。

以上3回に渡る学習機会を元に子ども達は、自分たちでこども水辺未来プランを考えた。



以下中山義之先生による報告を転載する。

単元名『市堀川の水辺の未来を考えよう』

実践者：中山 義之(和歌山市立伏虎義務教育学校3年3組)

《実践概要》

学校への登下校で通ったり、塾が終わった後、迎えを待っている間に遊歩道で遊んだり、子どもたちが何気なく見ているのが市堀川である。近年、その市堀川を活用し、行政と民間団体が「MIZUBE プロジェクト」というまちづくり(中心市街地の活性化)の一端を担う活動を行っている。また、市堀川の横に公園を作る計画も進んでいる。今回は、最近注目の集まる市堀川に焦点をあて、これまでの歴史やMIZUBEプロジェクトを行っている人の思いを聞くことで、市堀川や自分たちの住むまちへの関心を高めたいと考えた。

まず、市堀川への興味づけを行うために、平井先生(環境アドバイザー)と楫先生(県立自

然博物館)をゲストに迎え、生き物観察会を行った。

次に、昔の川についての調査を行った。また、内川をきれいにする会の野井さんからも60年程前から今までの市堀川の歴史を教えてもらった。その際、船に乗って市堀川を子どもに体験してもらいイベントを行ったり、MIZUBE プロジェクトというチームが活動をしたりしているということを教えてもらった。



そして、MIZUBE プロジェクトの吉川さんからどうして市堀川の水辺を盛り上げようとしているのか、どのようなプランを考えているのかを教えてもらった。吉川さんから「いいプランがあったら紹介してください。」との話をいただき、学級で「こども水辺未来プラン」を考えました。市堀川に足りないものを話し合うと、大人も子どもも「もっと楽しめる川」・「もっとくつろげる川」というキーワードが出てきた。それらのキーワードをもとに、具体的なプランを考え、前期課程の学習発表会で発表を行った。

(文責 中山)

《水辺プラン(抜粋版)》

— 1 組 —

【水辺の宿泊施設】



【市堀川の生き物が観察できるカフェ】



— 2 組 —

【学べる施設】



【水辺のスポーツ施設】



— 3 組 —

【くつろげる公園】



【カヌー体験】



- 水辺をテーマにした総合学習は、身近に市堀川を感じている子どもたちの興味を深めることができた。大人たちがチャレンジしていることにも触れられて、これまでの市堀川と、今の市堀川、これからの市堀川をお互いに共有でき、とてもいい機会になったと感じている。汚いという川のイメージを払拭していくことが浄化への一つの方法であると考えれば、少しずつこのような活動を続けていくことが有意義であると考えられる。
- 今はまだこのような活動が担当の先生の裁量によるものであるため、安定的に継続していくためには、伏虎義務教育学校として取り組んでいる学習にまで昇華させる必要がある。もしくは学校という枠組みを超えて地域で取り組む学習機会として実施を試みてみるのも良いかもしれない。
- 何にせよ継続的に実施していくことがまちの未来を変えることに繋がることは確かである。
- 講師で協力してくれた方からも今回の取り組みについて高い満足度を得ることができた。子供たちに向けて環境教育や地域の歴史など、自分たちが暮らす街の事を知ることが地元愛を育むことや大人になった時に地元に戻ってきたいと思う動機につながると確信し、来年度以降ももっと関わりたいと話しておられたことや、水辺のまちづくりを推進する中間組織についても興味を持っていただき、協力も惜しまないと言って頂いたことは大きな成果である。
- 総合学習や体験学習に関わる人たち（学校の先生や協力者）やその中身を保護者や地域の大人たちに発信する仕組みや評価する仕組みを作ることが課題であり、この取り組みの成功の鍵を握っている。

3.5.8. その他

3.5.8.1. 自転車イベント

社会実験の一環の一つに水辺での自転車利用の活動があった。2018年10月31日（水）「ちゃりんルート 26」の仮屋氏による水辺チャリンコツアー企画である。京橋駐車場をスタートし中橋を渡り和歌浦へ向かう名所を巡るツアーで和歌川沿いを走って帰ってくる企画であった。

●協力者の声：ちゃりんルート 26：仮屋圭輔氏



水辺と自転車は直接関係ないが、中心市街地に人が集まり、それを利用することで、移動手段としての正しい使い方や、楽しみかたの一つとして提案したいと考えている。中心市街地だからこそ車ではない移動や、観光の一環として使えたらいいと考えている。そういう意味合いで関わると感じている。

水辺は、まちづくりのいい材料であり、雰囲気作りに貢献できる。感じのいいまちになれば、自転車で走るのも気持ちいいし、消費につながっていくと考えている。今後も協力はするし、もうちょっとやりたい気持ちもある。

3.5.8.2. 市堀川周辺の不動産投資についての考察

これまで、水辺に魅力を感じて水辺に開いた店舗展開をしているお店は少なからずあった。リノベーションまちづくりを中心にまちなかの活動が盛んになりつつある中で、水辺をまちづくりに活かす活動も活発になってきている。市堀川周辺にも遊休不動産が点在し、その利活用が進んでいる。ハウスブルーネ、水辺座、ミートビル、建築士会館等の事例を考える。

第1回リノベーションスクールの案件であった京橋駐車場前の集合住宅ハウスブルーネは、1階部分のベランダを水辺に開いてオープンデッキにした1つのカフェをきっかけに、現在は3部屋ともオープンデッキにリノベーションされ、住宅ではなく商業用に活用されている。水辺座は市駅前の携帯ショップあとの物件は日本酒バーとしてリノベーションされ、水辺に大きな窓をしつらえ市堀川に沈む夕日が眺められる魅力あるお店となっている。中橋の西側エリアでは、ミートビルに焼肉店、アメリカン雑貨店、お弁当屋のほかハンバーガーショップのオープンが予定されている。建築士会館では、2019年2月にチョコレートショップ「スマイルチョコレート」がオープンし、古本屋「紀国堂」もオープンした。また、こども科学館前の市堀川沿いの空地には1階を飲食店にした住宅建築が検討されたなど、市堀川周辺の不動産の動きも少しずつ活発になりつつあるのを感じる。

ハウスブルーネ



建築士会館1階 古本屋



建築士会館1階 チョコレートショップ



こども科学館前の市堀川沿いの空地



3.5.8.3. 中間組織について

公共財である水面や河川敷などの河川空間について、一個人の思いから独占的に使うことについては公共性、公平性などの観点から問題がある。

今回社会実験に協力してくれた飲食店舗の方々も、以前から度々行政に行政に相談を持ちかけたり、要望を出したりしたが、なかなか受け入れられない現状である。

このような状態の中でも、店先の河川空間に椅子やテーブルをおき、水辺の魅力を味わいながら食事が楽しめる場所作りを実践したり、川そのものを活用するための施設をつくるなど、ゲリラ的手法を実践したり、川の風景を生かす店作りをするなど、河川の魅力を使いこなす思いある飲食店舗があった。

このような思いや行動を評価すべく、地先利用の社会実験として行為の適正化をはかり、飲食店舗に河川空間の利用に携わる機会をつくり、関係する店舗事業者にこのような取り組みがまちの魅力づくり・賑わいづくりに寄与しているという体験を得てもらうことを狙った。

和歌山のまちづくりにおいては、「リノベーションまちづくり」を通して市民が「個々の思いや理想」をかたちにし、まちと関わる事の経験値を蓄積してきているが今後は「個々の思いや理想」を地域に示し「共通の思いや理想」に育てること、共有をはかることが特に重要になり、そのための仕組みや関係性をつくることが重要にもなる。

このような思いある事業者たちの主体性と地域の理解や応援を得ながら行政、地域の双方と協働して関わりあえる主体によって水辺を生かしたまちづくりの推進をはかることが望ましいと考えている。

河川法の規制緩和により、民間事業者による河川敷地の包括占用と利活用の道が開かれているが、このスキームの中でも包括占用を受ける主体には、これらが求められることから、和歌山における水辺を生かしたまちづくりを取り組む主体－中間組織のあり方について示していく。

3.5.8.3.1. 中間組織の役割について

これまでの社会実験の運営を通して得た成果や課題から、水辺を生かしたまちづくりに関わる推進主体の役割について挙げる。

- 水辺空間利用に関する各種ルール・ガイドラインの策定
公共空間である水辺の包括的利用は、公共性・公益性への寄与が求められ、一個人の独善的な利用行為が許されるものではない。地域性や環境、特性等を生かし、公共空間が適切に管理運営し、利用していくために必要な様々なルールづくりは必要不可欠なものである。ここで言う各種ルールは中間組織の目的や役割、業務を示すことから、水辺空間の使い方や安全管理、緊急時の対処、良好な景観や環境を作るためのデザインに関すること、公共空間利用に関する様々な責任の明確化、リスクヘッジに関することなどが挙げられる。水辺空間利用に参加する事業者には、これらのルールを十分に説明し、理解を得て利用することが必要である。同時に公共性・公益性への寄与－パブリックマインドを備え、醸成するために、中間組織の一員になることが望ましい。
- 店舗事業者との利用調整
今年度の地先利用社会実験の取り組みについて、来年度以降も続けていくために策定したルールを運用し、河川敷地を利用する事業者にもルール順守が徹底されるようにマネジメントを行う、また、新たに河川敷地の利用を希望する事業者に対しては、あらかじめ各種ルールの説明や利用スキームなどの説明し、水辺空間利用への賛同を得ることができるよう務める。
- 河川管理者との利用調整
事業者の利用計画をもとに河川管理者と協議を行い、河川敷地占用許可の手続きを行う。また策定する各種ルールについて、河川管理上の問題・課題について助言を受け、内容について協議を行う。
- 地域住民等との利用調整
地先利用を行うエリアの地域関係者と利用に関する説明と助言を受け、利用内容等の合意形成がはかれるように、あらかじめ調整を行う。これまでの社会実験で利用実績のないエリアで新たな取り組みを行う場合は特に地域関係者等とのコミュニケーションを緊密にとり、予見されるトラブル等を回避できるようなマネジメントが特に重要になる。

- 許認可手続きへの対応
河川占用許可に必要な手続きを一元的に受け付け、許認可取得に必要な書類の作成や事務手続きを行う。合わせて地先利用する事業者から利用計画の内容が用意している各種ルールに沿っているかを判断し、必要に応じて是正等指導する役割も担う。河川空間利用に係るワンストップ窓口的な役割である。
- 取組のプロモーション
推進主体の活動目標や地先利用の内容や参加事業者の紹介、その他水辺を生かしたまちづくりに関わる情報の取りまとめと管理、ツール作成、各種問い合わせ等への対応を行う。
- 河川管理への協力
河川空間の定期的な清掃活動など、利活用の取り組みが河川環境の維持管理に貢献できる取り組みを行う。
- 規制緩和を受けるための調整（地域合意をはかるスキームづくり）
河川法の規制緩和（河川敷地占用許可の特例）を受ける手続きを和歌山市と協力し、河川管理者である和歌山県ともあらかじめ進め方などの確認を早期に行う必要がある。特に規制緩和の要となる「地域合意をはかる協議会の設置」については、構成メンバーの検討と参画打診などの事前調整は需要である。
- 組織運営に関わる事務業務
多様な人たちで構成されると思われる推進主体では特に高い事務局機能を備える必要がある。
- 「水辺 NEXT」「水辺ビジョン」を元にした水辺を生かしたまちづくりの推進
「水辺 NEXT」「水辺ビジョン」に示された将来像の実現を目指し、示されたアクションプランに取り組むことや、新たなアクションプランを立案・実践し、評価検証を繰り返し、水辺の街の魅力を高めると共に、中心市街地活性化に波及させていく。

3.5.8.4. 推進主体の構成について

水辺を生かしたまちづくりを推進する主体はこれまでの社会実験事業を通して関係性を作ってきた多様なステークホルダーの中から特に事業内容や職能的関係性が深い人たちによる初動が理想的である。次の構成が考えられる。

1. 水辺空間を利用する事業者（個人・企業・団体）
具体的には水辺に面する飲食店等の店舗事業者や舟運や水上アクティビティを行う事業者は、河川空間の利用が事業価値の向上に直結し、魅力的な利用方法の提供や付加価値の提供は河川環境の価値向上、まちの魅力向上への寄与も期待できる。公共的・公益的活動と見ることができると考えられる。
2. まちづくりに関わる事業者（個人・企業・団体）
推進主体が担う役割の多くは、多くのまちづくり活動に共通する行政関係者との協議による官民連携や地域住民など地元関係者との対話から育まれるコミュニティづくりの経験値が特に求められる。特に和歌山市では中心市街地活性化に取り組む

都市再生推進法人の存在は有効であり、水辺を利用する事業者を支える存在として期待できる。

この二者の属性を中心に各種役割を果たせる経験や知識、技術を持った個人、事業者、企業団体によって構成される組織（組織の体裁は問わない）で取り組んでいくことが望ましいと考えられる。

3.5.8.5. 推進主体が担う責任について

冒頭でも書いたように、これまで公共財である河川や河川敷地を独占的に使用することは困難であったが、規制緩和を受けることにより適正に利用できる仕組みが整ったわけだが、これは単に所定の手続きを行えばそれで済む、という簡単なことではない事を強く述べておきたい。

まず河川占用許可を受ける事のできる者として認められる事は利用計画だけでなくこれを事項する主体に関わる一人ひとりの評価、組織としての評価、地域の地域関係者などからの信頼を得なければならない。その上である意味では河川管理者に変わって利用する河川空間を地域にふさわしい在り方で維持管理する「自治の精神」が高く求められると考えている。

主体に関わる一人ひとりにパブリックマインドを育みあう努力を続けることも求められると考えられ、河川空間を利用する事業者には特にこの部分をしっかり説明し、いかに理解を得て推進主体の体制を固めていくかが重要である。

3.5.8.6. 運営に向けた課題

京都鴨川の納涼床や大阪北浜の北浜テラスを見ても運営を支える人たちの労力は甚大なものであり、初動期は特に想定外の事態と向き合ったり、様々な関係者との合意や目標共有を図ったりすることに追われると思われる。一方で運営を維持する上で直面するであろう大きな課題をいくつか挙げる。

ひとつは関わる人の多くが本業を持つことから、この取り組みに専従できる時間が極めて少ないと思われる。いわゆる裏方を担う人と地先利用を行う飲食店事業者では仕事の時間帯が正反対になることが多いため、コミュニケーションを図る方法の工夫が相当必要になるとと思われる。

運営にかかるコスト規模が分かりにくいことやコストそのものをどう集めるかも課題のひとつである。当面は大部分をボランティアに頼る事も強いる事も避けられないと考えられるが、早期から財源確保の方法を議論することや、資金調達については「受益者負担」「寄付や会費等」「スポンサー、タニマチなどの支援」「クラウドファンディング」など様々な手法にチャレンジし、資金調達のチャンネルを準備することが必要である。

また、発生する作業の単価をしっかりと設定する事も必要である。この活動がボランティアではない事、必要な費用を得る事で役割の責任を明確にできるという効果も得られると考

えられる。

- これまでの取組で民間事業者やそれを支える人々の中から水辺を生かしたまちづくりへの関心を持つ人たち同士のつながりが生まれた。
- 社会実験の参加事業者に対してパブリックマインドを備えてもらうことができたが、一方で公共益の意味が十分に伝わらず、自己の利益・満足を優先する事業者がいたことは、今後の水辺空間利用や中間組織運営においては、いかにしてこのような事業者を解消していくかが課題である。
- 社会実験の協力事業者、都市再生推進法人などの人たちが中間組織への協力の声を得ることができた。
特に地先利用に参加している事業者は引き続き、取り組むことを表明しており、中間組織に関わることも表明しており、地先利用の取り組みを本格化できることがわかった。
- 中間組織として地域との関わり方や声を拾う方法を早期に確立し、取組に関する理解を得て、関係性をつくるためのプラットフォーム形成が課題になる。
- 中間組織の運営に関わる財源、事業費の確保については、調達のための手法を探ることが引き続き必要であるが、水辺空間利用に参入事業者からの分担金・会費徴収など、受益者負担による予算確保や一定のボランティアも必要である。

3.5.9. 河川管理者との協議許可申請

河川空間の利用については管理者である和歌山県河川課および現場を管理する海草振興局とあらかじめ利用エリアや内容について協議を行い、河川占用許可を受けた。

占用目的や占用範囲については、昨年度と異なり照明社会実験実施に伴う占用エリアの協議や設備利用に関する点があったこと、設置工作物の有無が協議時点では不明な部分があることなどをあげたが、昨年度の実績をベースに協議が行え、許可申請の準備を進めることができた。

特に設置工作物の有無が不明なことについては、一旦占用面積を算定し、許可を得た上で、具体的に内容が決まった時点で報告、相談を行い、必要に応じて工作物の設置許可を新たに受ける、あるいは占用面積の変更許可申請を行うことで対応できるように手続き方針を確認した。

また昨年度の豪雨や台風時の状況を踏まえ、緊急時の撤去判断基準が一部改められた。

- これまでの社会実験を通して、河川管理者と協働関係を構築することができた。
- 許認可手続きのプロセスについてもこれまでの申請手続きの実績を生かし、効率の良い進め方を確立できる可能性を得た。
- 荒天時の緊急対応を体験できたことで、安全対策における経験値を蓄積できた。

3.5.10. PR

社会実験 2018 実施にあたり、PR は関係者を増やすことを中心に進めた。手法としては、SNS 発信、ポスター掲示、ポスティング、プレスリリース、ラジオ番組等、あらゆるメディアを活用した。SNS 発信においては PR 支援の会社「Crop(クropp)」に協力頂き、SNS 発信を中心にラジオでの広報や、効果的なプレスリリースを実施した。和歌山水辺チャレンジの事前告知は、駅貼りポスター、ポスティング、SNS による発信、ラジオ、新聞等メディアによる発信、ワンダーランドさん等関係者による発信等、多岐にわたって実施した為、効果的に告知できたと考える。また、和歌山城下町バルとの連携で、バルマップに水辺チャレンジのスポット紹介を掲載頂き、ともに PR を実施し良好な関係を築けた。

和歌山経済新聞、ニュース和歌山、アガサス、毎日新聞、まいぷれ、和歌山放送ラジオ、テレビ和歌山、FM ワカヤマなど

ワンダーランドによるメディアでの PR



ワンダーランドによるわかちか広場での PR



〇フライヤー作成

・印刷部数 8,000 部



○広報協力：南海電気鉄道株式会社

ポスター掲示 B2サイズ20枚、南海沿線各駅：

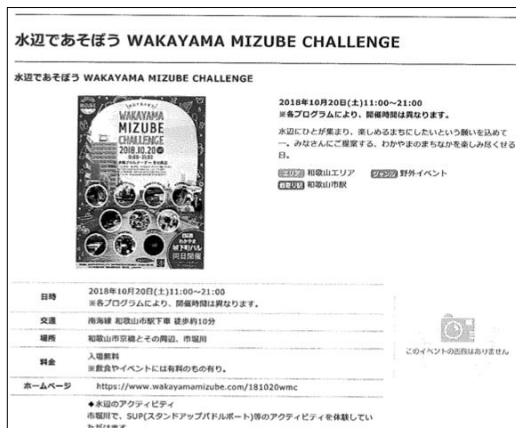
なんば、新今宮、天下茶屋、堺、羽衣、泉大津、岸和田、泉佐野、みさき公園、和歌山市、東松江、中松江、八幡前、西ノ庄、二里ヶ浜、磯ノ浦、加太、住吉東



沿線情報誌 NANTS10月号の誌面 掲載



南海フェイスクページ 記事掲載



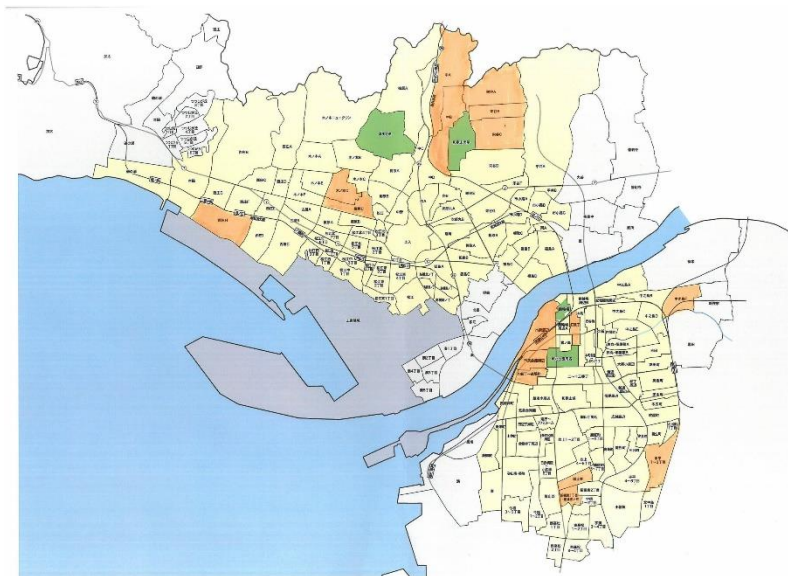
南海イベントカレンダー 記事掲載

○広報協力：西日本旅客鉄道株式会社、和歌山 MIO

- ・ JR 和歌山駅ポスター掲示：B1 サイズ6 枚、B2 サイズ3 枚
- ・ 和歌山 MIO ポスター掲示：B1 サイズ4 枚、B2 サイズ4 枚

○ポスティング

- ・ ポスティング数：5,000 部



オレンジのエリア
に配布

○SNS プロモーション

Twitter

- ツイート数 125
- 「👍」数 204
- フォロワー 61

○Instagram

- 投稿数 36
- 「👍」数 649
- フォロワー 131



○当日取材：和歌山経済新聞、毎日新聞、まいぷれ、和歌山放送ラジオ、J:com など

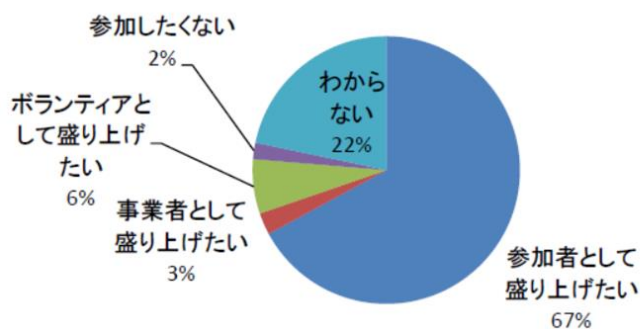
3.5.11. 滞留時間向上の試み

まちなかにせつかくたくさんひとがくる機会を水辺でもうけるので、その滞在時間を少しでも長くするためには、道路レベルでひらかれていつでもだれでもよれるそういう気軽なお店が必要なんじゃないかという仮説のもとに実験してみた。結果、たくさんひとに買ってもらったり、アンケートに答えていただいたりした。また、このプロジェクトの価値を対面でご説明したりした結果、多くの方々が水辺チャレンジの賛同者になった。

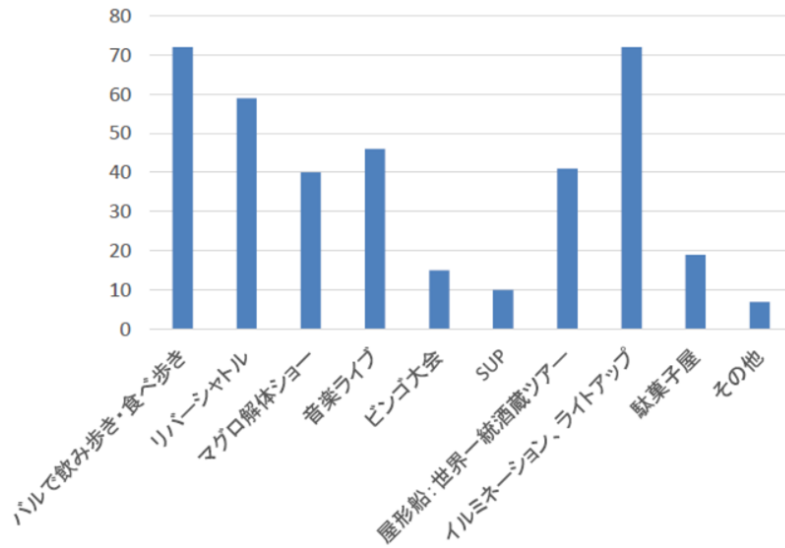


以下、アンケート調査の主な結果を示す。

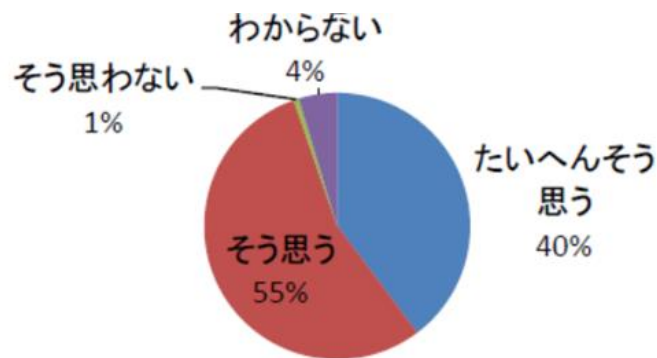
1) 今後イベントや取り組みに参加して一緒に水辺を盛り上げていただけますか？



2) 水辺チャレンジのどれがまちなかの魅力向上につながりそうか？



3) まちなかのお店が道に対して開かれたものになれば魅力向上につながるか？



3.5.12. 社会実験の総括:2018 年度

2018 年度の社会実験は、2016 年度に掲げた、OODA ループ（観察（Observe）、情勢への適応（Orient）、意思決定（Decide）、行動（Act））における、ビジョン検討、社会実験の検討をもとに行った 2017 年度の社会実験を実施、検証した結果からのフィードバックをふまえて、新たな課題を設定して、実施された。

和歌山の水辺とまちに必要な政策を策定するための4つのステップとそのループ

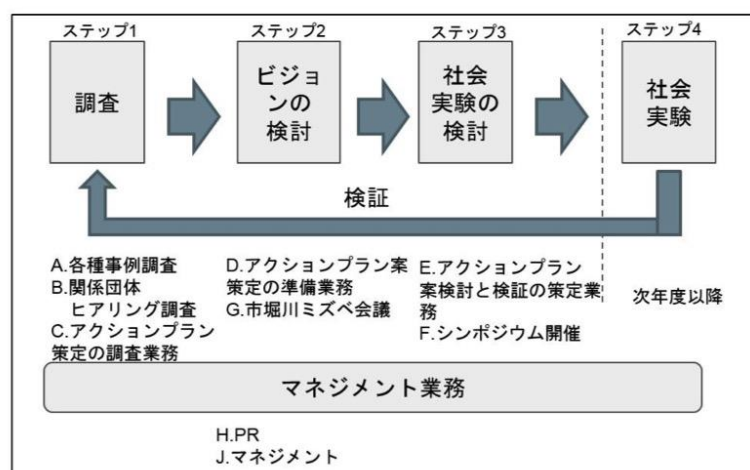


図1.業務の全体構造

- ステップ1. 調査: 現状把握、他の事例の調査、市内のステークホルダー調査
 - ステップ2. ビジョンの検討: アクションプラン準備、検討
 - ステップ3. 社会実験の策定: 社会実験のアクションプランと検証の策定
 - ステップ4. 社会実験
- ↳ステップ1. 調査にもどり、また繰り返す

3.5.12.1. かけた12のバリューの扱い

2016年に開催した2回の水辺会議の結果、和歌山の水辺の目標像として、12の価値観を設定した。2017年度、2018年度の水辺の社会実験やこれまでの水辺プロジェクトの推移をふまえて、達成度を確認し、評価をした。これらのバリューのなかには、修正が必要なものもあった。

12のバリュー (価値観)	短期	中期	長期	2018.02時点の評価	2019.02時点の評価
1 きれいな川、綺麗な水にしたい 豊かな自然環境にしたい (目標の修正が必要)	★ きれい 認知度の向上	★ 魚釣りを楽しめる	★ おまげ 流れがある	未達／継続 自分事に思える人を増やし、全市的な取り組みへ成長させる必要がある。イベントをやることで意識を高めることはできた。	★ 目標の変更をした。 達成すべき目標像は変わらないが、その実現性を高める方法について、当初の短期目標の以前にやるべきことが明確になったため、訂正した。
2 居場所作り	★ 椅子、本、ピクニック	★ ハンディック もって座れる	★ 子供が 全に遊べる 立ち止まる 場所	社会実験期間中は達成 運営者の思いが通じ、人が寄りたくなる空間ができた。一方で、お店のためだけの場所だと勘違いする人がいたこともわかっており、改善する必要がある。	★ 本年度は、長期占用を実施せず、居場所作りは行わなかった。 *広場運用に向けて、提言を取りまとめた
3 クルーズができる楽しめる街にしたい	★ イベントの 船交通		★ レストラン 船などの日常 利用 日常使いの 船交通	★ イベントの船交通は達成／ 達成したが課題がたくさんあった。今後は船のルートの環境整備、船の係留場所の確保、BtoCではなくBtoBのパートナーシップを模索し、さらに継続	★ 観光事業者との船観光実験／ 商品化への道のりは依然あるが、事業者にも可能性を感じていただいた。また、イルミネーションクルーズにも可能性があることがわかった。引き続き事業化へむけて環境と機運を整える。棧橋整備が課題。
4 緑の環境づくり	★ 芝生の広 食べられる ガーデン	★ 桜を植える 野花 食べられる ガーデン		★ 芝生ひろばの有効性を立証 その他は未達 船コースの緑化は進めたほうがいいのか？	★ 本年度は実証実験は実施せず植えられる植生について、調査を進めた。川沿いに植物をプランターで設置する案の設置、維持管理コスト、植生種類の制限が判明し課題である。
5 水上アクティビティがある街にしたい	★ SUP、カ ーなどの 手漕ぎ	★ SUPボ ート 貸しボ ート	★ ウオーター ボード ジェット、パ ワーボ ート、 外洋へ	★ SUPの実証 SUP体験を実証、経済性確保に難があるが、コンテンツとしてはありえる。今後SUPボートなどを実証する	★ SUPボートを実証。 当日飛び込み利用者がほとんどで埋まった。トラブルもなく、安全に利用でき、中心市街地の滞在時間向上につながる事がわかった。
6 納屋河岸／マルシェの賑わいづくり	★ 好期的な マルシェの 賑わいあり	★ 日常的な マルシェ開 催 周辺の商業 にも好影響 を		★ PR告知がきちんとできているものは、集客ができた。 継続実施によって、集客につながる可能性があることはわかった。	★ 短日イベント、mizube challengeを実施。ターゲットを子育て世帯に設定し、安定的な集客を実現。 [Challenge を単日から複数日開催での効果を検証してみたい。

12のバリュー (価値観)	短期	中期	長期	2018.02時点の評価	2019.02時点の評価
7 歩ける水辺、走れる水辺。健康な水辺	★ 毎朝ウオー キング	★ ウオーキング したくなる 環境整備 フットパスを 町中にもつ なげて整備	★ 日常でつか える水辺の 道	★ 未達／ ベビーダンス をやってく れた団体が いた。野天 で貸出でき るスペース があると、 ヨガやベ ビーダンス のインス トラクター にとっては 魅力的な 空間になる 可能性がある。	★ 実際に毎朝歩いて使っている人はす でに多い。フォロワーが増える状態 にはなっていない。夜間景観の実験 の結果、歩きやすくなったという 意見もあり、今後のきっかけづく りに期待。
8 いろんなイベントがおこなわれる水辺であってほしい。	★ 花火、映画鑑 賞	★ フェス。食 フェス 水上パレ ード		★ イベント運 営やイベ ント実施 者への営 業は手間 と時間か かり、中 間団体に かなり負 担がかかる。 この人件 費をどの ように捻 出するか、 幅広い 議論が必要 に思える。	★ 表現の場、発表の場として、水辺が 認知されることが実証された。利 用者の満足度も高かった。イベ ントがあると中心市街地には人 はくるがあらためてわかった。運 営の手間とコストが課題。主催者 になりうるステークホルダーの 意識の課題も。
9 食文化が育まれる水辺	★ フードカー フィンガー フード	★ 川床、食事 船	★ 牡蠣船 水辺の食 文化が認 知される	★ 飲食店の 経営を 実施。継 続運営さ れること で、その 認知度は あがる。 一方、ま ちなかに 客を送客 できるよ うなコン 텐츠には なってい ない。牡 蠣小屋の ようなコ ン텐츠を 試す必要 がある。	★ 河川通路の地先利用の参加企業が増え、来年度以降の継続的な河川敷地の都市・地域再生等利用区域の指定にむけた占用主体の協議に発展。高度成長期は場所がなくて水辺まで飲食店になっていったが、将来は水辺まで飲食店が増えて食文化が育まれるような和歌山であってほしい。
10 和歌山レガシー	★ 来歴に沿 った水辺 のあたら しい姿	★ 来歴に沿 った水 辺のあ たら しい姿 歩ける 水辺、歩 ける まち	★ 和歌山の 歴史とつ なげる 来歴に沿 った水 辺のあ たら しい姿 水辺にあ たら しい産 業を興 す	★ 未達／ 来歴に沿 った水 辺の 新しい 姿の模 索は、周 辺事業 者など と協 調し、あ らた な事業 をつ くりだ す必要 がある その た めの 戦 略 作 り を す す め、 水 辺 ビ ジ ョ ン に 盛 り 込 む。	★ レガシーとは、 かつてのあり方のなかから、未来へのヒントになること。伝統的建物をつくるうとかではなく、過去の水辺とひとの営みのありかたから、未来のまちのあり方をひもとくことである。 水辺の屋上／ 過去の水辺の利用をヒントに、まちのグラウンドレベルでの出来事を大切にすることを日常的に促していくことへの可能性を感じた
11 夜も楽しめる水辺	★ 夜間営業 する*1	★ 夜も明 るい夜 間景 観*1	★ 水辺の夜 間景 観を意 識し たお 店が 増 える	★ 実施済 み。継 続実 施に よる ファン が増 える こと がわ か つ た。 明 る い 伝 統 が ど も る 風 景 が、 安 心 感 を 生 む。	★ 夜間景観の向上のためにイルミネーションの実験を実施。照明で水辺の雰囲気が一変することがわかった。この雰囲気を活かして、どういふまちにするべきか、議論を巻き起こす必要がある。
12 学べる水辺	★ 学べる	★ 水に 触 つ て 学 べ る 機 会 が あ る	★ 常時水 に直 接 触 つ て 学 べ る 機 会 が あ る	★ 学 び の 機 会 が う ま れ、 提 供 す る 側 も 受 け る 側 も ど ち ら も 満 足 度 が 高 い	★ 子供達のアクティブラーニングの機会として、水辺の環境学習の可能性を実感。子供が常に水に触れて環境のことを学べる機会をつくれる環境整備が長期目標

1) きれいな川、綺麗な水、豊かな自然環境がある水辺（「きれいな川、綺麗な水にしたい、豊かな自然環境にしたい」から変更。願望ではなく目指すべき姿としての目標像として明確に表現した）

多くの人々が、綺麗な水質やごみのない河川環境を実現したいという思いを持っている。一方、水質汚濁の当事者性については依然として認識が低い。

水質をよくするためには原因を取り除かなければならないが、原因は単純なことでは説明するものではないことがよくわかった。原因を取り除くためには対象としているエリアを超えて多くの人々の合意が必要な下水道整備などの政策決定が必要であり、それには多くの人々の理解を得る必要がある。認知を高め、水質改善への機運を高め、水質改善の取り組みを「自分ごと」にすることが、このプロジェクトのミッションとなる。

当初の達成すべき目標像は変わらないが、その実現性を高める方法について、当初の短期目標の以前にやるべきことが明確になったため、短期、中期、長期目標を訂正した。

2018年の社会実験においては、水質環境問題の認知度向上につなげるために、子どもたちへの学びの機会提供をすすめた。子どもたちの川の環境への意識が高まった。

2) 居場所を作る水辺

都市に水辺があることで、公共空間に居場所が生まれるのではないかという期待である。ふだんの生活の中で滞留して、時間をすごせるそのような場所づくり、そしてその生活のスタイルが多くの来街者に和歌山の素晴らしさとして伝わることを目標とする。

本年度は、2017年度に実施した京橋駐車場での長期占用を実施しなかった。

一方、広場運用に向けて、提言*を取りまとめた。（*水辺NEXTに記載）

広場に居場所ができることにより、まちのひとが滞留しやすい場所になることはまちがいなく、単に観光客目当ての水辺ではなく、人々が生活のなかで豊かに感じる場所をまちなかにもつことが実現できる。そのような中心市街地のあり方を多くの人々と引き続き検証する必要がある。

3) クルーズができる、楽しめる水辺

市堀川にクルーズがあれば、アクティビティとして都市の魅力を発信する理由になり、来街目的になる。また、中心市街地に滞留機会をつくることにもなり、周辺の土地利用に影響を与えることもできることから、「クルーズができる、楽しめる水辺」を目標として掲げる。夜間景観との組み合わせも大いに可能性がある。

本年度は、観光事業者との船観光実験を実施した。商品化への道りは依然あるが、事業者の可能性を感じていただいた。また、イルミネーションクルーズにも可能性があることがわかった。引き続き事業化へむけて環境と機運を整える。同時に栈橋整備が課題である。

一方、中心市街地に、どのような客層をターゲットとするかという戦略がなく、クルーズがそのターゲットとどう整合するかは今後引き続いて検証が必要である。もし、観光客のような来街者であれば、クルーズと同様にまちのほかのコンテンツがどうあるべきかを含めて検証をする必要がある。

4) 緑の環境づくり

和歌山の中心市街地のなかで数少ない自然を感じることができる場所である水辺に、緑を増やすことができれば、和歌山の中心市街地により魅力が増す。緑を増やす方法は、公共の用地に市民が植栽し、管理することから、行政が直接整備した植栽帯に植栽することまで、さまざまなレベルがある。

本年度は実証実験を実施せず植えられる植生について、調査を進めた。川沿いに植物をプランターで設置する案の設置、維持管理コスト、植生種類の制限が判明し課題である。既存のテラスで植物が植えられているところ、植えてもいいところを調査した。

5) 水上アクティビティがある水辺

まちなかの水辺が水上アクティビティをできる場所になれば、まちなかにあらたな体験価値が生まれる。来街者の滞留時間の向上や、賑わいの視覚化、水辺のまちとしての認知度向上につながる。

本年度は足こぎボートを検証した。当日飛び込み利用者でフル稼働となった。トラブルもなく、安全に利用でき、中心市街地の滞在時間向上につながる事がわかった。

水上アクティビティがある水辺が中心市街地にやってくる理由のひとつになる可能性をさらに実証することが望ましい。一方、栈橋と係留場所がなければ運営できない。また、中心市街地にどのような客層をターゲットとするかという戦略と水上アクティビティとの整合性が現状では検証できておらず、中心市街地にどのような客を呼び込んだらいいのか、幅広い議論が必要である。

6) マルシェの賑わいがある水辺

水辺の賑わいは、江戸時代においては物流の利便性の高いところに人々が集まるという理由でうまれた。現代においては、江戸時代のように物流が理由にならないので、賑わいを創出するためにはサービス産業を水辺に集積させることでしか実現できない。そのために、マルシェのような商環境が必要である。

本年度は、単日イベント水辺チャレンジを実施。ターゲットを子育て世帯に設定し、安定的な集客を実現。将来の水辺の賑わいを想起させるイメージを多くの人々と共有することができた。今後は、水辺チャレンジを単日から複数日程で開催した時の変化を検証するために再度実施することが望ましい。

7) 歩ける水辺、走れる水辺、健康な水辺

水辺を安全に歩いて、開けた空間があることを生かして、歩いたり走ったり、市民が健康増進につながる活動が活発になることが望まれている。そのような利用が増えるように、さまざまなアクティビティを通してユーザーの機運醸成と今後のインフラの整備につなげていく。

実際に毎朝歩いて使っている人はすでにいるが増える状態にはなっていない。夜間景観の実験の結果、歩きやすくなったという意見もあり、今後の推移に期待したい。さまざまなきっかけが必要だが、歩きたくなるような環境をハードソフトともに作り続ける必要があ

る。この環境作りは水辺だけではなく中心市街地をどう歩きたくなる街にするかと連動することが必要である。

8) いろんなイベントがおこなわれる水辺

水辺の開けた空間を生かした広場空間があり、ひとが集える物理的な場所があることに加え、その場所で表現をしたくなる表現者を惹きつけるような場所の魅力を生み出す運営や賑わいをつくるまちなかの営みを生み出す。

本年度の水辺チャレンジでの社会実験の結果、表現の場、発表の場として、水辺が認知されることが実証された。利用者の満足度も高かった。イベントがあると中心市街地に人がくることがあらためてわかった。運営の手間とコストが課題であるが、これは中心市街地のありかたとも共通する課題である。イベントを実施したところで、中心市街地の商業にいい影響が与えることができなければ、意味がない。また、主催者になりうるステークホルダーとの関係構築や、機運を高める必要がある。

9) 食文化が育まれる水辺

屋台のようなオープンエアの飲食店から、水辺に開けたカフェテラスのあるカフェまで、さまざまなタイプの水辺の環境を楽しめる飲食店が幅広い人々を中心市街地に引き寄せ、あらたな和歌山の魅力として発信される。

本年度は、地先利用の社会実験を進めた結果、河川通路の地先利用に参加する飲食店などの企業が増え、来年度以降の継続的な河川敷地の都市・地域再生等利用区域の指定にむけた占用主体の協議に発展。

高度成長期は中心市街地が密集しており、場所がなくて水辺までが飲食店になっていったが、将来は水辺があえて選ばれて食文化が育まれるような和歌山にしていくことが望ましい。

10) 和歌山のレガシーを生かした水辺

和歌山の城下町としての歴史を生かした水辺をつくる。表面的な見た目ではなく、まちが水辺とともに歩んできたことで生まれた価値をヒントに、水辺にあらたな賑わいをつくり、市内外に発信していく。

レガシーの定義は、かつてのあり方のなかから、未来へのヒントになること。伝統的建物をつくろうとかではなく、過去の水辺とひとの営みのあり方から、未来のまちのあり方をひもとくことである。

今年度は、過去の水辺の利用をヒントに、水辺の屋台を運用した。道行く車のなかから、声をかけられるなど、ストリートでの交流が促されるさまを目の当たりにし、まちのグラウンドレベルでの出来事を大切にするとコンテンツや営業を日常的に促していくことへの可能性を感じた。

11) 夜も楽しめる水辺

夜も楽しめるロマンチックな水辺を目指す。夜も楽しめる水辺がある街を目指すことで、

あらたなサービス産業を生み出し、あらたなまちのユーザーを増やすことにつながる。そのために、夜間景観をライトアップやイルミネーションで作りだし、その価値を生かしたあらたなサービスがうまれるように機運をつくる。

本年度は、夜間景観の向上のためにイルミネーションの実験を実施。照明で水辺の雰囲気が一変することがわかった。この雰囲気を活かして、どういうまちにするべきか、より多くのひとびととともに、議論を巻き起こす必要がある。

12) 学べる水辺

これまであまり触れる機会がなかった水辺の体験を通して環境や歴史の学びの場とすることで、環境への意識を高め、風土を知る機会となり、郷土への愛着に気付く機会となる。アクティブラーニングなど、あらたな教育的価値を実行できる場所として、文教地区として誘導している和歌山市の政策の後ろ盾となる。

本年度は、伏虎義務教育校の先生による、子どもたちのためのアクティブラーニングの機会として、水辺の環境学習を実施し、その可能性を実感した。子どもが常に水に触れて環境のことを学べる機会をつくる環境整備が長期目標。そのためにも、棧橋整備など、親水空間を整備することは必須である。

バリューから目標像へ

社会実験の実績をふまえて、これまでの 2016 年度に設定した 12 のバリューを願望ではなく、目指すべき水辺の姿、水辺プロジェクトの 12 の目標像とした。

3.5.12.2. 8つの仕組みと考え方、ミッション 2019

2016 年度にかかげた 8 つの仕組みの達成度合いと評価は以下の通りである。

8つの支える仕組みと考え方	短期	中期	長期	2018.02時点の評価	2019.02時点での評価
A 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する	水辺へのアクセスのノードここからさまざまなアクティビティに派生			棧橋利用の事業参入を引き続き誘致する。SUPは実験済み。技術的でないスワンボートの実証の設置。	増水時に撤去をしなければならない棧橋ではなく、常設棧橋の設置の是非を議論することをすすめる。棧橋の管理運営について、維持管理をどうするのか議論をすすめる。これは、舟運やアクティビティ、環境学習の機運の高まりと並行してすすめる。
B 中間組織:事務局提案			推進していくためのPPPのエージェント	中間組織運営は、自立経営できなかった。かなり人件費、労力がかかる。これをどのように負担するのか、議論が必要。協議会と中間組織は別組織のほうがいいのではないか？地域の合意形成と運営が一体的でないほうが、よいのではないか？	中間組織運営は、まず都市・地域再生等利用区域の指定にむけた合意形成と推進組織のあり方を議論することからはじめる。中心市街地活性化の議論の一部として水辺が扱われることが望ましい。一方、地域の合意形成のあり方は、和歌山ならではの取り組みを模索。中間組織運営に行政が組織運営を円滑にするために関与することもありうる。 *レファレンス>
C 官民連携のフェスをおこなう	官民の連携のよい事例を積み重ねるひとのつながりを作り続ける	官民連携の受け持ち部署が決まる	全市的な、官民連携の指針が生まれ、部門間を横断に刺した官民連携になる	民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになり、相互理解に役立った。	官側の担当部署がどこになるか、という議論を十分にすすめることができれば、民間は信頼関係を行政と構築することができな。また、水辺の魅力アップが中心市街地の活性化や観光活性化という所掌をまちづくり行政施策につながるため、市民の主体的なまちづくりの継続性のためには、部門間連携が課題である。
D 内川ファンドを含めた財源の確保			内川ファンドを含めた財源の確保	占用料の扱いを検討し、地域の魅力創出活動の財源になることが望まれるが、テナントからの家賃収入、イベント収入がどの程度見込めるかは現状は不透明	占用料だけでは、組織運営は難しい。他の収益事業とセットで運営することも検討する。また、民間の主体的なまちづくりを促すことを目的とした行政施策としての組織運営補助の検討もすすめる。
E メディア、PRを推進	メディア、PRを推進	企業が連携しPRにコミット		十分PR期間をもうけて、専任のPR担当者を設置できる状況がのぞましい。PR目録でのイベント立案が重要(もちまきで実証)	電鉄会社がPRに協力してくれたり、芸能事務所が協力してくれた。民間が集積して、組織として、まちを代表しまちづくりをすることの強さを生かした、PRのあり方を模索し続ける。
F 民間不動産の活用推進もおこなう	リノベーションスクール			水辺座などのリノベーションスクール案件ができて、水辺に関する関心の高まりがうまれた。引き続き水辺にあつたコンテンツがうまれるように、周辺事業者との協働をすすめる。	地先利用を通じて、事業者の水辺利用をさらに促進できる。地先利用ができる空き物件の把握、物件の整備、事業者のプロモーション機会創出、
G 交通を考える		レンタル自転車駐車場バス		京橋駐車場周辺に歩く人がいないことがあらためてわかった。また、イベント時に車線にはみ出す人の安全確保など、道路交通に関する課題が発見できた。これを解決するためには、より広範囲な中心市街地のなかの交通計画が重要であり、交通行政と連動して課題解決に取り組む必要がある。	自転車利用ノ *アンケートをとってみる。
H 協議会をつくる	やってみなはれの精神	ルール作り 透明性 責任ある運営		周辺の住民への音の問題による負担があることがイベント期間中に判明した。これを解決するために、ルール作り、意識の共有などを行う機関が必要であり、それを協議会が担うのではないだろうか？	信頼あるまちづくり活動には、地域へのルールの浸透と透明性、責任ある運営態度が大切である。

A) 棧橋、川の駅＝川との接点を維持する。

2017年度、棧橋がそもそもないと取り組み自体が生まれなため、将来公設によるインフラとしての棧橋設置の必要性が生まれることを期待し、実験を継続することとした。2018年、棧橋を設置し、2017年と同様に撤去の費用負担や、不安定な自作棧橋の課題などを感じた。

社会実験の結果、民間が棧橋をローコストで設置すること自体は可能であるということにはわかった。ただ、増水時のリスクをふまえると、撤去をしなければならない棧橋ではなく、常設棧橋の設置の是非を議論することが必要である。

可能であれば、和歌山市が河川管理者と協議をしたうえで、棧橋を河川区域内に恒久設置することがのぞましい。どのような棧橋がよいか(浮き棧橋がいいか、あるいは階段状の雁木がいいのか)は、引き続き議論が必要である。

また、民間は運営側として利用者のニーズがあることを確かめながら、利用促進をはかることへの課題や確からしさを今後も検証を続ける。舟運やアクティビティ、環境学習の機会がどの程度発生するかなど、実際に社会実験を繰り返すことで、把握をし続けていくことが望ましい。

この課題は、引き続き検討課題とするが、行政側でも実現可能な政策になりうるか、検討することとなった。また、この規制緩和を実現することそのものをミッションとし、他の規制緩和項目とともに、ミッション2019に位置付けることとなった。

B) 中間組織

2016年の報告書では、中間組織は、自立経営を目指すとしていたが、2017年、2018年度と社会実験をおこなったところコスト削減への可能性はあったが、自立経営への可能性を感じるような経済性を感じることはできなかった。

全国のエリアマネジメントや水辺利活用の事例をみても、和歌山市が自立経営できるような、中間組織を組成できるという楽観的な予測をたてることはできない。

一方、さまざまな突破力がある企画や実現性を高める運営を行うために、利害調整ありきの運営ではなく、「これまでになかった価値をつくる」ための実効性をもった実務組織としての中間組織の必要性は、実現した社会実験等を通して認識できた。実効性を優先するために、地域とのコミュニケーションがおろそかにならないように、地域の合意形成をはかる協議会の設置と中間組織はセットで実現する必要がある。

このような自立的組織の成立の厳しさと、必要性との間でどのような組織にするべきかはわからない。一方、本年度の社会実験の結果、地域の飲食店事業者に河川敷地の地先利用のニーズがあることから、そこからはじめ実現にむけて中間組織の体制を整えていくことが必要である。

そして、この中間組織が、水辺だけでなく、中心市街地活性化そのものを目的に掲げることが望ましい。

C) 官民連携のフェスをおこなう

民間と行政の仕事環境の違いが浮き彫りになった2017年度、相互理解が進んだ。今年度はその上で、水辺プロジェクトを引き受ける担当部署がどこになるかが決まらないままで、官と民の信頼関係を未来にむけて広げていくことが十分にできなかった。水辺プロジェクトがたくさんのおこなわれることで、どの行政施策との連携が必要なのか明確にならなかった点が挙げられる。部門間をまたいだ連携をおこなうための理由も必要である。

D) 内川ファンドを含めた財源の確保

2017年度は集客効果がなく、財源確保への難しさを認識した。組織運営をするためのコストは膨大で、それをペイするための収入をどう確保するかは結局見出すことができなかった。河川の占用料の扱いも検討したが、占用料だけでは、組織運営は難しい。他の収益事業としてどのようなものがあるか、検討が必要である。また、投げ銭や公的財源の投入などを含めて引き続き検討する必要がある。

E) メディア、PRを推進

2017年度終了時点では、PR目線でのイベント運営が課題だったが、本年度は集客も十分だった。協力をよびかけたことで、電鉄会社がPRに協力してくれたり、芸能事務所が協力してくれたりした。民間が集積して、組織として、まちを代表しまちづくりをすることの強さを生かした、PRのあり方を模索し続ける。

PRの目的は、水辺のまちづくりの認知度向上である。和歌山の水辺が、多くの方々が享受できる水辺の環境になるための実践があり、その実践が多くのの人々に認知されることを

通して、水辺のまちとしてのブランドを確立する。

F) 民間不動産の活用推進もおこなう

水辺座などのリノベーションスクール案件がうまれ、水辺に関する関心の高まりがうまれた。中心市街地が『目的地になる』ことを目指し、水辺にコンテンツが集積することを引き続きすすめる。

また、カフェ利用などの地先利用を通じて、事業者の水辺利用をさらに促進し、事業者の水辺への関心を高める。地先利用ができる空き物件の把握、物件の整備、事業者のプロモーション機会創出などが、さらなる水辺への参入意欲の向上につながると思われるので、中間組織のミッションとしておこなう。

G) 交通を考える

京橋駐車場周辺に人通りがないことは2017年度の社会実験ではっきりした。自動車に依存したまちの交通問題を、中心市街地としてどのように解決するのか、という大きな問題を水辺だけで解決することはできない。

車での移動を前提にしつつ、まちなかを歩ける街にすることで商業や賑わいに貢献する、という仮説をどのように実証するかは、今後引き続き検証を続ける必要がある。

H) 協議会をつくる

2017年度の反省を踏まえ、どのような地域をめざすのか、幅広く議論ができていればよかったが、できていない。今年度も、地域の住民の方から、社会実験の枠組みのなかで、実施されていた浮き桟橋の係留について手続き上や運用上の疑義が表明されるなど、地域との関係において、円滑ではなかったことが判明した。

協議会を設置し、信頼あるまちづくり活動のためにも、地域へのルールの浸透と透明性、責任ある運営態度を説明し、納得していただけるような努力の機会を設けることが重要である。

なお、8つの仕組みと考え方はミッション2019へと位置付けを変更し、6つの具体的な任務へと変更する。このうち、Aの桟橋は、具体的な整備目標へと変更しアクションプランへと変更、Gの交通を考えるは、中心市街地のあり方のなかでの位置付けが重要であるので、水辺プロジェクト単体ではなく、中心市街地で考えるべきとし、削除することとした。

ミッション 2019

1. 規制緩和

規制緩和がなければ、水辺のまちづくりをより深度化することはできない。和歌山の魅力のひとつに水辺が定常的に数えられる状態にするためにも、社会実験的に規制緩和をおこなった内容を定着化させる必要がある。規制緩和の領域として優先度がいちばん高いのが、「地先利用」である。また、栈橋の設置や、水辺の公園内での営業行為の許可など、さまざまな規制緩和が考えられる。規制緩和をうけられるようにするためにも、地域の機運をたかめていくことが必要である。

2. 推進主体の形成

規制緩和とセットでやらなければならないことが、水辺のまちづくりの推進主体の形成である。水辺のまちづくりを推進することに意義を感じる主体が組織として多くの他者をまきこみ、形成されることが重要である。

3. 地域の合意形成

水辺のまちづくりを許容し、和歌山の将来のため水辺を利活用することへの合意をしていただけることが、行政による規制緩和を実現する上で重要である。協議会を設置し、議論をすることが重要である。

4. 実践

計画するより前にまずやってみる、という精神は、水辺プロジェクトの重要な精神である。このことは、2016年のスタートから変わらない。

5. ユーザーの認知度向上

水辺のまちづくりの認知度はまだまだである。多くの方々が享受できる水辺の環境を実践するとともに、その実践例が多くの人たちに認知されるようにPRをすることが必要である。

6. 参入意欲の向上

これまでの社会実験でやってきたように、推進主体だけで実施できることの小ささは、他者との協働によってより大きな運動とすることで超えていける。

他者の参入機会、投資機会を支え、誘導することが必要である。

7. 公共投資の検討、実現

栈橋の設置や親水護岸の整備、緑化、イルミネーションの設置、公園整備や道路の歩道空間整備など、公共にしかできない投資も検討し、場合によっては実現できるようにしていく必要がある。

以上7つの課題のうち、最初の3つ「規制緩和」「推進主体の形成」「地域の合意形成」は三つ巴の関係で、どれかが欠けても成立しない。どれが優先ということではなく、同時並行で進めることが重要で、それにより、「実践」が生きてくる。

「規制緩和」「公共投資」のように行政が最終的に行うものと、「推進主体の形成」のように民間が行わなければならないもの、「地域の合意形成」のように行政と民間がともにおこなわなければならないものなど、官民それぞれに役割がある。いずれかが抜けても、これらの課題は解決しない。官民でともに取り組まなければならない。

参考文献

*3-1 社会実験を通じた道路利活用に関する調査検討について 秋山聡著 国土技術研究センター JICE REPORT25 (2014) 52-57P

*3-2 国土交通省道路局 社会実験とは
(<http://www.mlit.go.jp/road/demopro/about/about01.html>)

*3-3 豊島区 HP

*3-4 泉山 壘威, 中野 卓, 根本 春奈「人間中心視点による公共空間のアクティビティ評価手法に関する研究 : 「池袋駅東口グリーン大通りオープンカフェ社会実験 2015 年春期」のアクティビティ調査を中心に」)

*3-5 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 第6回発表資料から (公益財団法人リバーフロント研究所 HP より)

*3-6 Sensuous City[官能都市] 一身体で経験する都市; センシユアス・シティ・ランキング HOME' S 総研 島原万丈 編

*3-7 国土交通省水管理・国土保全局河川環境課田中里佳課長補佐の和歌山市での講演 (2017 年 3 月 13 日) の発表資料から引用。

*3-8 米軍式人を動かすマネジメント 「先の見えない戦い」を勝ち抜く D-00DA 経営田中靖浩著 日本経済新聞